ISSN 2187-0772

エジプト学研究第 18 号　2012 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.18, 2012

目次

〈序文〉 …… 吉村作治 …… 3

〈調査報告〉

第 4 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報
…… 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合　望・西坂朗子・高橋寿光 …… 5

エジプト　ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 16 次・第 17 次発掘調査－
…… 吉村作治・矢澤　健・近藤二郎・馬場匡浩・西本真一・柏木裕之・秋山淑子 …… 21

2011 年太陽の船プロジェクト活動報告 …… 黒河内宏昌・吉村作治 …… 69

〈研究ノート〉

両面加工石器製作の生産体制について
―ヒエラコンポリス遺跡エリート墓地出土資料の分析から― …… 長屋憲慶 …… 77

〈卒業論文概要〉

岩窟墓の形態変化とアマルナ時代の影響 …… 熊崎真司 …… 85

〈活動報告〉

2011 年度　早稲田大学エジプト学会活動報告 …… 93

2011 年　エジプト調査概要 …… 97

〈編集後記〉 …… 近藤二郎 …… 103

The Journal of Egyptian Studies Vol.18, 2012

CONTENTS

Preface ·····Sakuji YOSHIMURA ····· 3

Field Reports

Preliminary Report on the Fourth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition
·····Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI ····· 5

Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Sixteenth and Seventeenth Seasons
·····Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Masahiro BABA, Shinichi NISHIMOTO, Hiroyuki KASHIWAGI and Yoshiko AKIYAMA ····· 21

Report of the Activity in 2011, Project of the Solar Boat
·····Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA ····· 69

Articles

Bifacial Flint Production Groups in the Predynastic Egypt: Analysis of finds from Elite Cemetery at Hierakonpolis ·····Kazuyoshi NAGAYA ····· 77

Summary of the Recent Undergraduate Theses ····· 85

Activities of the Society, 2011-12 ····· 93

Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2011 ····· 97

Editor's Postscript ·····Jiro KONDO ····· 103

序文

『エジプト学研究』第 18 号が出ることになりました。今回は少々分量が少なくなってしまいました。本来書くべき若手研究者が、きっと忙しく書く時間の余裕がないのかもしれません。それはそれで時代の流れですから私がとやかく言えるものではありません。しかし、研究者って何だろうかという本筋論を考えてみますと、研究してナンボ、その研究を発表してナンボではないかと思います。私は今年で 69 歳となりました。弟子の諸君が来年の古稀に向けて論集を作ってくれることになり、それに載せるため紀要分に書くのでヒマがなかったとしたら申し訳ないと思います。しかし、全て研究者は自己の尊厳を守るところが原点です。ですからその判断は誰もがしばれません。しかし、「歌唄を忘れたカナリア」は『カナリア』ではないという真実も忘れてはならないと思うのです。今私はメルマガで 1 週間に 1 万字以上書いていますが、苦痛ではなく、むしろ楽しみです。よく書くヒマがありますネと言われますが、ヒマがあるから書くのではありません。書きたいことがあるからヒマを作るのです。この論法でいくと、若手の諸君は書きたくないのかなと思いますが、ひとりひとりの情況をみますと、きちんと自分の研究をやっている人が多いので安心します。ともかく世界一をめざしましょう。そして、それに、おくれないようにして下さい。

吉村　作治
早稲田大学名誉教授

調査報告

第４次ルクソール西岸
アル＝コーカ地区調査概報

近藤　二郎＊1・吉村　作治＊2・菊地　敬夫＊3
柏木　裕之＊4・河合　望＊5・西坂　朗子＊6・高橋　寿光＊7

Preliminary Report on the Fourth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition

Jiro KONDO*1, Sakuji YOSHIMURA*2, Takao KIKUCHI*3,
Hiroyuki KASHIWAGI*4, Nozomu KAWAI*5, Akiko NISHISAKA*6,
and Kazumitsu TAKAHASHI*7

Abstract

The Institute of Egyptology at Waseda University, Tokyo, has been working on the western Thebes since 1971. Since our first excavation at Malqata South, we have focused on the monuments from the reign of Amenhotep III such as Kom al-Samak, the palace of Malqata, the private tombs in the Theban necropolis, and the royal tomb of Amenhotep III in the Western Valley of the Kings. Following this direction of research, in 2007 the Supreme Council of Antiquities granted us the permission to work at al-Khokha area where we intend to clean, document, protect and conserve the tomb of Userhat (TT47), Overseer of King's Private Apartment under Amenhotep III, and its vicinity.

Although the tomb of Userhat (TT47) is one of the most important private tombs from the reign of Amenhotep III, comprehensive scientific research has not yet been conducted after the report of Howard Carter in 1903 due to the fact that its location had been missing. In the last three seasons, we uncovered the entrance of the tomb of Userhat (TT47), which has the lintel and doorjambs on both side. The lintel and doorjambs are carved with figures of the tomb owner, Userhat and text consisting of his epithets, titles, and offering text to Userhat.

In this season, we continued clearance at the tomb of Userhat (TT47) and its vicinity in order to obtain more information related to the tomb. The clearance revealed south-western corner of the forecourt. Also, after the clearance of one of the holes where the ceiling of the tomb had collapsed in the past, we identified the subterranean structure of the tomb. In the course of clearance, we found a number of different kinds of funerary objects from the debris. Notably, funerary cones which are inscribed with the name of Userhat and pottery shards which may have been related to the construction of the tomb were uncovered.

We also conducted the epigraphic documentation, architectural survey and conservation works at the TT174, Tomb -62-, TT264 and Tomb -330- in the vicinity.

＊1 早稲田大学文学学術院教授
＊2 早稲田大学名誉教授
＊3 サイバー大学世界遺産学部准教授
＊4 サイバー大学世界遺産学部教授
＊5 早稲田大学理工学術院総合研究所客員准教授
＊6 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員
＊7 早稲田大学エジプト学研究所客員次席研究員

＊1 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*
＊2 *Professor Emeritus, Waseda University*
＊3 *Associate Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University*
＊4 *Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University*
＊5 *Visiting Associate Professor, Research Institute for Science and Engineering, Waseda University*
＊6 *Invited Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University*
＊7 *Visiting Junior Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University*

1. はじめに

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1970 年代にエジプト・アラブ共和国、ルクソール西岸のマルカタ南遺跡で発掘調査を開始し、1974 年 1 月にコム・アル＝サマック（魚の丘）において、新王国第 18 王朝アメンヘテプ 3 世時代の彩色階段を発見した [1)]。この発見を受けて、新王国第 18 王朝アメンヘテプ 3 世時代をその後の主な研究対象とし、アメンヘテプ 3 世の王宮であるマルカタ王宮址、アメンヘテプ 3 世時代のルクソール西岸岩窟墓や王家の谷・アメンヘテプ 3 世王墓の調査など、当該時代の研究を進めてきた [2)]。

こうした研究の一環として、早稲田大学古代エジプト調査隊は 2007 年度から新たにルクソール西岸、アル＝コーカ地区に位置するアメンヘテプ 3 世時代の岩窟墓、第 47 号墓を対象に調査を開始した（図 1, 2）。調査の対象とした第 47 号墓は、アメンヘテプ 3 世のハーレムの長官などを務めたウセルハトという人物の墓で、アメンヘテプ 3 世時代の最も重要な墓のひとつである。第 47 号墓は同王治世後半に特有な、レリーフ装飾と列柱を備えた大型の岩窟墓であり、この墓の構造、装飾、被葬者の称号、家族関係などを明らかにするとともに、これらの資料をもとに研究を実施し、大型岩窟墓の特質と発展を解明することを調査の目的とした [3)]。第 47 号墓は H.A. ラインド（Rhind）や H. カーター（Carter）などの報告により 19 世紀からその

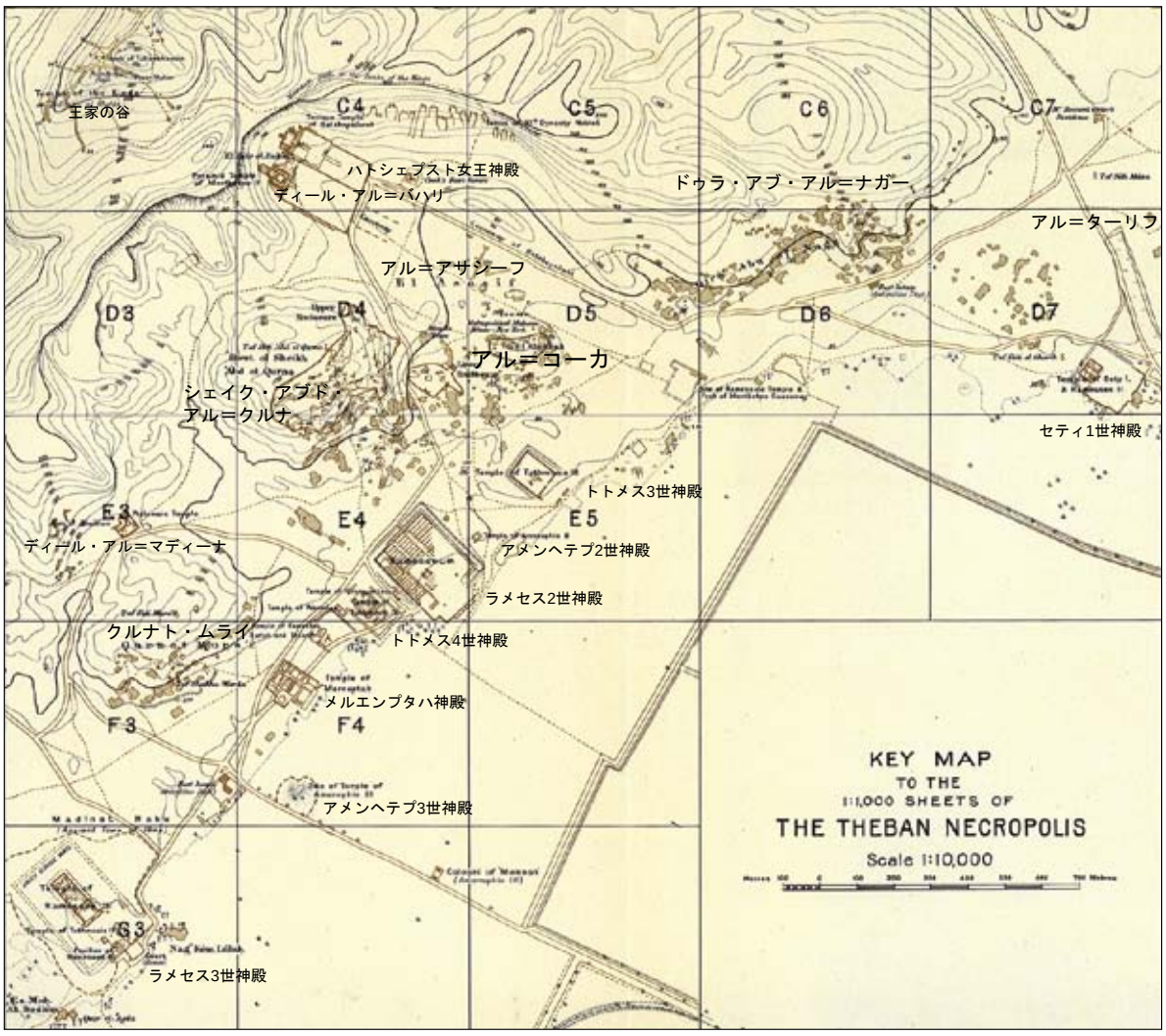


図 1　ルクソール西岸地図（Engelbach 1924: pl.II を一部改変、スケール 1:20,000）
Fig.1 Map of the Theban Necropolis

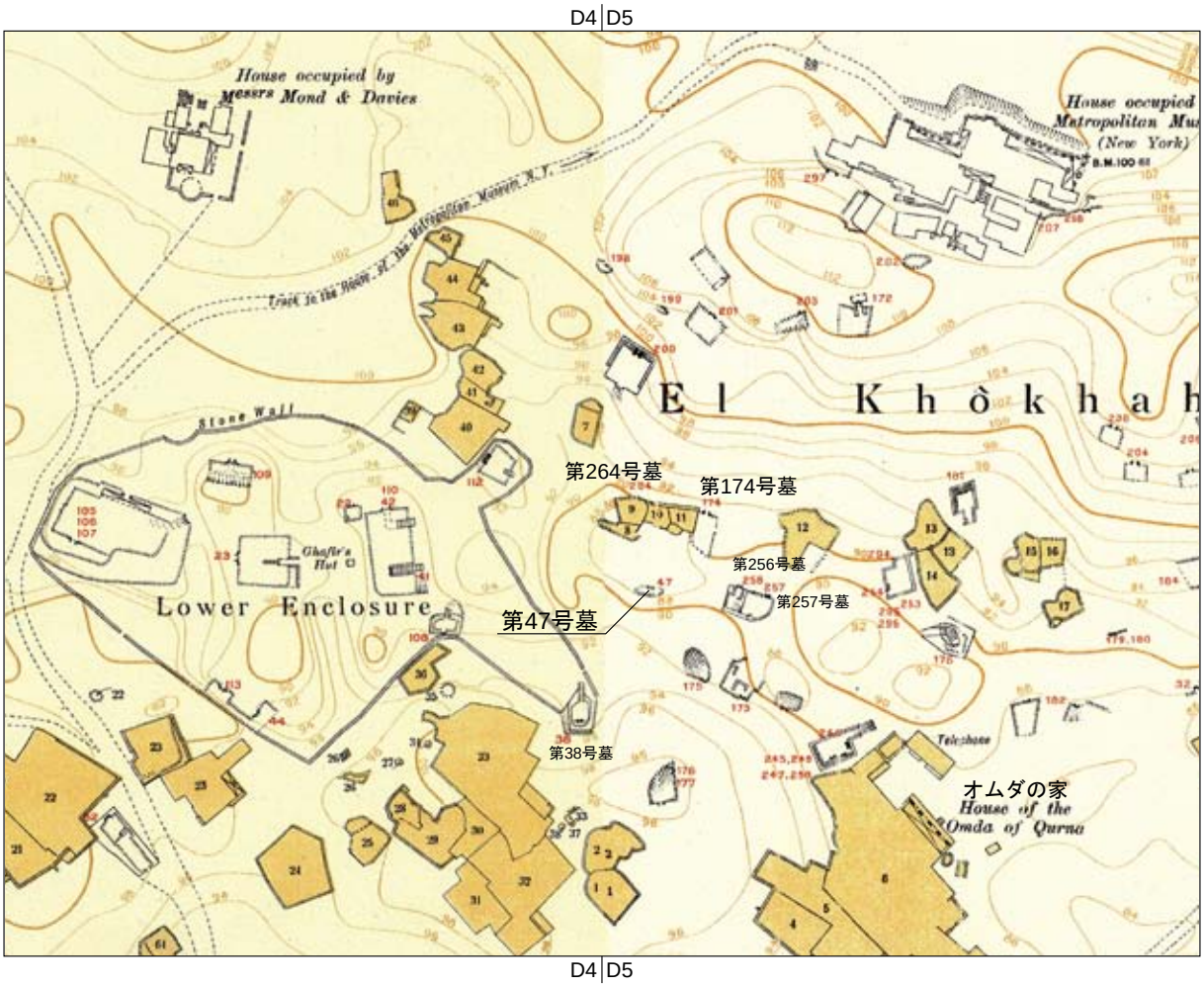


図 2　アル＝コーカ地区地図（“Map of the Theban Necropolis” of Survey of Egypt from 1922 to 1924 を一部改変、スケール 1:2,000）
Fig.2 Map of al-Khokha area

存在が広く知られていたものの [4]、総合的な調査は行われておらず、更に現在では墓は厚い堆積に覆われ、正確な位置すら不明となっていたことから、再調査が必要と考えられた。

第 3 次までの調査により、これまでカーターなどによって報告されていなかった第 47 号墓の入口と入口両脇の脇柱を新たに発見し、入口の詳細を明らかにすることができた。脇柱には、垂直方向に 5 行の碑文が刻まれており、下部には被葬者であるウセルハトが座った姿で描かれている。また脇柱の碑文から、これまで知られていたウセルハトの称号「王のハーレムの長官」に加え、「（王宮の）印綬官の監督官」という別の称号が明らかになった。更に、第 192 号墓（ケルエフ墓）のように、ウセルハトの名前や図像の顔などが意図的に削られた痕跡も確認された [5]。

第 3 次調査までの結果を受けて、2010 年度の第 4 次調査では、今後の発掘、保存修復に向けて、第 47 号墓の内部の状況を確認することを調査目的に掲げた。また、第 47 号墓の北側に位置する第 174 号墓、第 -62- 号墓、第 264 号墓、第 -330- 号墓についても、記録作業や保存修復に向けた観察、記録作業を引き続き実施することとした（図 3）[6]。

本稿では、こうした経緯と調査目的のもと、ルクソール西岸アル＝コーカ地区の第 47 号墓および周辺において 2010 年度に実施した調査について報告を行う [7]。

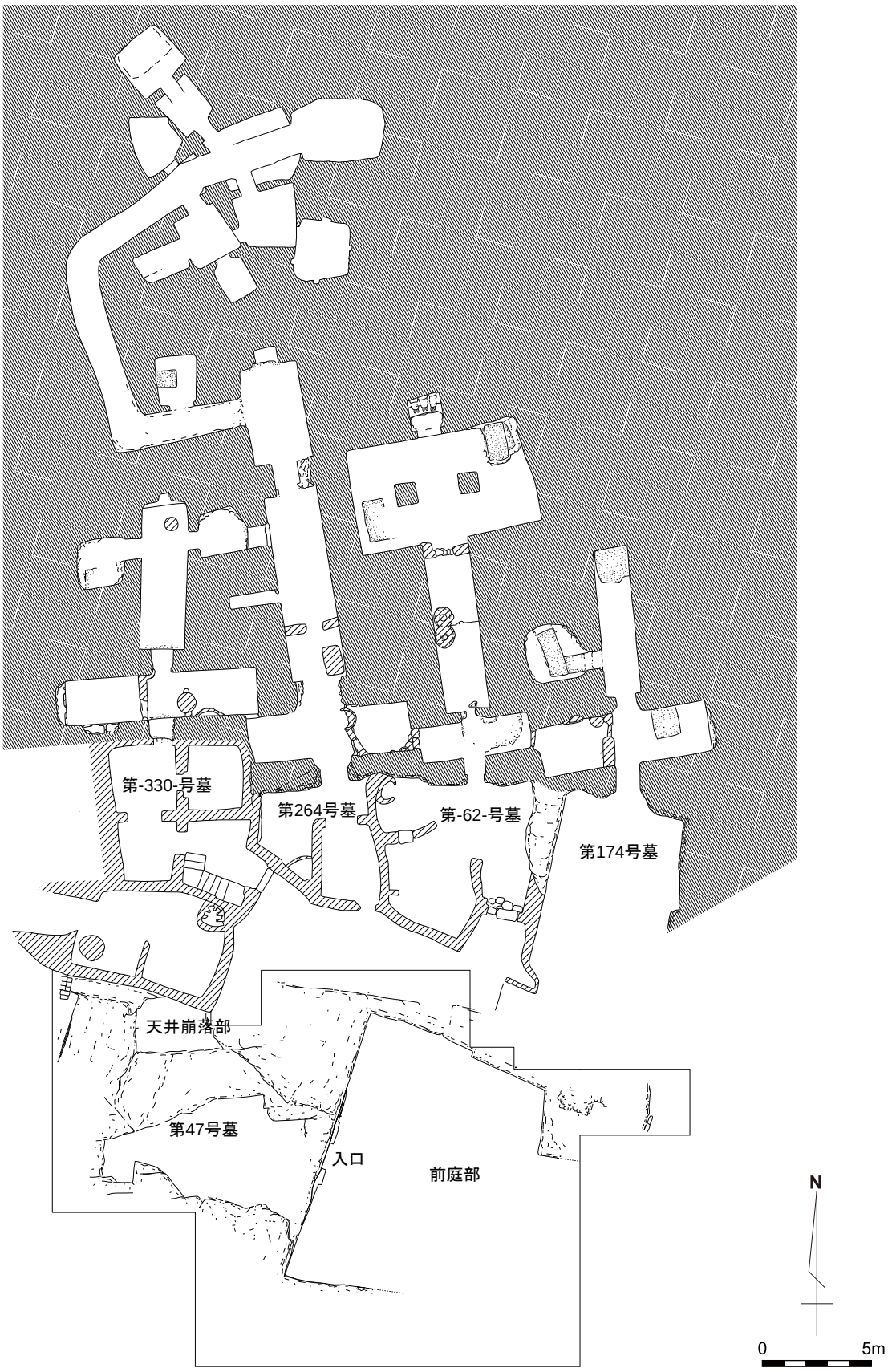


図 3　第 47 号墓およびその周辺地図（第 4 次調査終了時）
Fig.3 Map of TT47 and its vicinity

2. 第 47 号墓の調査

（1）第 47 号墓の発掘調査

今期調査では、主に 3 カ所（第 47 号墓前庭部南西、前室天井上の南西、前室天井上の北西）で発掘調査を行った（図 3, 写真 1）。

第 47 号墓前庭部南西では、南西コーナーを発見することができた。これにより前庭部の規模が東西約 9.1m、南北約 12.5m であることが明らかとなった。この数値はハワード・カーターの 1903 年の報告にある「前庭部の規模は 13m×9m」と概ね一致するものである（Carter 1903: 177-178）。

第 47 号墓の前室天井上の南西には、石灰岩チップ層の堆積がこれまでの調査で確認されていたが、この層の発掘調査を行ったところ、墓の造営に関連する遺物（バスケット片、オストラコン、顔料やプラスターを含む土器片など）が発見された。また、層を構成する石灰岩チップには、鑿痕が確認されたことから、この石灰岩チップ層は、墓などの造営のために石灰岩の岩盤を掘削したことによるものであると考えられる。堆積場所や堆積の方向から考えると、現在のところ、第 47 号墓造営の掘削による石灰岩チップの可能性が最も高いと考えられる。

第 47 号墓の前室天井上の北西の発掘調査では、前室天井の崩落個所のの掘り下げを行い、内部の状況を確認した。前室には柱を繋ぐ「梁」が確認された。また、前室から奥室に至る通路も確認することができた。その他、天井の崩落の状況についても確認することができ、今後の発掘、保存修復に向けて内部の様子を把握することができた。

写真 1　第 47 号墓およびその周辺、発掘調査後（北東より南西を見る、第 47 号墓入口前の日乾煉瓦壁は保護用）
Photo 1 TT47 and its vicinity after the fourth season of the excavation

（2）出土遺物の概要

今次調査において第 47 号墓およびその周辺より取り上げた遺物は 268 点である。以下に主要な遺物について報告する。

①石灰岩製レリーフ片

第 47 号墓の被葬者ウセルハトのものと考えられるレリーフ片が出土した（図 4.1）。背景は白色に塗られ、陰刻で 2 行の縦書きの銘文がある。文字は青、垂直銘文帯は赤で彩色されている。残存している銘文は *...wsir sn tꜣ...ḥ///i///imy-r///t...* であり、以下のように復元される。[*rdit iꜣw n*] *wsir sn tꜣ* [*nb nḥ*]*ḥ i*[*n*] *imy-r* [*ip*]*t-nswt* [*Wsr-ḥꜣt mꜣʿ-ḫrw*]「王のハーレムの長官ウセルハト、声正しき者、によって、オシリス神を称えること。永遠の主に対して大地に口づけすること」。銘文は右向きであり、オシリス神への礼拝の文章が記されていることから [8]、右側にオシリス神、左側にウセルハトの図像があったと考えられる。銘文帯の幅が 4.3cm であることから、墓の壁面装飾というよりは、ステラなどの一部であった可能性が考えられる。

その他、横方向に銘文が陰刻された石灰岩製レリーフ片が出土している（図 4.2）。[*s*]*ṯꜣ tw* の文字が残っている。

②砂岩製レリーフ片

横方向に銘文が陰刻された砂岩製レリーフ片が出土した（図 4.3）。銘文の一部である *mꜣʿt* が残っており、赤、青、黄色で彩色されている。様式的な特徴からラメセス朝に年代づけられる。

その他、*////wiꜣ=f nb////*「... 彼の船 ... 主（または女主人）...」の縦書きの銘文の残る砂岩製レリーフ片などが出土している（図 4.4）。このレリーフ片は、陰刻の文字に青の顔料が残っており、また削り取られた際の鑿痕が見られる。おそらく墓の脇柱などの一部であったと考えられる。

③オストラコン

第 47 号墓の前室天井上の石灰岩チップ層から出土した（図 4.5）。黒色の顔料で顔が描かれており、長い髭があることから、神あるいは王を表現したものと考えられる。類例はディール・アル＝マディーナから出土している（D’Abbadie 1959: pls.CXXV-2837, CXLII-2979, CXLIII-2971; Gasse 1986: pl.XXIII-3221; Page 1983: fig.23）。

④棺片

布を重ねた上にプラスターを施したカルトナージュ製の棺や木棺の断片が発見された。カルトナージュ製の棺片は、赤や青で彩色された首飾りの部分や（図 4.6）、ヌウト女神の一部（図 4.7）などがある。

⑤葬送コーン

今期調査では、11 点の葬送コーンを発見した。第 47 号墓の被葬者ウセルハトの葬送コーンや（図 4.8, 9; Davies and Macadam 1957: no.406）、その他、*Pꜣ-ḥqꜣ-m-sꜣ=sn*（図 4.10; Davies and Macadam 1957: no.267）、*Ḥmy*（図 4.11; Vivó and Costa 1998: 68）、*Mnṯw*（図 4.12; Davies and Macadam 1957: no.362）、*Nn-tꜣ-wꜣ-r=f*（図 4.13; Davies and Macadam 1957: no.13）、*Mnw-nḫt*（図 4.14; Davies and Macadam 1957: no.113）などの葬送コーンが発見されている。

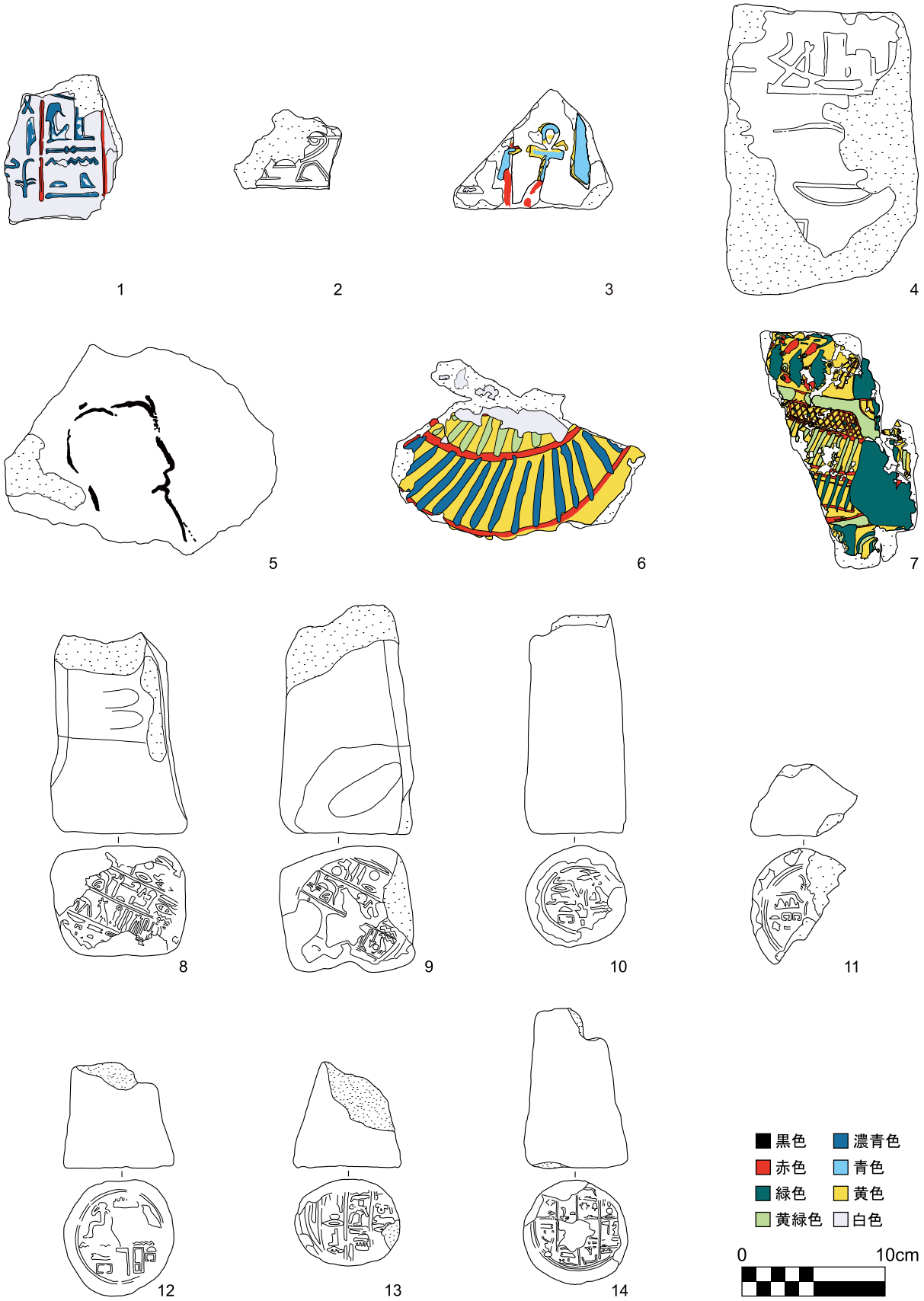


図 4　第 47 号墓およびその周辺出土遺物（1）

Fig.4 Major Finds from TT47 and its vicinity (1)

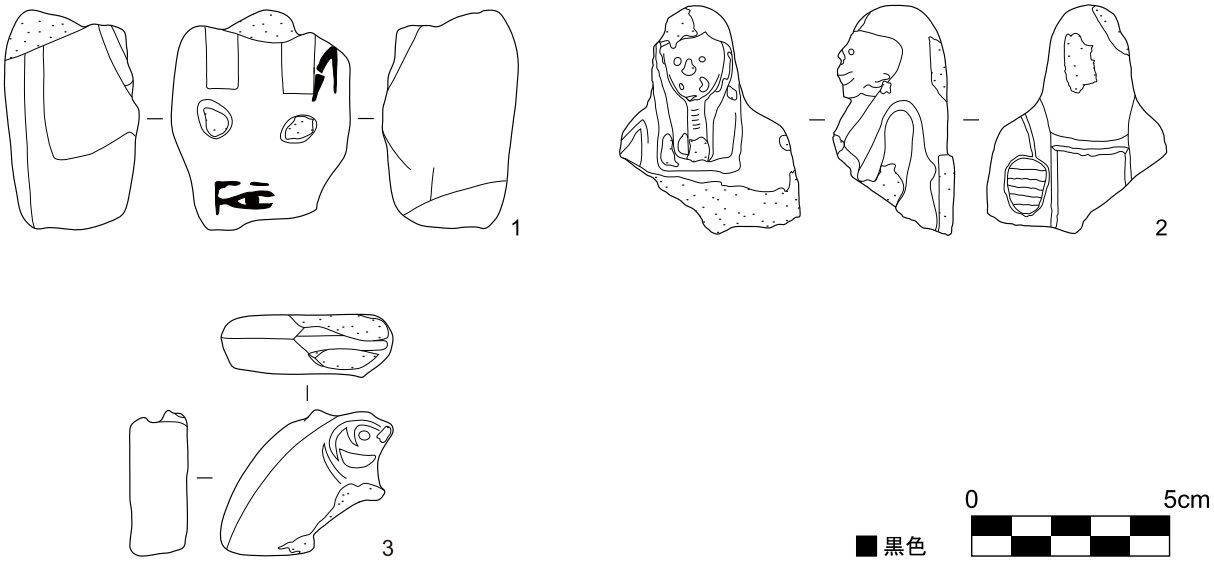


図 5　第 47 号墓およびその周辺出土遺物（2）
Major Finds from TT47 and its vicinity (2)

⑥シャブティ

ファイアンス製および素焼きのシャブティが出土した。ファイアンス製シャブティには、黒色で *ir* の文字があり、これは *Wsir*「オシリス神」の一部と考えられる（図 5.1）。また、もうひとつのファイアンス製シャブティには、3 つに分かれた鬘、編み髭、左肩につるされた籠などの特徴がある（図 5.2）。これらの特徴から、このシャブティは末期王朝時代に年代づけられ、H.D. シュナイダー（Schneider）の分類では XIA1 にあたると考えられる（Schneider 1977a: 225, 227-228）[9]。特に左肩の籠は丸い形、水平の線があり、一本の紐でつるされている。シュナイダーはこのタイプの籠を第 30 王朝からプトレマイオス朝までに年代づけている（Schneider 1977a: 161）[10]。

⑦ファイアンス製品

今期調査でも、ビーズ、壺、アミュレットなどのファイアンス製品が出土した。中でも特徴的なものは、ハヤブサあるいはホルス神の頭部を表したファイアンス製品であり（図 5.3）、上部に紐穴の痕跡があることから、アミュレットとして使用された可能性が考えられる。

⑧土器 [11]

今期調査では、主に第 47 号墓前室天井上の南西に堆積した石灰岩チップ層から新王国時代の土器が出土した（図 6.1-10）。今期調査中にすべての整理作業、資料化は終了していないが、現段階における中間報告として、今期調査で資料化を行った土器の中で特徴的な土器について以下に述べてみたい。

皿形土器は内面、外面ともに“清め”を意味する白色のスリップで覆われており、また内部には火を焚いた痕跡と黒色の物質が付着していた（図 6.3）。こうしたことからこの土器はおそらく火を使用する儀式に用いられたと考えられる。類例はマルカタ王宮（Hope 1989: fig.1.h）やアマルナ王宮（Rose 2007: 53-54, no.86）などに見られる。

Nile B2 胎土の青色彩文土器は、クリーム色の背景に、重花弁の文様と花弁と赤、黒の雄蕊の文様で装飾されている（図 6.7）。同様の青色彩文土器は、マルカタ王宮からの出土がよく知られている（Hope 19989: fig.10.b）。その他、カルナクのアメンヘテプ 4 世に関連する建造物からも出土している（Hope 1997: fig.1.b）。

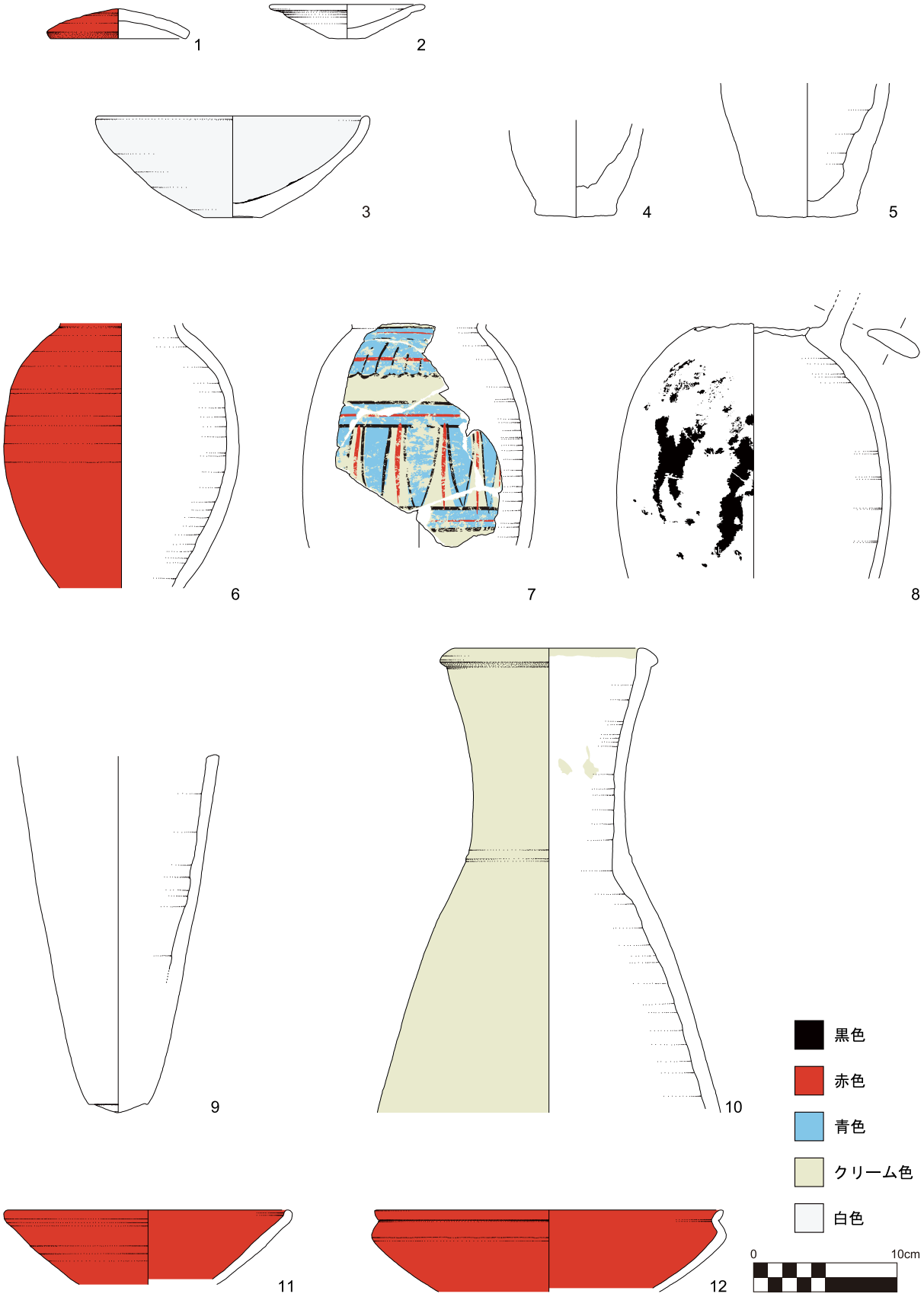


図 6　第 47 号墓およびその周辺出土土器
Fig.6 Pottery from TT47 and its vicinity

アンフォラは、長頸のアンフォラに復元され（図 6.8）、類例はサッカラのパイとライア墓（Aston 2005: pls.126.120, 121, 127.122-124.）、ホルエムヘブ墓（Bourriau et al. 2005: figs.33-34）、マルカタ王宮（Hope 1989: pl.7.a）やアマルナ王宮（Rose 2007: nos.566, 685）などにある。頸の付け根の部分には、2 次加工の痕跡が確認でき、また外面には黒色樹脂が付着していることから、飲料の貯蔵とは別の使用目的で再利用された可能性が考えられる。

石灰岩チップ層から出土した土器は、マルカタ王宮、アマルナ王宮に多くの類例を持つことから、アメンヘテプ 3 世からアクエンアテンの治世に年代づけられると考えられ、これは第 47 号墓の使用時期と一致している。また出土土器は、大きく儀式に使用された土器と墓の造営に使用された土器の 2 つのグループに分けることができる。儀式に使用された土器としては、蓋（図 6.1）、皿形土器（図 6.2）、皿形土器（図 6.3）、短頸壺型土器（図 6.6）、青色彩文土器（図 6.7）などが挙げられ、また墓の造営に使用された土器としては、プラスターを含む壺形土器（図 6.4, 5）、長頸アンフォラ（図 6.8）、アンフォラ（図 6.9）、大型壺形土器（図 6.10）などがある。こうした点から、現時点では、石灰岩チップ層から出土した土器は、第 47 号墓の造営の際の儀式および造営活動に使用された土器が、墓の掘削廃土とともに廃棄された可能性が想定される。

その他、今期調査では古王国時代の土器も 2 点出土した（図 6.11, 12）。内外面ともに赤色スリップで覆われ、磨かれている。その内の 1 点は、表面調整や器形の特徴から、古王国時代に典型的ないわゆる“メイドゥーム・ボール”と判断される（図 6.12）。類例は古王国時代後期に年代づけられるサッカラ（Rzeuska 2006: pls.83.382, 127.643, 128.648）、ヘラクレオポリス・マグナ（Bader 2009: figs.8.l, m, 9.g）などから出土している。類例の年代から、これらの土器は、コーカ地区の第 47 号墓周辺に位置する古王国時代後期の墓、イヒィ墓（第 186 号墓）もしくはケンティ墓（第 405 号墓）に由来する可能性が高いと考えられる（Saleh 1977）。

写真 2　第 174 号墓前室東側のシャフト
Photo 2 Shaft in the eastern part of the transverse hall of TT174

3. 第 174 号墓の調査

今期調査では、第 174 号墓の前室東側、奥室および奥室西側の部屋の発掘調査を実施した。奥室の奥壁前からは 170cm×162cm の開口部が発見され、同じく前室東側の北壁に接し、140cm×110cm の開口部が発見された（写真 2）。前室東側の開口部は、第 18 王朝中期の被葬者とその妻が供物を受け取るレリーフの下に位置しており、おそらくこの時代のシャフトの開口部と考えられる。

写真 3　第 -330- 号墓前室脇柱
Photo 3 Door jamb of the transverse hall in -330-

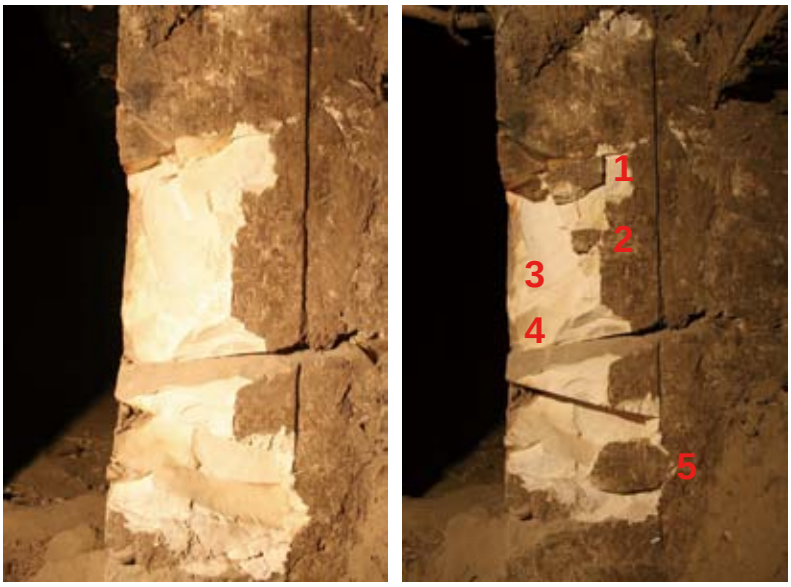


写真 4　第 -330- 号墓前室脇柱接着前（右）と接着後（左）（大型断片 3, 4 については、接着せず第 -330- 号墓内に収蔵）
Photo 4 Restoration of the eastern door jamb of -330-, before (right) and after (left)

4. 保存修復作業

(1) コンディション・サーベイ

今期調査では、第 -62- 号墓、第 264 号墓、第 -330- 号墓のコンディション・サーベイを継続した。観察によって確認された項目を「支持体（岩盤）の亀裂」「顔料の状況」「後世のプラスターとモルタル」「表面の汚れ」の 4 つに分類し、記録を行った。現場では、壁面写真の上に透明のフィルムシートを 4 枚かけ、項目ごとに壁面の状態を記録した。

コンディション・サーベイの結果、今後の保存修復処置としては、主に支持体（岩盤）亀裂の固定、欠損部の充填、顔料の固定、表面のクリーニングなどの課題が認識され、また保存修復に先立ち、顔料、プラスター、煤などの化学分析や壁画面に観察された微生物の生物学的調査の必要性も認識された。

(2) 第 -330- 号墓前室脇柱のレリーフ装飾の応急処置

コンディション・サーベイの結果、第 -330- 号墓前室の東側脇柱の応急処置が必要であることが認識され、今期調査中に実施した（写真 3, 4）。亀裂などにより不安定な箇所については、Primal AC33 を用いて強化処置を行い、またすでに剥離した小断片について Paraloid B48 の 40% のアセトン溶液を用いて接着を行った。その他、大型の断片については、今後の保存修復に備え、整理して第 -330- 号墓内に収蔵した（写真 4.3, 4.4）。

(3) 遺物の保存修復作業

出土した石灰岩レリーフ片、カルトナージュ片、木棺片などについて保存修復作業を実施した。遺物の汚れについては、溶剤を用いながら物理的に除去した。また顔料が不安定な箇所については、Paraloid B72 を用いて顔料の固定を行い、支持体のプラスターなどは必要に応じて Primal E330S を用いて強化を行った。

(4) 環境計測

今期調査でも今後の保存修復計画を立案していく上で必要な温湿度データの収集を第 174 号墓、第 -62- 号墓にて継続した。これまでの計測結果から、第 -62- 号墓奥室の温湿度が第 174 号墓などと比較して安定しており、一時的な遺物の保管に適していることが判明した。

5. まとめ

2010 年度の第 4 次調査では、今後の発掘、保存修復に向けて、第 47 号墓の内部の状況を確認することを目的として発掘調査を実施した。発掘調査の結果、前庭部南西では、南西コーナーを発見することができ、前庭部の規模が明らかとなった。また、前室天井上の北西の発掘調査では、天井崩落個所から、内部の観察、測量を実施し、内部構造の一部を明らかにすることができた。今回の調査では確認できなかったが、カーターは前室南側の西壁にアメンヘテプ 3 世と王妃ティイのレリーフを報告しており（Carter 1903: 177-178, pl.II）、今後の調査でレリーフの原位置の同定が課題となる。その他、前室天井上の南西の石灰岩チップ層の発掘調査を行い、この層が第 47 号墓造営の掘削廃土に由来する可能性を示した。古代の建築活動の一端を示す資料として興味深いと考えられる。

また、これまでの調査同様に、第 47 号墓の北側に位置する第 174 号墓、第 -62- 号墓、第 264 号墓、第 -330- 号墓においても、碑文、遺構の記録作業、保存修復に向けた記録作業を実施した。

以上、第 4 次調査の成果と今後検討すべき課題を挙げた。来期以降も発掘調査および出土遺構、遺物の研究を継続し、第 47 号墓およびその周辺の墓について更に詳しく明らかにしていきたいと考えている。

謝辞

本調査は日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「古代エジプト新王国第 18 王朝時代後期の岩窟墓の調査研究」（研究代表者：近藤二郎）の助成を受けて行われた。

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古省大臣ザヒ・ハワース閣下（当時）、古代エジプト部部長サブリ・アブド・アル＝アジーズ博士（当時）、外国調査隊管轄事務局長ムハンマド・イスマエル・カーリド博士、上エジプト総局長マンスール・ボライク氏、上エジプト・ルクソール考古局長ムハンマド・アセム・アブド・アル＝サボール氏、カルナク神殿査察局長イブラヒム・ソリマン氏、ルクソール西岸クルナ査察局長ムスタファ・ワジーリー氏、副局長ヌール・アブド・アル＝ガファル・ムハンマド氏、査察官ハサン・アリ・アハマド氏、外国調査隊管轄クルナ事務局ムハンマド・アリ氏、をはじめとする方々に多大なご協力を頂いた（肩書きは調査当時のもの）。

また、図版の作成には早稲田大学大学院文学研究科修士課程の北村　玲、熊崎真司、山田綾乃、および学生ボランティアの後藤里英、山川　彩、青笹基史、福田莉紗、中尾穂波の協力を得た。

ここに記して感謝の意を表する。

註

1) マルカタ南遺跡のコム・アル＝サマック（魚の丘）における調査に関しては主に以下を参照（古代エジプト調査委員会編 1983）。
2) マルカタ王宮址の調査は主に以下を参照（早稲田大学古代エジプト建築調査隊編　1993）。ルクソール西岸岩窟墓の一連の調査は主に以下を参照（早稲田大学エジプト学研究所編 2002, 2003, 2007）。また王家の谷・アメンヘテプ 3 世王墓における調査は主に以下を参照（Kondo 1992, 1995; 吉村 1993; Yoshimura and Kondo 1995; 吉村、近藤 1994, 2000; 河合他 2001; Yoshimura and Kondo (eds.) 2004; Yoshimura et al. 2005; 吉村他 2005）。
3) 第 47 号墓の研究史、研究上の問題点、アメンヘテプ 3 世時代の大型岩窟墓の問題について詳しくは以下を参照（近藤 1994）。その他、アメンヘテプ 3 世時代の大型岩窟墓については D. アイクナー（Eigner）の論考を参照（Eigner 1983）。
4) これまでの報告としては、ラインドによるウセルハトの葬送コーンの報告（Rhind 1862: 137）、ハワード・カーターによる第 47 号墓の構造に関する記述やウセルハトの葬送コーン、ティイ王妃のレリーフの写真などの報告（Carter 1903: 177-178, pl.II）、A.E.P. ウェイゴール（Weigall）の記述（Weigall 1908: 125）などが挙げられる。またベルギーのブリュッセル王立美術史博物館には第 47 号墓由来のティイ王妃のレリーフが収蔵されている（van de Walle et al. 1980: 18-20, figs.3, 4）。
5) これまでの調査については以下を参照（近藤他 2009, 2010, 2011）。
6) 考古庁に登録されていない墓については、ルクソール西岸岩窟墓の網羅的な研究を行った F. カンプ（Kampp）の付した墓番号、第 -62- 号墓や第 -330- 号墓などを使用する（Kampp 1996: 664-666, 760）。
7) 調査は 2010 年 12 月 21 日から 2011 年 1 月 9 日まで実施された。調査の参加者は以下の通りである。考古班：吉村作治、近藤二郎、菊地敬夫、河合　望、高橋寿光、北村　玲、熊崎真司、山田綾乃、建築班：柏木裕之、保存修復班：西坂朗子、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
8) 銘文、図像の類例については以下を参照（Hadjash and Berlev 1982: 144-145, fig.86; James (ed.) 1970: pl.27; Bierbrier (ed.) 1982: pl.57）。
9) 類例については以下を参照（Schneider 1977a: 5.3.1.18, 5.3.1.32, 5.3.1.140）。
10) 類例については以下を参照（Schneider 1977a: 5.3.1.27）。
11) 土器の胎土に関しては 10 倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った（Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130-132）。その他、ウィーン・システムで未分類の胎土については、D.A. アストン（Aston）らの胎土分類を参照した（Aston 2004: 196）。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類（Aston and Aston 2001: 53-54）と形態に基づく器形分類（Holthoer 1977）を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した。

参考文献

Aston, B.G.

2005 “The Pottery”, in M.J. Raven, *The tomb of Pay and Raia at Saqqara*, London and Leiden.

Aston, D.A

2004 “Amphorae in New Kingdom Egypt”, *Ägypten und Levante* XIV, pp.175-214.

Aston, D.A. and Aston, B.G.

2001 “The Pottery”, in Martin, G.T., van Dijk, J., Raven, M., Aston, B.G., Aston, D.A., Strouhal, E. and Horáčková, L., *The Tombs of Three Memphite Officials, Ramose, Khay and Pabes*, London, pp. 50-61.

Bader, B.

2009 “The Late Old Kingdom in Herakleopolis Magna? An Interim Interpretation”, in Rzeuska, T.I. and Wodzinska, A. (eds.), *Studies on Old Kingdom Pottery*, Warsaw, pp.13-41.

Bierbrier, M.L. (ed.)

1982 *Hieroglyphic Texts From Egyptian Stelae etc.* Part 10, British Museum, London.

Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.

2000 “Pottery”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121-147.

Bourriau, J., Aston, D., Raven, M.J. and Walsem, R.V.

2005 *The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-chief of Tut'ankhamun III: The New Kingdom Pottery*, London.

Carter, H.

1903 “Report of work done in upper Egypt (1902-1903)”, *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 4, pp.171-180.

Davies, N. de G. and Macadam, M.F.L.

1957 *A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Oxford.

D'Abbadie, J.V.

1959 *Catalogue des Ostraca Figurés de dier el-Médineh Nos. 2734-3053*, IFAO, Cairo.

Eigner, D.

1983 “Das Thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: Die Arkitektur”, *Mitteilungen der Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 39, pp39-50.

Engelbach, R.

1924 *A Supplement to the Topographical Catalogue of the Private Tombs of Thebes*, Cairo.

Gasse, A.

1986 *Catalogue des Ostraca Figurés de Deir el-Médineh* Nos. 3100-3372, IFAO, Cairo.

Hadjash, S. and Berlev, O.

1982 *The Egyptian Reliefs and Stelae, Pushkin Museum of Fine Arts*, Moscow.

Holthoer, R.

1977 *New Kingdom Pharaonic Sites: The Pottery, Scandinavian Joint Expeditions* Vol.5:1, Lund.

Hope, C.A.

1989 “The XVIII Dynasty Pottery from Malkata”, in Hope, C.A., *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Burwood, pp.3-44.

1997 “Karnak North: Painted Ceramics of the New Kingdom”, *Bulletin de Liaison du Groupe International d'Étude de la Céramique Égyptienne*, pp.29-33.

James, T.G.H. (ed.)

1970 *Hieroglyphic Texts From Egyptian Stelae etc.* Part 9, British Museum, London.

Kampp, F.

1996 *Die Thebanische Nekropole, Zum Wandel des Grabgedankens von der XVIII. bis zur XX. Dynastie*, Theben 13, 2 vols., Mainz am Rhein.

Kondo, J.

1992 “A Preliminary Report on the Re-clearance of the Tomb of Amenophis III”, in Reeves, C.N. (ed.), *After Tutankhamun: Research and Excavation in the Royal Necropolis at Thebes*, London and New York, pp.41-54.

1995 “The Re-clearance of Tombs WV 22 and WV A in the Western Valley of the Kings”, in Wilkinson, R.H. (ed.), *Valley of the Sun Kings: New Explorations in the tombs of Pharaohs*, Tucson, pp.25-33.

Page, A.

1983 *Ancient Egyptian Figured Ostraca*, Warminster.

Rhind, A.H.

1862 *Thebes: Its Tombs and Their Tenants, Ancient and Present: A Record of Excavations in the Necropolis*, London.

Rose, P.J.

2007 *The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*, London.

Rzeuska, T.

2006 *Saqqara II, Pottery of the Late Old Kingdom, Funerary Pottery and Burial Customs*, Warsaw.

Saleh, M.

1977 *Three Old-kingdom tombs at Thebes: I, the tomb of Unas-Ankh no 413: II, the tomb of Khenty no. 405: III, the tomb of Ihy no. 186*, Archaologische Veroffentlichungen 14, Mainz am Rhein.

Schneider, H.D.

1977a *Shabtis, An Introduction to the History of Ancient Egyptian Funerary Statuettes with a Catalogue of the Collection of Shabtis in the National Museum of Antiquities at Leiden*, Part I, Leiden.

1977b *Shabtis, An Introduction to the History of Ancient Egyptian Funerary Statuettes with a Catalogue of the Collection of Shabtis in the National Museum of Antiquities at Leiden*, Part III, Leiden.

van de Walle, B., Limme, L. and De Meulenaere, H.

1980 *La collection égyptienne, Les étapes marquantes de son développement*, Bruxelles.

Vivó, J. and Costa, S.

1998 “Funerary cones Unattested in the Corpus of Davies and Macadam (Annex I)”, *Bulletin de la Société d’Égyptologie de Genèvé* 22, pp.59-72.

Weigall, A.E.P.

1908 “Report on the Tombs of Shékh abd' el Gùrneh and el Assasîf”, *Annales du Service des Antiquités de l’Égypte* 9, pp.118-136.

Yoshimura, S. and Kondo, J.

1995 “Excavation at the tomb of Amenophis III”, *Egyptian Archaeology* 7, pp.17-18.

Yoshimura, S. and Kondo, J. (eds.)

2004 *Conservation of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III -First and Second Phases Report-*, Tokyo.

Yoshimura, S., Capriotti, G., Kawai, N. and Nishisaka, A.

2005 “A Preliminary Report on the Conservation Project of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22) in the Western Valley of the Kings: 2001-2004 Seasons”, *MEMNONIA* XV, pp.203-212.

河合　望、吉村作治、近藤二郎、ジョルジョ・カプリオッティ

2001 「アメンヘテプ III 世王墓保存修復プロジェクト予備調査概報」、『エジプト学研究』第 9 号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-45.

古代エジプト調査委員会編

1983 『マルカタ南〔I〕－魚の丘＜考古編・建築編＞－』、早稲田大学出版部 .

近藤二郎

1994 「テーベ私人墓第 47 号」、『エジプト学研究』第 2 号、早稲田大学エジプト学会、pp.50-60.

近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合　望、西坂朗子、高橋寿光

2009 「第 1 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第 15 号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-70.

2010 「第 2 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第 16 号、早稲田大学エジプト学会、pp.47-77.

2011 「第 3 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第 17 号、早稲田大学エジプト学会、pp.45-63.

吉村作治

1993 「早稲田大学古代エジプト調査隊調査報告（III)」、『オリエント』第 36 巻第 1 号、pp.159-177.

吉村作治、近藤二郎

1994 「アメンヘテプ 3 世王墓の調査について　エジプト・ルクソール西岸、王家の谷西谷調査報告」、『人間科学研究』第 7 巻第 1 号、pp.187-199.

2000 「王家の谷・西谷調査報告－ 1992 年 8 月～ 2000 年 1 月－」、『エジプト学研究』第 8 号、pp.57-64.

吉村作治、近藤二郎、河合　望、西坂朗子、瀬戸邦弘、高橋寿光、中右恵理子

2005 「アメンヘテプ 3 世王墓保存修復作業概報：2001 年 3 月～ 2004 年 3 月」、『エジプト学研究』第 13 号、pp.5-21.

早稲田大学エジプト学研究所編

2002 『ルクソール西岸岩窟墓〔I〕－第 241 号墓と周辺遺構－』、早稲田大学エジプト学研究所 .

2003 『ルクソール西岸岩窟墓〔II〕－第 318 号墓と隣接する墓－』、株式会社アケト .

2007 『ルクソール西岸岩窟墓〔III〕－第 333 号墓、A.21 号墓、A.24 号墓、W-4（Nr.-127-）号墓－』、株式会社アケト .

早稲田大学古代エジプト建築調査隊編

1993 『マルカタ王宮の研究－マルカタ王宮址発掘調査 1985−1988』、中央公論美術出版 .

調査報告

エジプト　ダハシュール北遺跡発掘調査報告
－第 16 次・第 17 次発掘調査－

吉村　作治＊1・矢澤　健＊2・近藤　二郎＊3
馬場　匡浩＊4・西本　真一＊5・柏木　裕之＊6・秋山　淑子＊7

Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Sixteenth and Seventeenth Seasons

Sakuji YOSHIMURA[*1], Ken YAZAWA[*2], Jiro KONDO[*3],
Masahiro BABA[*4], Shinichi NISHIMOTO[*5], Hiroyuki KASHIWAGI[*6],
and Yoshiko AKIYAMA[*7]

Abstract

The mission from the Institute of Egyptology, Waseda University, under the direction of Prof. Dr. Sakuji Yoshimura and Ken Yazawa as field director, conducted fieldworks at Dahshur North in 2008 (16th) and 2009 (17th). In these seasons, the excavations were continuously concentrated on the area around the Ramesside tomb of *Ta*. Thirteen shaft tombs were investigated, most of which were located on the area to the north of the tomb of *Ta*.

The most notable find in these seasons were the burials of *Ꜥry-sr-ꜥꜣ* and *Tꜣ-wb-pꜣw-mꜣꜥt* at Shaft 110. Although already plunderd, their wooden coffins were found, and the restoration works revealed that each was buried in the double anthropoid coffins. In addition, there were retrieved four complete shabti boxes filled with 12 to 14 wooden shabtis and three wooden canopic jars still containing organs as well as a complete amphora. The wooden shabti boxes and the amphora show that the burials dates to the 20th dynasty.

As for the other New Kingdom tombs, in Shaft 68, the re-used door jambs belongs to *Pṯḥ-m-wiꜣ* were found. In Shaft 109, the almost complete wooden anthropoid coffin was unearthed. The coffin has the features of yellow background and quite flat lid, suggesting that the burial could date to the late Ramesside Period.

The Middle Kingdom shaft tombs were also found. All of the tombs have already been disturbed, but they still contained the notable burial equipment. Some of them contained a number of “Beer bottles”, which is typical in the Middle Kingdom pottery repertoire and useful dating criteria. Most of them were date to the early 13th dynasty. In the burial chamber of Shaft 107, nine complete bottles were found *in situ*. From Shaft 79 three small animal figurines and fragmental figure of a hippopotamus were revealed.

The discoveries of this season added more information for the nature of the activity at the western part of the cemetery. Shaft 110 offers an convincing evidence that this cemetery continued to have been used until the 20th dynasty. With the previous excavations, the result could be a great contribution on understanding of the burial practice in the later Middle and New Kingdoms in the Memphite Necropolis.

＊1 早稲田大学名誉教授
＊2 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員
＊3 早稲田大学文学学術院教授
＊4 早稲田大学エジプト学研究所次席研究員
＊5 サイバー大学世界遺産学部教授
＊6 サイバー大学世界遺産学部教授
＊7 早稲田大学エジプト学研究所ボランティア

＊1 *Professor Emeritus, Waseda University*
＊2 *Invited Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University*
＊3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*
＊4 *Junior Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University*
＊5 *Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University*
＊6 *Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University*
＊7 *Volunteer staff, Institute of Egyptology, Waseda University*

Ⅰ．はじめに

早稲田大学エジプト学研究所によるダハシュール北遺跡の調査隊は、1995 年の新王国時代第 18 王朝末の「王の書記イパイ」という人物の「トゥーム・チャペル（神殿型平地墓）」の発見を皮切りに、「パシェドゥ」、「タ」のトゥーム・チャペルおよびその周辺に点在する数々の新王国時代の墓を発見してきた。2004 年以降は「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に広がるシャフト墓、単純埋葬の調査を続けており、中王国時代と新王国時代の未盗掘墓が発見された。その後の調査で、この遺跡は新王国時代だけでなく、中王国時代の墓域も顕著に存在することが確認されるに至った。両時代の埋葬習慣の解明が、研究の主要なテーマとなっている。

2008 年 11 月～ 12 月に行われた第 16 次調査 [1)]、2009 年 6 月～ 7 月に行われた第 17 次調査 [2)] では、ダハシュール北遺跡の墓域でも西端に位置する「タ」のトゥーム・チャペル周辺の様相を明らかにすることを目的として、「タ」墓周辺における発掘調査を継続した。本稿はこの 2 回の発掘調査の概要報告である。第 16 次調査では、シャフト 110 から新王国時代第 20 王朝に年代付けられる二重の人型木棺の埋葬が発見され、第 17 次調査まで発掘が継続された。残存状況の良い木棺とともに木製シャブティ・ボックスと大量の木製シャブティ、木製カノポス壺、アンフォラなどが完形に近い状態で発見されており、ダハシュール北遺跡のみならず、メンフィス・ネクロポリスにおける同時代の埋葬習慣を解明する上で重要な資料となる。また、2 回の調査で中王国時代のファイアンス製品や土器が多数発見されており、ダハシュール北遺跡の中王国時代における活動時期や、埋葬習慣を知る手がかりを補強することができた。

Ⅱ．第 16 次調査

1. はじめに

「タ」墓を中心として、第 15 次調査までに南北 40m、東西 60m の範囲の平面発掘がおこなわれており、シャフト 40（「タ」のトゥームチャペル）からシャフト 104 までの、計 65 のシャフトが確認されていた。第 15 次調査までにこの内の 54 基の発掘が完了している。第 15 次調査までの範囲では 8 割以上の墓の発掘を終えており、「タ」墓周辺地域の様相が明らかになってきたが、一方でこの地区の北側と東側にはまだ数多くの墓が存在していることが地表面からも推測できた。第 16 次調査では、「タ」墓周辺地域の墓域の広がりを確認することを目的として、発掘区を 5m 北側へ拡張し、遺構確認のための平面発掘を実施した（図 1）。また、「タ」のトゥーム・チャペル上部構造の基礎となっている堆積の下からシャフト 42（「セヌウ」墓）、シャフト 64（「ケキ」墓）、シャフト 65（「セベクハト」と「セネトイトエス」墓）や土壙墓 12y0006（「ウイアイ」墓）、12y0009（「チャイ」墓）などの未盗掘墓が発見されていることから（吉村、馬場他 2009, 2010）、「タ」のトゥーム・チャペル南東部に残存していた堆積の除去を行い、遺構の存在の有無を確認した。墓の発掘については、全部で 9 基を対象として行われた（図 1）。以下では、まず発掘区北側の平面発掘と「タ」墓南東側堆積の除去作業について述べ、次にシャフト墓の発掘作業について記述する。

2. 平面発掘

第 16 次調査では、調査区を北側へ 5m を広げ、遺構確認のための平面発掘を実施した。発掘を実施したグリッドは 2E47a、b、2E48a、b、2E49a、b、2E50a、b、3E41a、b、3E42a、b である。南北 5m、東西 60m であり、この範囲からシャフト 105 ～ 111 の計 7 基のシャフト墓が発見された（図 1）。

3.「タ」墓南東側堆積の除去作業

「タ」墓の上部構造の壁体は砂とタフラによる盛り土の上に築かれており、第 10 次調査には盛り土の北東部分を半裁する形で、10 x 10m の発掘区（3E21d、3E22c、3E31b、3E32a）を設定し、セクションの確認を行っ

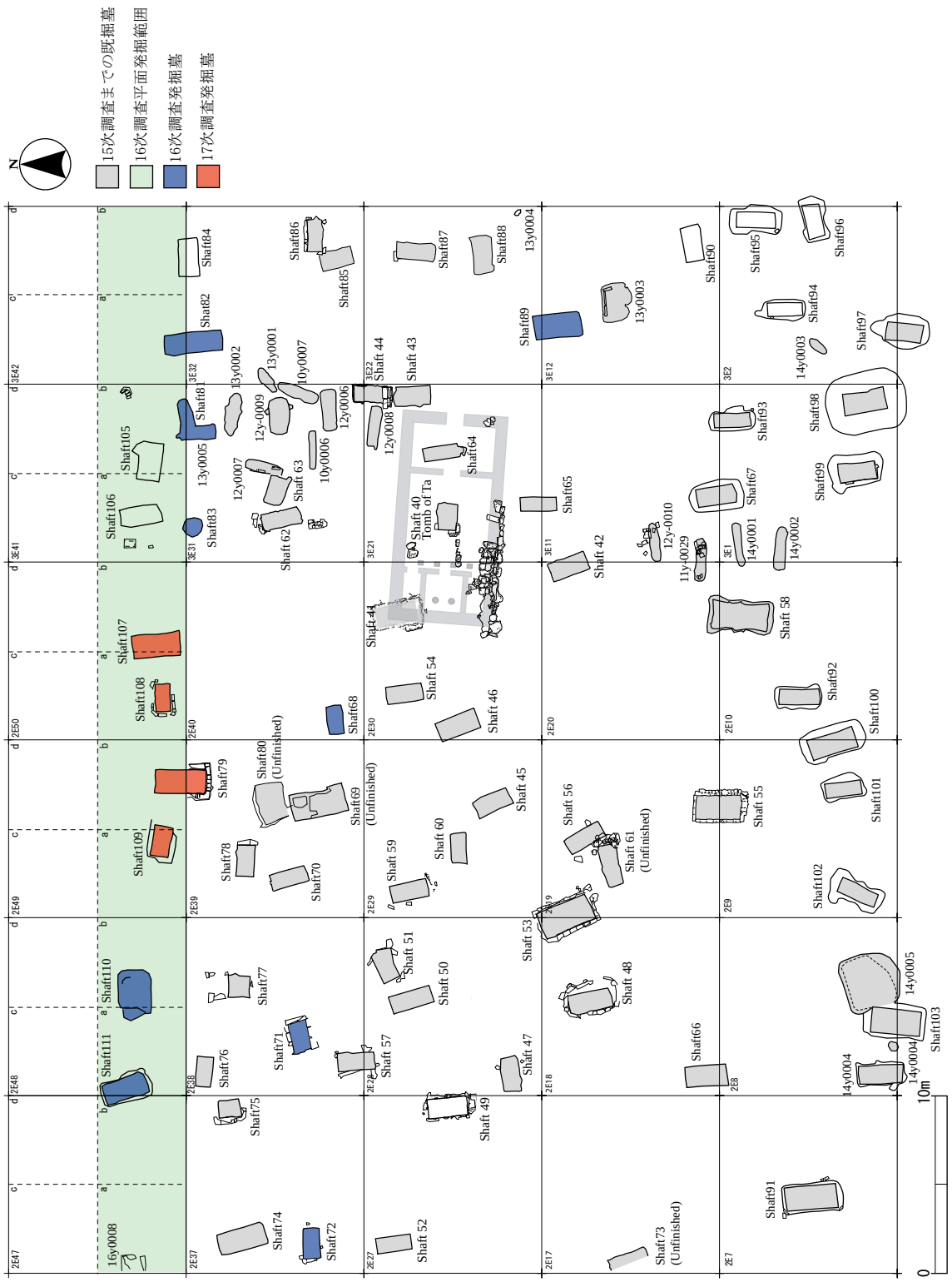


図 1　ダハシュール北遺跡調査区

Fig.1 Map of the excavation area around the tomb of *Ta*

ていた（吉村、馬場他 2009: 6-8, 図 1-3）。第 16 次調査では、3E22 グリッドの西面にセクションを設定し、以東の発掘を実施して、遺構の確認を行った（図 2）。その結果、図 3 のセクションで「灰色タフラ層①」（吉村、馬場他 2009、図 2 のセクションの灰色タフラ層⑤と対応する）から掘り込まれたピットが 6 か所で確認された（図 2、16y-0001 ～ 16y-0006）。この内、16y-0001 と 16y-0002 の 2 つには土器片が充填されていた（写真 1）ピット 16y-0001 は径約 45cm、深さ約 40cm、ピット 16y-0002 は平面ではヒョウタン形であり、長辺は約 1.4m、短辺は約 80cm であった。前者の 16y-0001 からは、土器片とともに木製の芯にプラスターを塗布し、その上から彩色が施された人物像の頭部と左右の足部が発見された（写真 2）。その後岩盤まで掘り下げを行ったが、今回発掘を行った地点では堆積の下に墓は存在しないことが分かった。

16y-0001 から出土した木製彫像（写真 3）は本来胴部があったと推測され、頭部には胴部に差し込まれていたと考えられるほぞがあり、左右の足部はすねとの連結に用いられたほぞ穴がある。頭部、足部ともに木製の芯の表面にプラスターが塗布されており、その上から赤褐色の顔料が塗られていた。頭部は頭頂からほぞの下端までが 32cm、幅が 13cm、顔正面から後頭部までの奥行が 14cm であった。右足は長さ 25.5cm、幅が 8.7cm、

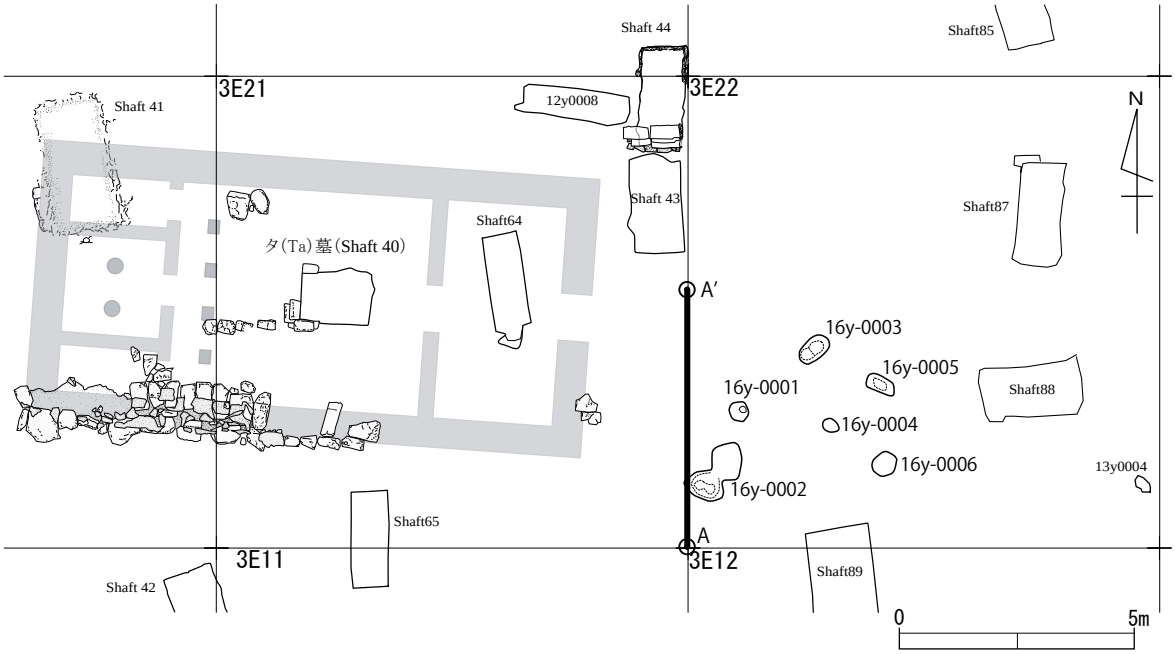
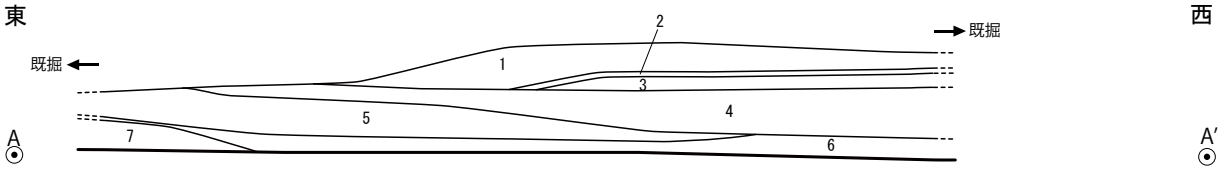


図 2　タ墓南東部のピット群
Fig. 2 Pits on the south-eastern area of the tomb *Ta*



1. 黄褐色タフラ層　2～7cmのタフラチップで主に構成される。
2. タフラ・日乾レンガ層　5～10cmのタフラ塊、日乾レンガ片で構成。
3. 黄褐色砂層　径2mm程のタフラチップを少量含む。
4. 灰色タフラ層①　ほぼ灰色のタフラ塊のみで構成される。
5. 黄褐色タフラ層　黄褐色のタフラ塊のみで構成される。
6. 黄色細砂層
7. 灰色タフラ層②　径1cm前後の灰色のタフラ粒で構成される。

0　1m

図 3　A-A' セクション
Fig.3 Section A-A'

写真 1　ピット 16y-0001（右）、16y-0002（左）検出状況
Photo 1 Pit 16y-0001(right) and Pit 16y-0002(left) as found

写真 2　ピット 16y-0001 内
木製彫像断片出土状況
Photo 2 Wooden statue inside
Pit 16y-0001

高さが 8.5cm、左足は分解していたが、おそらく長さ、幅は同じと推測され、高さは 7.8cm であった。

ピット 16y-0001 と 16y-0002 から出土した土器片の多くは壺形のものであり、接合できた例はほとんどなく、ピット 16y-0002 から出土した彩文土器 1 点のみ、完形に近い形へ復元することができた（図 4）。断面が涙形の彩文土器であり、口縁部がやや外に向かって開いている。外面全面にクリーム色のスリップが塗布され、頸部と胴部に 3 本の線状の彩色が施されており、両者とも黒色の線が赤褐色の線に挟まれる形となっている。胎土は Nile B2[3] である。赤と黒の 2 色による彩色は第 18 王朝初期から中期にかけて多く見られ（Hope 1987:

写真 3　ピット 16y-0001 出土塑像
Photo 3 Wooden Statue from Pit 16y-0001

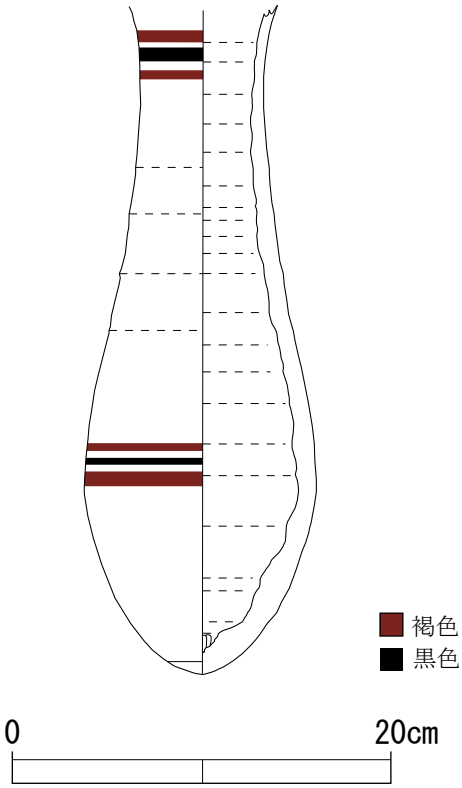


図 4　16y-0002 出土彩文土器
Fig.4 Painted pottery from Pit 16y-0002

109)、稀ではあるが第 18 王朝後期のマルカタ (Hope 1989: 7) やアマルナ (Rose 2007: 26-27) でも出土している。

ピットは「タ」のトゥーム・チャペルの盛り土に覆われる形で発見されたものの、埋納されていた彩文土器の年代は第 18 王朝と考えられることから、第 20 王朝に年代づけられる可能性がある「タ」の墓（吉村、近藤他 2005: 117）の造営と直接は関連していないと考えられる。一方で、ピット群の東側に隣接しているシャフト 88 は第 18 王朝後期に年代づけられる埋葬が発見されており、上部構造を有していたことが指摘されている（吉村、近藤他 2011: 58）。第 10 次調査で確認された「タ」のトゥーム・チャペル東側の東西方向のセクション（吉村、馬場他 2009: 図 2）でも、ピットが掘り込まれている層（第 10 次調査セクションの灰色タフラ層⑤）はシャフト 88 の西側から 3E22 グリッドの西端ラインまで続いていることが確認されており、同グリッド西端ラインから約 50cm 西でこの層は途切れている。したがって、ピットが掘られた層は「タ」のトゥーム・チャペルの掘削廃土に由来するものではなく、「タ」の墓造営以前にあったもので、シャフト 88 の掘削廃土に由来している可能性が高い。ピットの位置がシャフト 88 の真西にあるという位置関係からも、ピットに像を埋納する活動が隣接するシャフト 88 と関連している可能性が考えられる。

像の頭や足をピットに埋納する行為としては、ミルギッサで呪詛の文書が書かれた像および中王国時代の土器片とともに、陶製の像の頭部と左足がピットの内部から発見された例がある（Vila 1963: 157-158, Fig.17.1, 4）。敵に対する呪詛として、敵の名前が書かれた像や土器片を割ることで、対象に害を与えるという儀式が行われていたと考えられており (Fuscaldo 2003: 186-188)、ピット 16y-0001 の例も、こうした儀式に関連していた可能性がある。土器に関してはほとんどが接合できなかったので、この場で割られたものではないと考えられる。木製彫像を土器の断片とともに埋める行為の意味については、今後も検討を要する。

4. 墓の発掘

第 16 次調査では全部で 9 基のシャフト墓を発掘した。遺構と出土遺物について、シャフト墓ごとに報告する。

(1) シャフト 68（図 5）

シャフト 68 はグリッド 2E40 に位置し、2007 年の第 12 次調査でシャフトの上部が確認された。シャフト開口部の長軸の方向は東西であり、平面の大きさは 1.0 x 1.7m、シャフト部の深さは 4.5m であった。シャフト部分は細砂で満たされており、深さ 3.6m 付近からレリーフ片が出土し、その下から人型木棺の蓋の断片が出土した。シャフトの最下部から西側に部屋が発見された（A 室）。A 室の平面は方形に近く、西面が東面より若干長い。南北が 3.0m、東西が 2.0m であり、床から天井までの高さが 1.2m であった。部屋の入り口部分は細長い石灰岩の石材によって脇に柱を立て、その上に石灰岩のまぐさを渡して戸口を作り出していた [4)]。脇柱は床面を 20cm ほど掘り下げて埋め込まれており、脇柱、まぐさの表面には泥モルタルが塗られていた。泥モルタルを除去したところ、脇柱の A 室内側を向いていた面には碑文が残っていることがわかった。碑文には「プタハエムウイア」という名前があることから、建材は再利用されたもので、本来は同人物のトゥーム・チャペルの礼拝室を構成していたと考えられる [5)]。

出土遺物

a) 人型木棺片（図 6-1, 2）

図 6-1 は人型木棺の蓋の足部分と考えられるもので、シャフト部から出土した。素足が表現されていることから、ミイラを表現したものではなく、生前の姿を現した着衣型の木棺であり、新王国時代第 19 王朝に類例が見られるものである（Niwinski 1988: 12-13; Taylor 1989: 38-39）。図 6-2 は人型木棺の蓋に取り付けられていた左側の手と考えられるもので、同じくシャフト部から出土した。

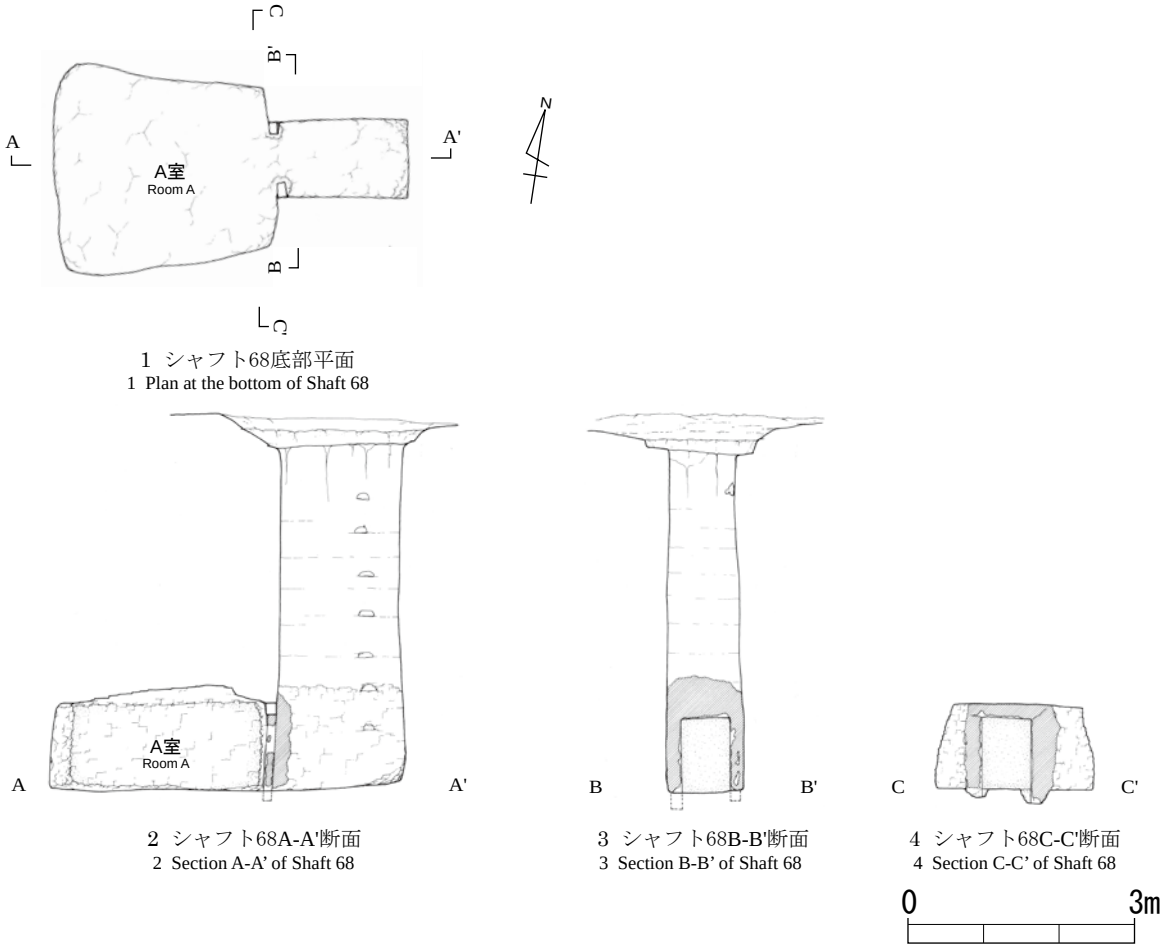


図 5　シャフト 68 平面・断面図
Fig.5 Plan and section of Shaft 68

b) レリーフ（図 7-3）

石灰岩製のレリーフであり、シャフト部から出土した。アーキトレーブの破片と推測され、上面と下面は整形されている。比較的深い陰刻で銘文が刻まれていた。

c) 脇柱（図 7-1、2）

A 室の間口にあった脇柱は、本来は地上のトゥーム・チャペルの建材として使われていたもので、再利用されたものと考えられる。A 室内から見て右側（南側、図 7-1）のものは、長さ 120cm、幅 20.5cm、厚さ 10.5cm であり、縦方向に一列の碑文が刻まれていた。碑文の内容は次の通りである。

//// t. Mn-nfr di=sn ʿḥʿw ꜣw nn ḥꜣt pḥw nn m ḳrst nfrt n ḥm-nṯr tpy Ptḥ-m-wiꜣ

「メンフィスの ////、彼ら（神々）が、決して終わることの無い長い命を、大司祭プタハエムウイアの美しき埋葬において与えますように」[6)]

A 室内から見て左側（北側、図 7-2）のものは、長さ 113cm、幅 20.5cm、厚さ 11cm で、同様に縦方向に一列の碑文が刻まれていた。

//// drf di=sn prrt nbt ḥr wdḥw=sn ḥnkt rnpwt n kꜣ n ḥm-nṯr tpy n Nt Ptḥ-m-wiꜣ

「////　彼らが、ネイト大司祭プタハエムウイアのカーのために、彼らの祭壇から来る全ての物、供物と野菜を

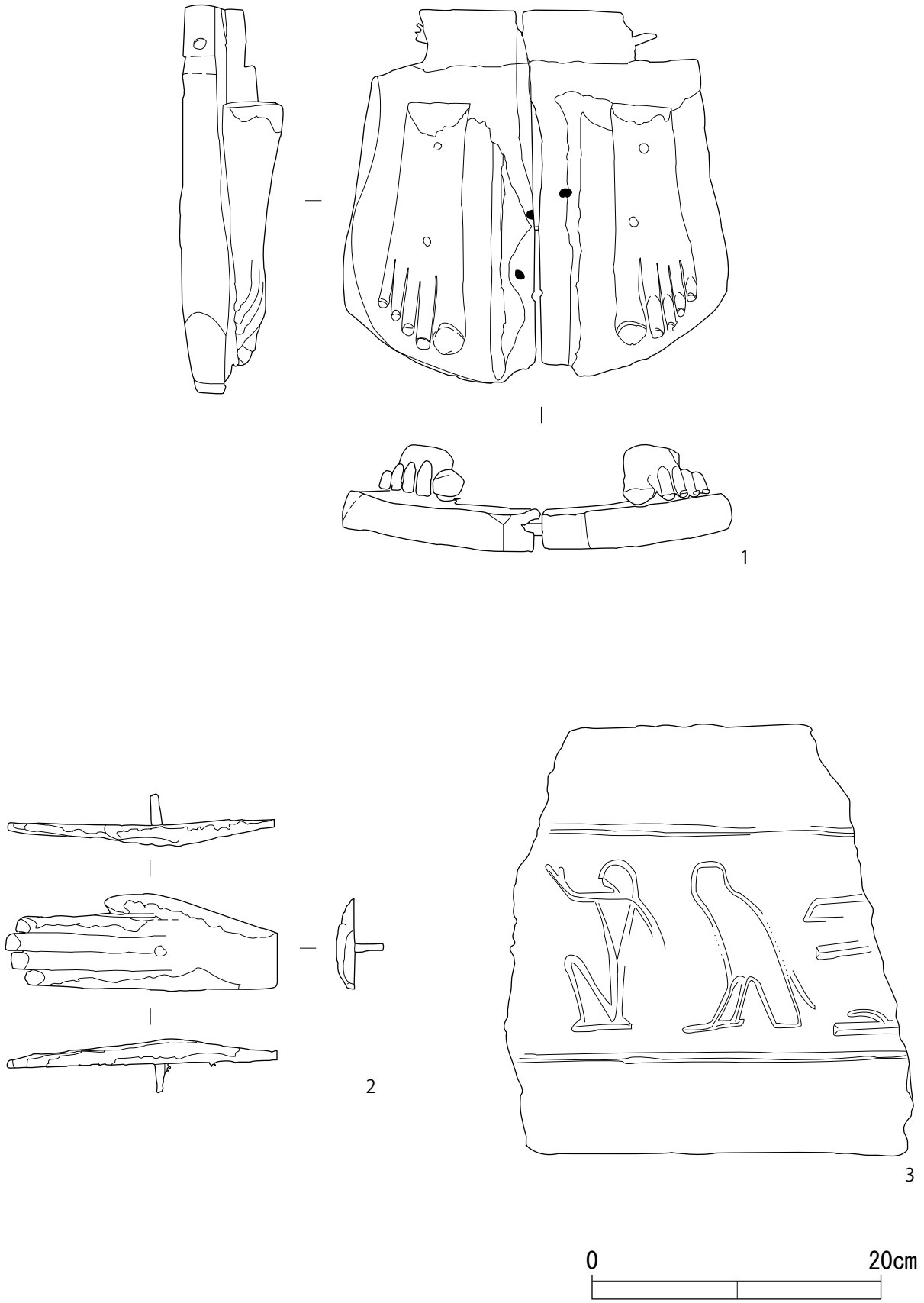
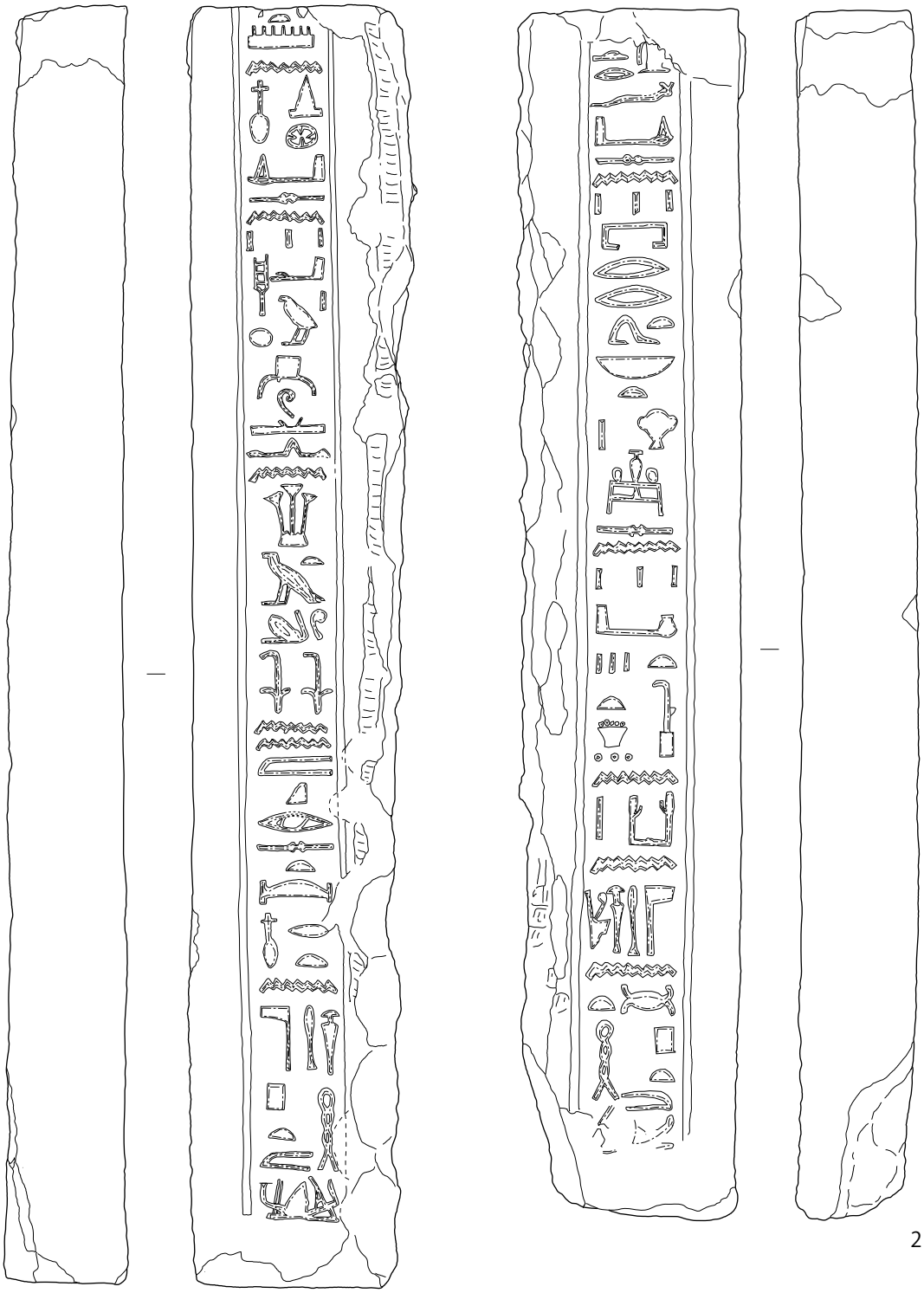


図 6　シャフト 68 出土遺物（1）
Fig.6 Objects from Shaft 68 (1)



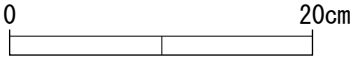


図 7　シャフト 68 出土遺物（2）
Fig.7 Objects from Shaft 68 (2)

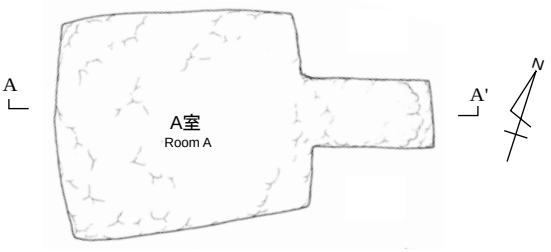
与えますように」

銘文は後半部分が残存するのみであるが、典型的な供養文であることは明らかである。これらはトゥーム・チャペルの礼拝施設を構成するものである（ex. Martin et al. 1985: Pls.7-8）。

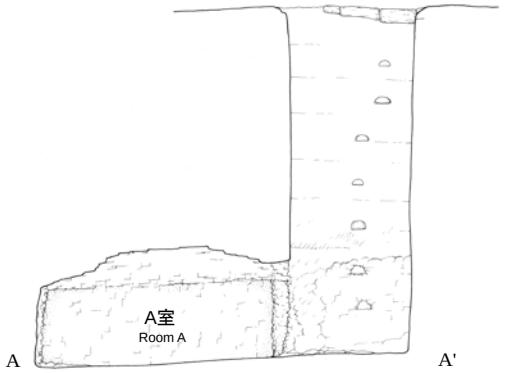
（2）シャフト 71（図 8）

シャフト 71 はグリッド 2E38 に位置し、シャフトの上部が 2007 年の第 12 次調査で確認されていた。シャフト開口部の長軸の報告は東西であり、開口部の平面の大きさは 0.8 x 1.6m、シャフト部の深さは 4.5m であった。シャフト部からは人型木棺の断片が出土した。

シャフトの最下部から西側に部屋が発見された（A 室）。A 室はやや東西に長い長方形であり、南北 2.5m、東西 3.5m、床面から天井までの距離が 1.0m であった。A 室からはファイアンス製のスカラベの指輪、ファイアンス製のウジャト形ビーズ、青、緑、黒、赤褐色によるファイアンス製の指輪が出土した。



1 シャフト71底部平面
1 Plan at the bottom of Shaft 71



2 シャフト71A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 71

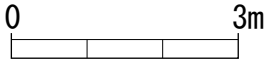


図 8　シャフト 71 平面・断面図
Fig.8 Plan and section of Shaft 71

出土遺物

a) 人型木棺片（写真 4）

人型木棺の蓋の足部分であり、シャフト部から出土した。中央に銘文帯があり、銘文帯の部分は断面が弧になるようにわずかにくぼんでいる。全体が黄色で塗られ、銘文帯の左右の線と文字のアウトラインは赤色で書かれており、一部その上を青色で塗った痕跡が見られた。

b) ファイアンス製指輪（図 9-1 ～ 11）

A 室よりファイアンス製の指輪 11 点が出土した。直径が 1.9 ～ 2.3cm、厚さ 3mm 前後であり、青色（図 9-1 ～ 4）、緑色（図 9-5 ～ 9）、黒色（図 9-10）、赤褐色（図 9-11）などの色があった。類例はサッカラでも見られ、第 18 王朝後期から第 19 王朝に年代づけられている（Schneider 1996: 49, cat.306; Martin et al. 2001: 47, cat.105）。

c) スカラベ形指輪（図 9-12）

長さ 1.7cm、幅 1.2cm、厚さ 0.7cm のスカラベ形の指輪の一部で、中央のスカラベは緑色のファイアンス製であり、周囲は青銅の枠で覆われている。青銅の枠

写真 4　シャフト 71 出土人型木棺片
Photo 4 Fragment of wooden coffin lid from Shaft 71

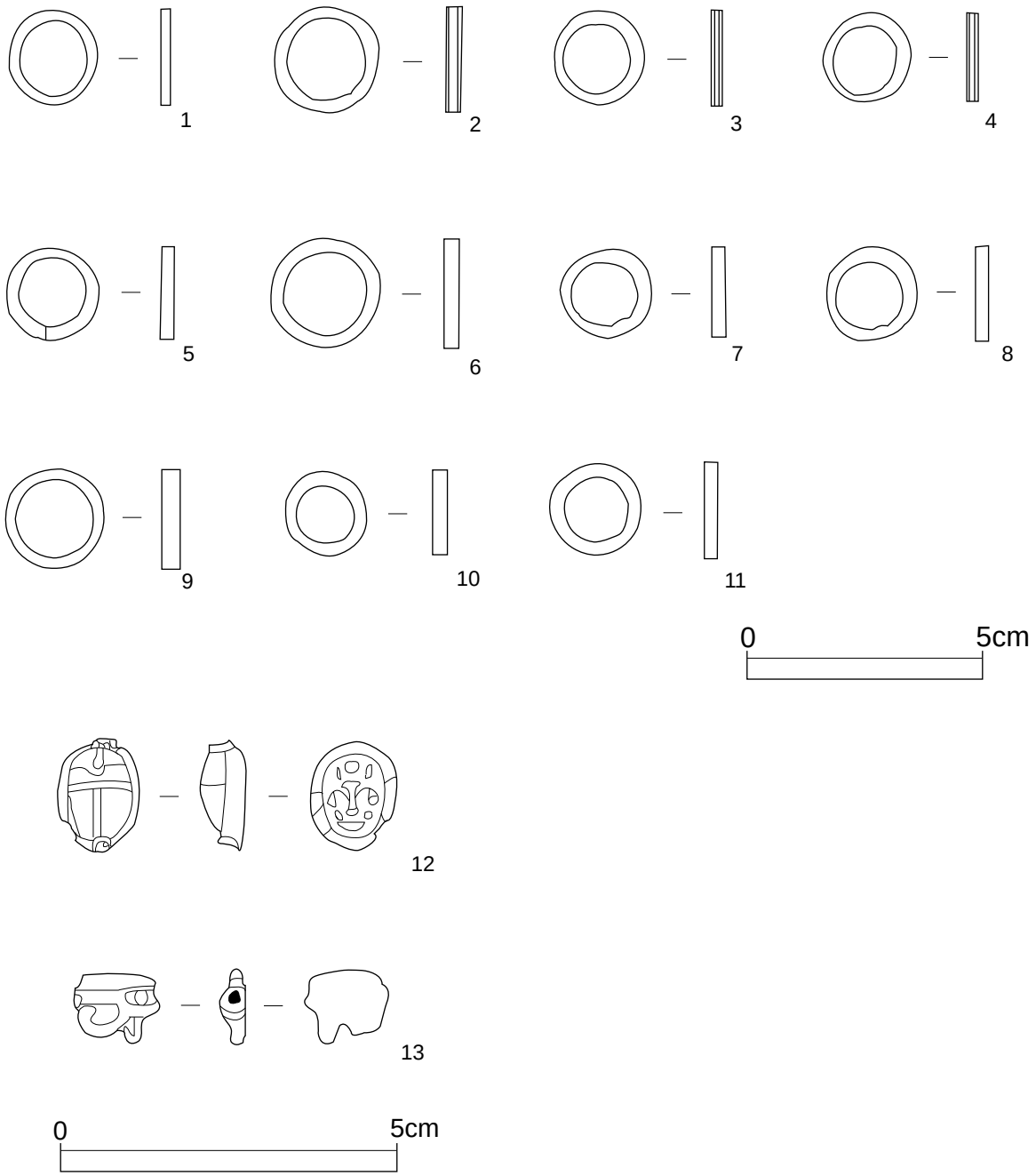


図 9　シャフト 71 出土遺物
Fig.9 Objects from Shaft 71

の一部には鍍金が残っていることから、本来は青銅の枠全体に鍍金が施されていたと考えられる。青銅部分の両端は指にはめるための環が付けられていた痕があった。同様の例としてはグラーブの埋葬から出土しているものが挙げられる（Brunton and Engelbach 1927: Pl.XXIV-12, 13, 16, 17）。文様で類似している例としては、ハラガの新王国時代の墓から出土しているものがある（Engelbach 1923: Pl.XXI-141, 198）。

d) ファイアンス製ビーズ（図 9-13）

高さ 1.1cm、幅 1.3cm、厚さ 0.4cm のウジャトの眼を象ったファイアンス製ビーズであり、横方向に紐を

通すための穴が空けられている。類似する例はサッカラ（Raven 2005: 88, cat.179）、グラーブ（Brunton and Engelbach 1927: Pl.XLII-38D）などで見られ、前者では第 20 王朝に年代づけられている。

（3）シャフト 72（図 10-1, 2）

シャフト 72 はグリッド 2E37 に位置しており、シャフトの上部が 2007 年の第 12 次調査で確認された。シャフト開口部の長軸の方向は東西であり、開口部の平面の大きさは 0.8 x 1.6m であった。シャフト部は深さ 1.5m であり、部屋はなく、埋葬に使用された痕跡も見受けられなかったことから、未完成のシャフトと考えられる。

（4）シャフト 81（図 10-3 ～ 5）

シャフト 81 はグリッド 3E31 に位置しており、シャフトの上部が 2007 年の第 13 次調査で確認された。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、開口部の平面の大きさは 2.0 x 0.7m だが、開口部の北東側に東西に長い溝状の掘り込みがあり、シャフト部の東面に達している。溝状の掘り込みは長さが約 1.5m、幅は 60cm、深さ 50cm ほどであり、日乾煉瓦が 2 点出土したのみで、埋葬の痕跡は発見されなかった。

シャフト 81 のシャフト部は深さ 2.2m で底に達しており、埋葬室は発見されなかった。しかしながら、人骨、土器片、木棺片などが出土していることから、シャフト部への埋葬が行われていた可能性がある。

（５）シャフト 82（図 10-6 ～ 8）

シャフト 82 はグリッド 3E42 から 3E32 にまたがっており、2007 年の第 13 次調査の平面発掘で上部が確認されていた。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、大きさは 3.2 x 1.1 m で、他のシャフト墓と比べてシャフト部の平面が細長い。ファイアンス製のビーズがシャフト部から出土した。シャフト下部から南側に部屋が発見された（A 室）。シャフト部の床面は A 室の床面よりも約 40cm 低い。A 室は平面が南北に長い長方形であり、長さ 2.9m、幅 1.1m で、床面から天井までの高さが 1.4m であった。A 室の東壁には奥行き 0.8m、幅 0.7m、高さ 0.7m の壁龕が掘られていた。A 室の西側は床面から約 0.3m のところで西方向に拡張されていた。中王国時代に典型的な大型の丸底壺形土器 2 点が拡張部分から出土しており、両方とも完形の状態で残っていた。A 室からはファイアンス製ビーズ、杖の一部と思われる木製品片、土器、人骨が出土した。

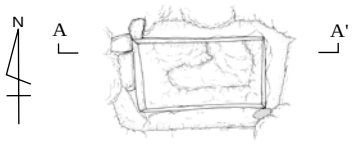
出土遺物

a) ファイアンス製ビーズ（図 11-1, 2）

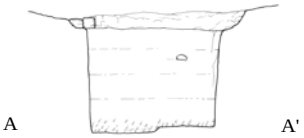
図 11-1 はシャフト部から出土したもので、図 11-2 は A 室から出土した。どちらも青色で、断面の形状が台形を呈する。同形のファイアンス製ビーズはハラガ、ラフーンの中王国時代の墓やリシュトでも出土している（Engelbach 1923: Pl.LI-61; Petrie et al. 1923: Pl.LXIII-61B2, 61C, 61C2; Arnold 1992: 66, 75, Pl.79-98, Pl.91-207）。

b) 木製品（図 11-3）

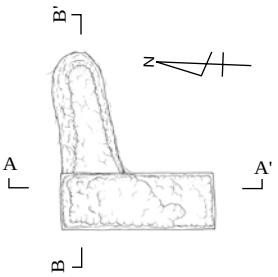
二又に分かれた形状の木製品で、ウアス（*w3s*）杖の下端部と思われるものである。上端に穿孔があり、おそらく杖の枝の部分とつなぎ合わせるためのものと考えられる。墓にウアス杖を副葬品として配する例は数多くあり、中王国時代ではディール・アル＝ベルシャのジェフウティナクト墓などが挙げられる（Freed et al. 2009: 141, 図 .99）。



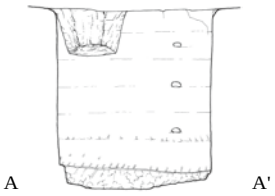
1 シャフト72平面
1 Plan of Shaft 72



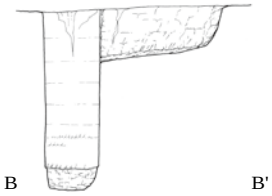
2 シャフト72A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 72



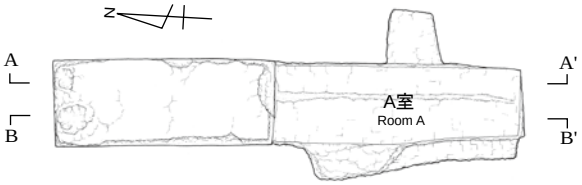
3 シャフト81平面
3 Plan of Shaft 81



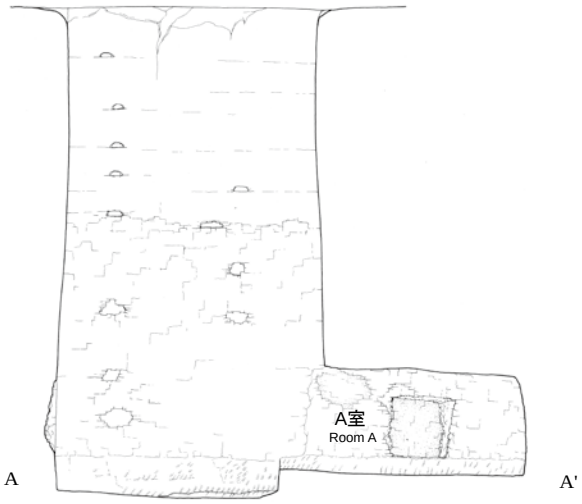
4 シャフト81A-A'断面
4 Section A-A' of Shaft 81



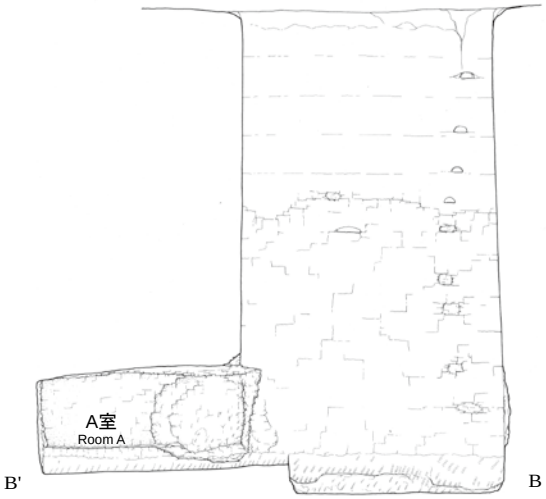
5 シャフト81B-B'断面
5 Section B-B' of Shaft 81



6 シャフト82底部平面
6 Plan of Shaft 82



7 シャフト82A-A'断面
7 Section A-A' of Shaft 82



8 シャフト82B-B'断面
8 Section B-B' of Shaft 82

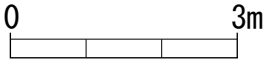


図 10　シャフト 72、81、82 平面・断面図
Fig.10 Plan and section of Shaft 72, 81, 82

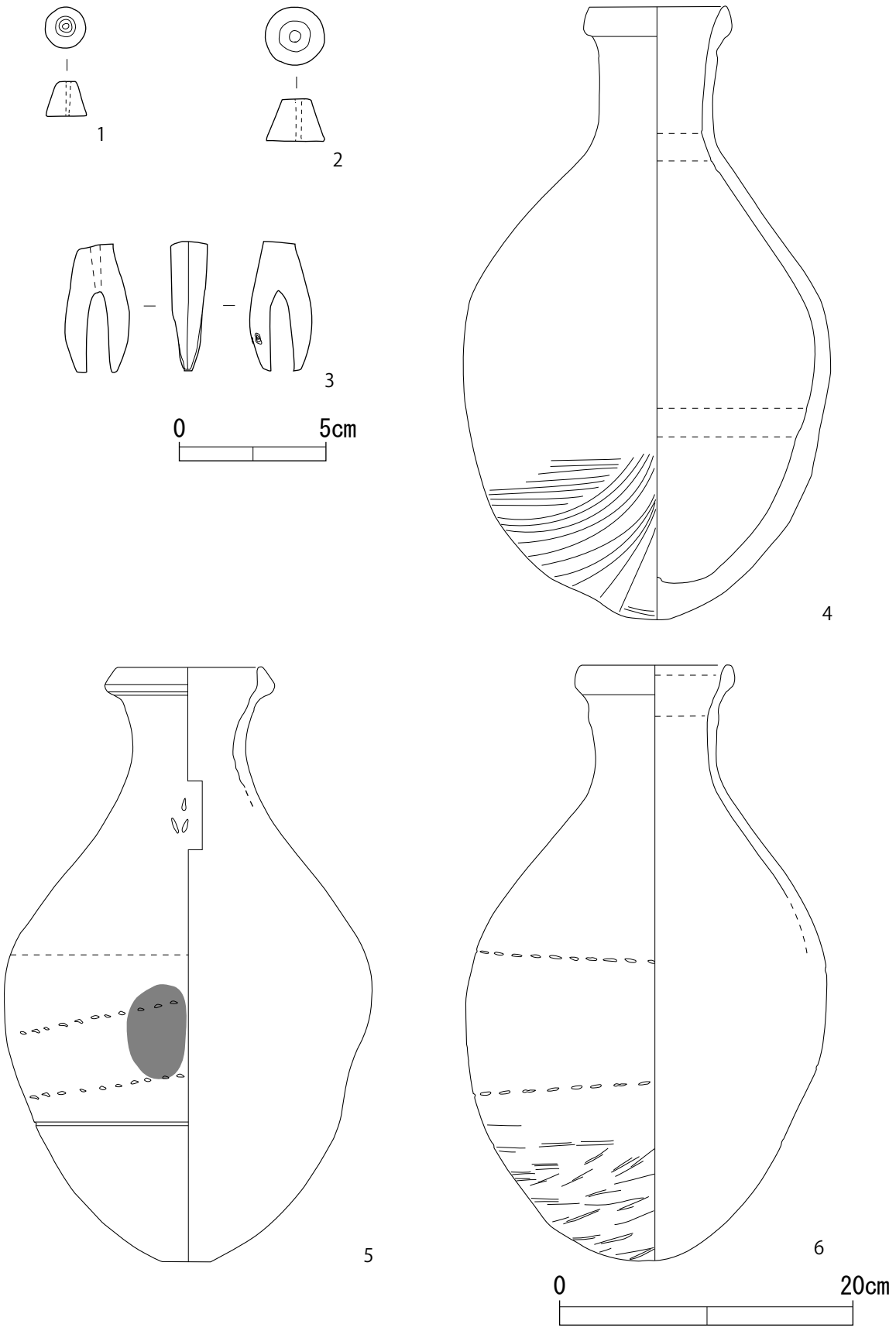


図 11　シャフト 82 出土遺物（1）
Fig.11 Objects from Shaft 82 (1)

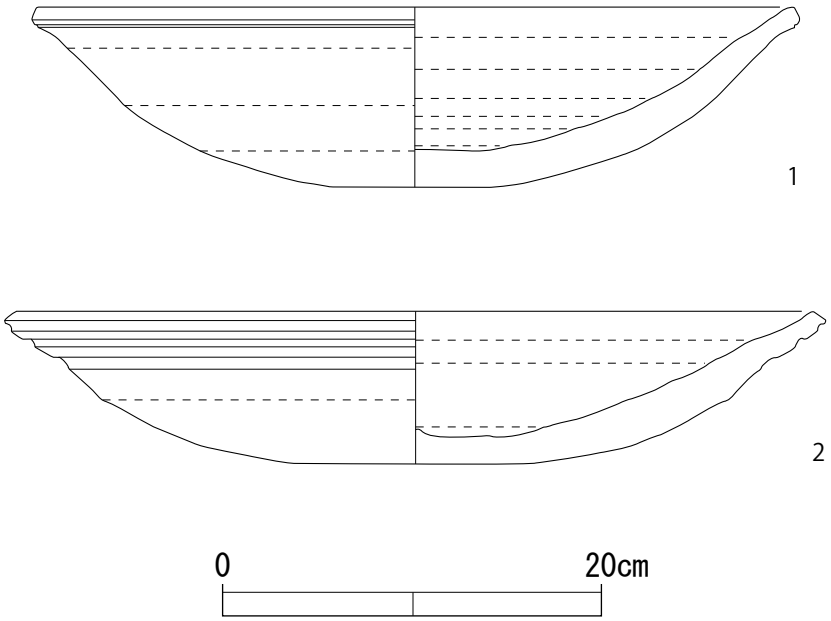


図 12　シャフト 82 出土遺物（2）
Fig.12 Objects from Shaft 82 (2)

c) 土器（図 11-4 ～ 6, 12-1, 2）

5 点の土器が A 室から出土した。3 点は大型の丸底壺形土器で、中王国時代のいわゆる「ビール壺（Beer bottle）」と呼ばれるものである [7)]。頸部の形状から、中王国時代第 12 王朝末から第 13 王朝初期に年代づけられる [8)]。2 点は大型の丸底皿形土器である。胎土は全て Nile C であり、中王国時代では典型的な器形である。

（6）シャフト 83

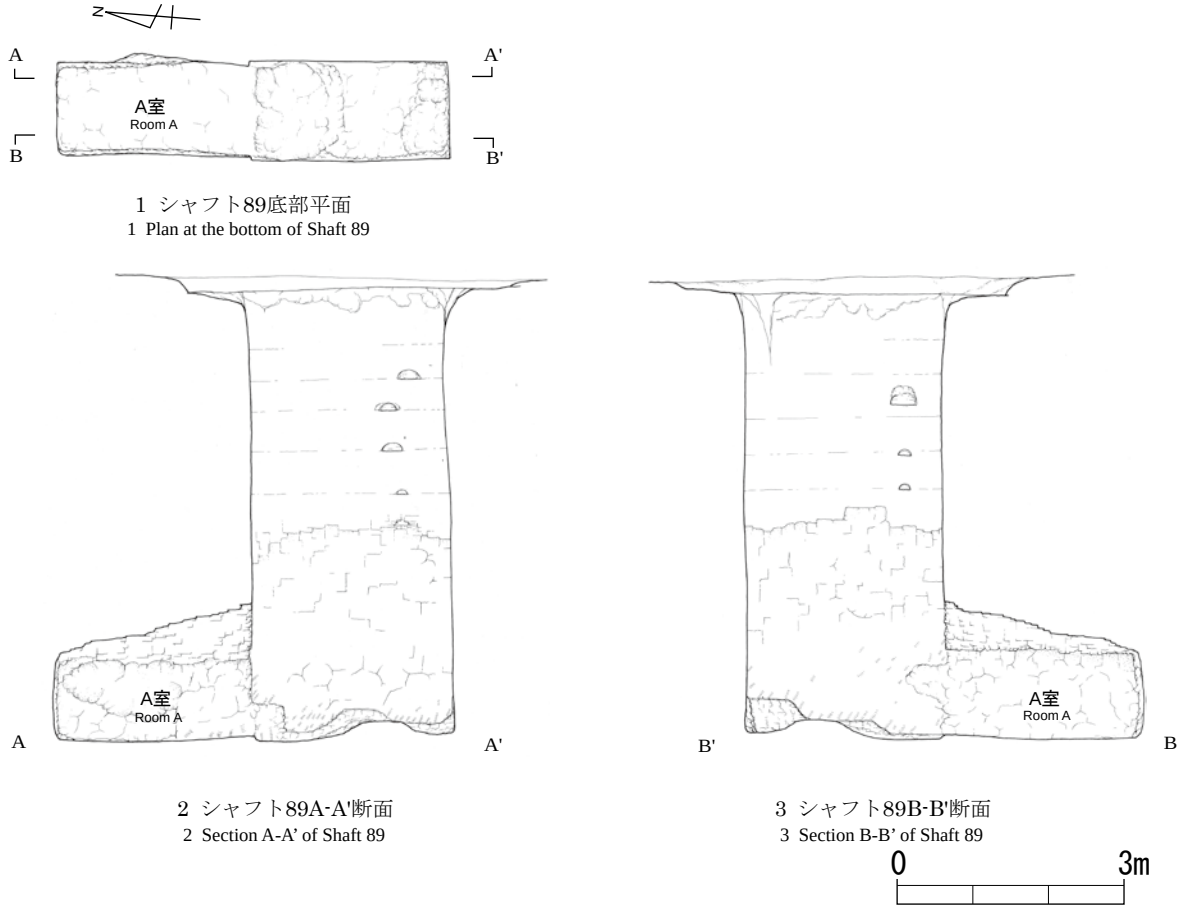
シャフト 83 はグリッド 3E31 に位置しており、2007 年の第 13 次調査の平面発掘で上部が確認されていた。開口部は円形であり、深さは約 0.7m であった。底部に土器片が出土したのみで、埋葬の痕跡は発見されなかった。

（7）シャフト 89（図 13）

シャフト 89 はグリッド 3E12 に位置しており、2007 年の第 13 次調査の平面発掘で上部が確認されていた。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、開口部の大きさは 2.6 x 1.3m、シャフト部の深さが 5.7m であった。最下部から北側に部屋が発見された（A 室）。A 室は南北に長い長方形であり、長さ 2.5m、幅 1.1 m、床面から天井までの高さが 1.0 mであった。A 室からはわずかな人骨、木片、土器片が出土した。シャフト部からは新王国時代の土器片が出土していた。開口部の長軸が南北方向のシャフトは中王国時代のものであることが指摘されており、形状も他の中王国時代の墓と類似している。北側に部屋が造られる例は少ないが、本遺跡ではシャフト 55 や 66 などの例が確認されている（吉村、近藤他 2011: 20, 図 .7-3, 4）。したがって、このシャフト墓は中王国時代の埋葬として用いられたものが盗掘を受け、シャフト部が開放された状態で放置され、後世の土器が流れ込む結果となった可能性が考えられる。

（8）シャフト 110（図 14）

シャフト 110 はグリッド 2E48 に位置しており、第 16 次調査で発見された。シャフト開口部の長軸の方向は東西であり、開口部の大きさは 1.7 x 0.9m、シャフト部の深さは 4.8m であった。シャフトの最上部には厚さ



1 シャフト89底部平面
1 Plan at the bottom of Shaft 89

2 シャフト89A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 89

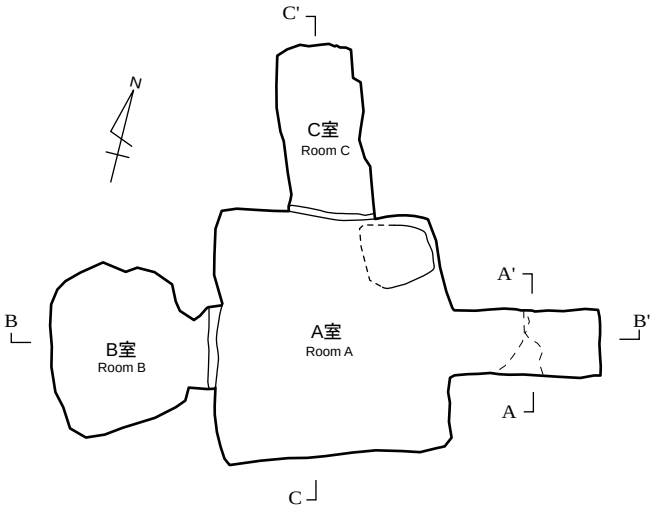
3 シャフト89B-B'断面
3 Section B-B' of Shaft 89

図 13　シャフト 89 平面・断面図
Fig.13 Plan and Section of Shaft 89

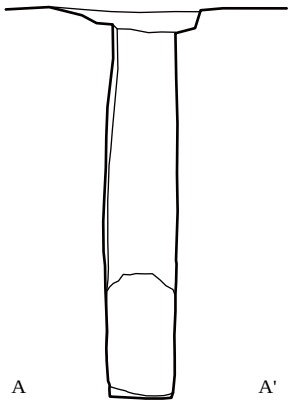
50cm に満たないタフラの堆積が確認されており、その下は黄色の細砂になっていた。シャフトの最下部から西側に部屋が発見された（A 室）。A 室の平面は方形であり、南北 3.0m、東西 3.1m、床から天井までの高さが 1.6m であった。A 室の西側と北側にさらに部屋が掘りこまれていた（それぞれ B 室、C 室）。西側の B 室は平面が若干南北に長い長方形であり、南北 2.3m、東西 1.7m、床面から天井までの高さが 1.0m であった。B 室の床面は A 室の床面よりも 0.2m 程高い。北側の C 室は平面が南北に長い長方形であり、南北 2.4、東西 1.1m、床面から天井までの高さが 1.0m であり、C 室の床面は A 室の床面より 0.3m 程高い位置にある。A 室には水の流入によって硬化したと思われるタフラ混じりの砂層が A 室の西半分に厚く堆積しており、タフラ混じりの砂層の北側はレベルが高く層上面が C 室の床面レベルまであり、南に向かうにつれ徐々に層上面のレベルが下がっていた。石灰岩ブロックの破片と日乾レンガがこの層の上に散乱していた。

A 室から、2 体の人型木棺に加え、2 体分の人型木棺の蓋が発見された（図 15）。人型木棺の内 1 体（図 15-A）は比較的大型の木棺であり、左側面から頭部にかけては失われてはいたものの、その他の部分の残存状態は良好であった。全体が黒色に塗られ、黄色で碑文・図像が描かれており、被葬者の名前は「タウブパウマアト（*Tꜣ-wb-pꜣw-mꜣʿt*）」という名前であることが判った。この人型木棺は A 室から C 室にまたがって出土しており、脚側 3 分の 1 が C 室に入っていた。A 室では硬化したタフラ混じりの砂層の直上に置かれていた。図 15-A の木棺内部からは、木製のシャブティ・ボックスの断片が発見された。シャブティ・ボックスは全体が黒色に塗られ、黄色のラインで図像が描かれていた。

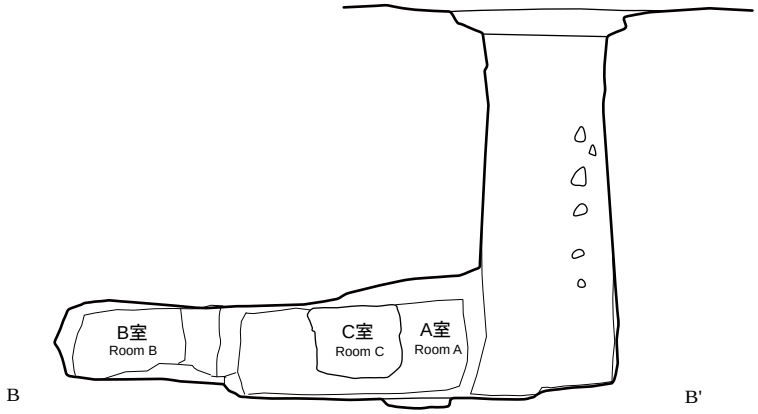
もう 1 体の人型木棺（図 15-B）は左側面を下にする形で横倒しになって A 室の北西側で出土していた。同



1 シャフト110底部平面
1 Plan at the bottom of Shaft 110



2 シャフト110A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 110



3 シャフト110B-B'断面
3 Section B-B' of Shaft 110

4 シャフト110C-C'断面
4 Section C-C' of Shaft 110

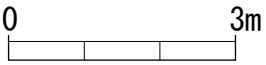


図 14　シャフト 110 平面・断面図
Fig.14 Plan and section of Shaft 110

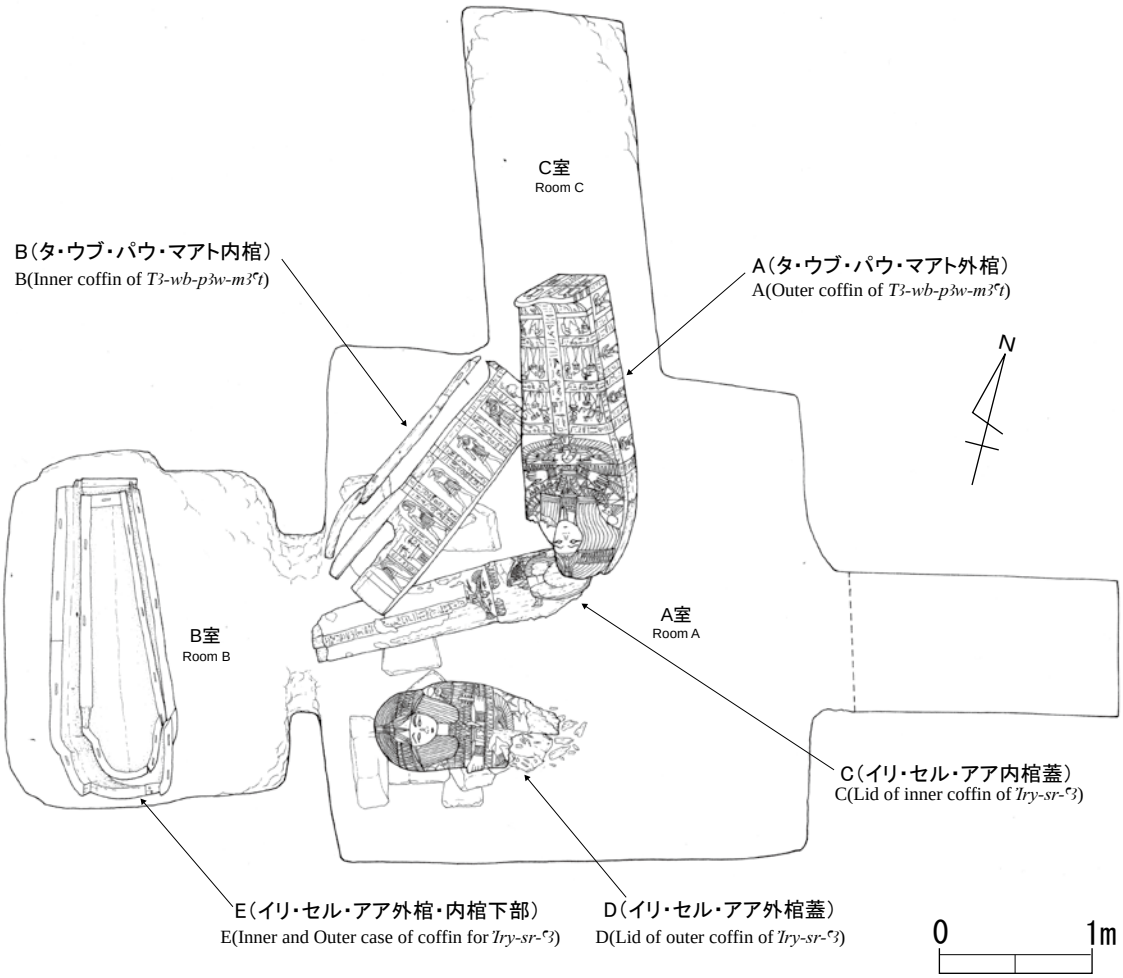


図 15　シャフト 110 木棺出土状況
Fig.15 The coffins as found in Shaft 110

様に黒色の木棺で碑文・図像が黄色で描かれていたが、前述のものと比べてやや小型であった。碑文から、この木棺は同じく「タウブパウマアト」に属するものであることが分かった。この棺の下からは前述の大型の木棺の左側面の部材が発見された。棺の所有者名が同じであること、棺の大きさに差がみられること、出土状況などから、これらの棺は入れ子式に納められた二重棺であったと考えられる。

A 室の中央付近から人型木棺の蓋（図 15-C）が頭を東に向けた形で、硬質化したタフラ混じりの砂層上から発見された。全体が黒色に塗られた木棺であり、蓋の下半部には 1 行の銘文帯があり、「イリセルアア（*Ꜣry-sr-ʿꜣ*）」という人物に属するものであったことが判明した。また、その南側には下半部が失われた棺の蓋が頭を西に向ける形で、同じタフラ混じりの砂層上から発見された（図 15-D）。この蓋も全面が黒色に塗られ、黄色で装飾が施されていたが、被葬者を特定できる碑文などは確認できなかった。

一方で、西奥にある B 室からは木棺の身の部分が入れ子になって 2 体発見された（図 15-E）。木棺と B 室西壁の間には、4 つのシャブティ・ボックスが上下逆さまの状態で発見された。シャブティ・ボックスには所有者の名前が書かれており、「イリセルアア」のものであることが判った。A 室の中央で発見された蓋には「イリセルアア」の名が書かれていたことから、この蓋に対応する身の部分は、B 室で発見された木棺であることが推測された。蓋の幅から、図 15-C が内棺の蓋であり、図 15-D が外棺の蓋と考えられる。

A 室の図 15-A（タウブパウマアト）の木棺の東側の砂層から、木製シャブティがまとまって出土した。残

存状況が悪いものもあり、本来副葬されていた個体数は明確でないが、少なくとも 36 個体を確認することができた。A 室から発見された木製シャブティで碑文が確認できるものは、全てタウブパウマアトの名前が書かれていた。

A 室の図 15-D の南側、A 室南壁際から木製のカノポス壺が発見された。蓋がジャッカルのもの（ドゥアムウトエフ）、ハヤブサのもの（ケベフセヌウエフ）、人型のもの（イムセティ）の 3 つが確認された。

大型のアンフォラが B 室の北西部分、西壁際で発見された。アンフォラは第 20 王朝に年代づけられる。また、A 室から熟年男性と老年女性の 2 体分の人骨が出土した [9)]。

出土遺物

a) 木棺（写真 5 ～ 9）

タウブパウマアト（外棺）：写真 5、図 15-A

長さ 1.94m、幅 0.68m、高さ 0.76m、全体が黒色の樹脂で塗られ、黄色で銘文と細部の表現が描かれていた。蓋の頭部左側および身側面の頭頂部分は失われていた。蓋部中央の銘文帯には被葬者の名前「タウブパウマアト」が認められた。

鬘の中央にはロータスの花が描かれ、横方向にヘア・バンドが見られた。眼と眉は象嵌ではなく、周囲の彩色と同様に黄色で表現されていた。胸の前には手が交差された形で表現されており、両手は開かれていた。手

写真 5　タウブパウマアトの人型木棺（外棺）
Photo 5 Outer anthropoid coffin of *Tꜣ-wb-pꜣw-mꜣʿt*

首まで描かれており、肘および腕のラインは彫刻によって表現されている。胸には襟飾りがあり、両端にホルス神の頭部を模した留め具が表現されていた。また、太陽の船を描いたペクトラルも表現されている。胸部下には翼を広げ、片膝をついたヌウト女神が配され、両翼の上にはウジャトの眼が描かれている。ヌウト女神の下には中央に縦方向の銘文帯が足の先端まで続き、それと直交する方向の銘文帯が両側面に向かって 3 本ずつ伸びている。銘文帯によって仕切られた空間の一番上（頭側）にはオシリスに向かって供物を捧げる女性が描かれ、その下の 2 つの空間にはミイラの姿をした神が 3 体配されており、それぞれに供物が捧げられている。これらの空間の表現は中央の銘文帯をはさんで左右対称になっている。足の甲に当たる部分には供物の前に跪き、片腕を頭の上に乗せた泣き女の図像が描かれていた。つま先部分には、縁取りの装飾が施されている。

身の右側面右肩付近には祠堂の上に一対のウジャトの眼があり、肩から足までの側面は縦方向の銘文帯によって 4 つの区画に区切られ、それぞれに頭の方向に向かって立つ神の姿がイムセティ、ハピ、ドゥアムウトエフ、トトの順に描かれていた。反対の左側面は左肩付近に祠堂の上に伏せているジャッカルがあり、肩から足にかけては同様に縦方向の銘文帯によって 4 つの区画に分かれ、それぞれにイムセティ、ハピ、ドゥアムウトエフ、トトの姿が描かれていた。足の裏には中央に縦方向の銘文帯があり、蓋部の銘文の両側にはティト（*tit*）の結び目のサインが配され、身部分の銘文の両側にはジェド（*ḏd*）柱のサインが配されていた。

タウブパウマアト（内棺）、写真 6、図 15-B

写真 6 は A 室の北西部分で発見された。蓋部中央の銘文帯から「タウブパウマアト」のものであることが判明した。長さ 1.79m、幅 0.49m、高さ 0.63m、全体が黒色の樹脂で塗られ、黄色で銘文と細部の表現が描かれていた。蓋の顔部分は剥ぎ取られているが、首に該当する部分に金箔が塗られていたことから、肌の表現とし

写真 6　タウブパウマアトの人型木棺（内棺）
Photo 6 Inner anthropoid coffin of *Tꜣ-wb-pꜣw-mꜣʿt*

て顔の部分も金箔で塗られていたことが想定できる。頭部の右側は残存しており、金箔を用いてヘア・バンドが表現されていた。胸部には両翼を広げて片膝をついたヌウト女神が描かれており、両翼の上にはウジャトの眼がそれぞれ描かれている。ヌウト女神の下には胸の前で交差された手が表現されており、手の部分にも金箔が残存していた。交差された手の下には太陽の船を描いたペクトラルが描かれ、その両側に伏せたジャッカルが表現されていた。銘文帯の配置についてはタウブパウマアトの外棺（図 15-A、写真 5）と大きく変わらず、中央の銘文帯にタウブパウマアトの名前が書かれていた。銘文帯で区切られた空間は、最上部（頭側）にオシリスに供物を捧げる女性がおり、その下の 2 つの空間にはミイラの姿をしたホルスの息子が 4 体描かれていた。外棺同様に足の甲には泣き女の図像、裏の部分はジェド柱とティトの結び目が描かれている。身の頭頂部から頭の左側までは欠損している。身の右側面は頭付近に足方向に向かって立つ神の姿があり、肩付近に祠堂とウジャトの眼があり、肩から足にかけては縦方向の銘文帯によって区切られていた。銘文帯で区切られた空間の中には外棺と同様にイムセティ、ハピ、ドゥアムウトエフ、トトなどの神の姿があるが、下端（足側）にも跪いて片腕を頭に置いた泣き女が描かれていた。左側面は肩付近に祠堂の上に伏せるジャッカルがあり、肩から足にかけて縦方向の銘文帯によって区切られていた。右側面と同じく、銘文帯で区切られた空間の中にはイムセティ、ハピ、ドゥアムウトエフ、トトの姿が描かれていた。さらに下端（足側）にも跪いて片腕を頭に置いた泣き女が描かれていた。

写真 7　イリセルアアの人型木棺蓋（外棺）
Photo 7 Lid of outer anthropoid coffin for *Ỉry-sr-ʿ3*

イリセルアア（外棺）：写真 7、8、図 15-D

写真 7 の人型木棺の蓋は A 室の南側で発見され、残存部分の長さが 1.17m、幅 0.64m、厚さ 0.15m、顔の部分を除いて全体が黒色の樹脂で塗られ、黄色で細部の表現が描かれていた。顔は青緑色の顔料が塗られており、眉と眼、アイラインは青色のガラスおよび石を用いて象嵌で表現されていた。鬘は後ろ髪を肩に垂らす髪型を模したもので、ラメセス朝時代の男性の棺に多く用いられる。腕は胸の前でクロスされ、左右の手はダボ釘を用いて別に取り付けられている。右手には木製の「ジェド」のシンボル、左手には「アンク」のシンボルが握られていた。胸にはハヤブサの留め具が用いられた襟飾りと、太陽の船の図像が描かれたペクトラルが表現されている。胸部は残存状態が悪いものの、ヌウト女神の両翼の一部と、翼の下に伏せたジャッカルが配されていることが確認できる。

写真 8 は B 室で入れ子になって発見された身の外棺にあたるものである。長さが 2.14m、幅が 0.72m、高さが 0.78m、全体が黒色の樹脂で塗られていた。棺の左側面（写真 8 の手前側）の上部には蓋の一部が残存しており、頭部には鬘の装飾が

写真 8　イリセルアアの人型木棺（外棺）
Photo 8 Case of outer anthropoid coffin for *Iry-sr-ꜥ*

黄色のラインで表現されている。タウブパウマアトの棺は側面や足裏にも黄色のラインによって彩色が施されているが、イリセルアアの外棺の身に関しては一切装飾が見られない。

イリセルアア（内棺）：写真 9、図 15-C

蓋は A 室の中央付近で発見され、身の部分は B 室で入れ子になって発見された二重棺の内側にあたる。長さが 1.88m、幅 0.55m、高さが 0.55m である。蓋の顔部分は剥ぎ取られ失われているが、首に該当する部分は金箔が施されていたことから、肌の表現として顔の部分も金箔が施されていたことが想定できる。胸の前で交差された手も剥ぎ取られているが、同様に手にも金箔が塗られていたと推測される。鬘は外棺同様に後ろ髪を肩に垂らす髪型が表現されている。襟飾りと、ペクトラルの一部が確認できる。腕の下には、両翼を広げ片膝をついたヌウト女神の姿が描かれており、翼の下にはウジャトの眼が配置されている。

銘文帯はヌウト女神の下から、足先にかけて 1 本のみ表現されている。外棺同様、身に関しては装飾は見られない。

銘文帯や神々の図像の施し方、ロータスを用いた髪飾りや二段構造の髪型が表現された鬘の形態、両手を開き交差する姿で表現されている点は、第 19 王朝から第 20 王朝の木棺に見られる特徴である (Taylor 1989: 35; Taylor 2001: 169-170) 。イリセルアアの外棺の蓋に表現されているように、木製のアミュレットの模型が手の部分に嵌め込まれている例は第 19 王朝から第 22 王朝初期に認められる（Raven 1991: 20, note.47）。既往の木棺に関する研究では、黒色の木棺は第 18 王朝後半から使用され始め第 19 王朝初期（ラメセス 2 世治世）まで使用されたと考えられている（Taylor 1989: 35; Ikram and Dodson 1998: 215; Taylor 2001: 168-169）。しかしながら、土器やシャブティ・ボックスなど共伴する遺物は第 20 王朝に年代づけられることから、この木棺を用

写真 9　イリセルアアの人型木棺（内棺）
Photo 9 Inner anthropoid coffin of *Ꜣry-sr-ꜥꜣ*

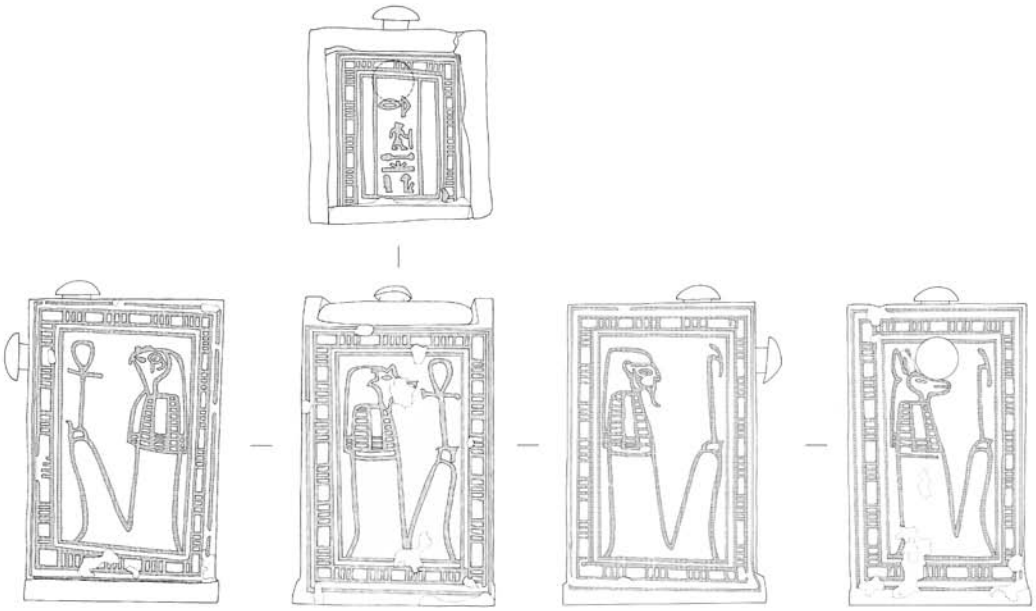
いた埋葬は第 20 王朝に行われた蓋然性が高い。黒色の木棺が第 20 王朝まで継続して使用されていたことになり、メンフィス地域では木棺の装飾は独自の発展を遂げていた可能性が指摘できる [10)]。

b) 木製シャブティ・ボックス（図 16、17）

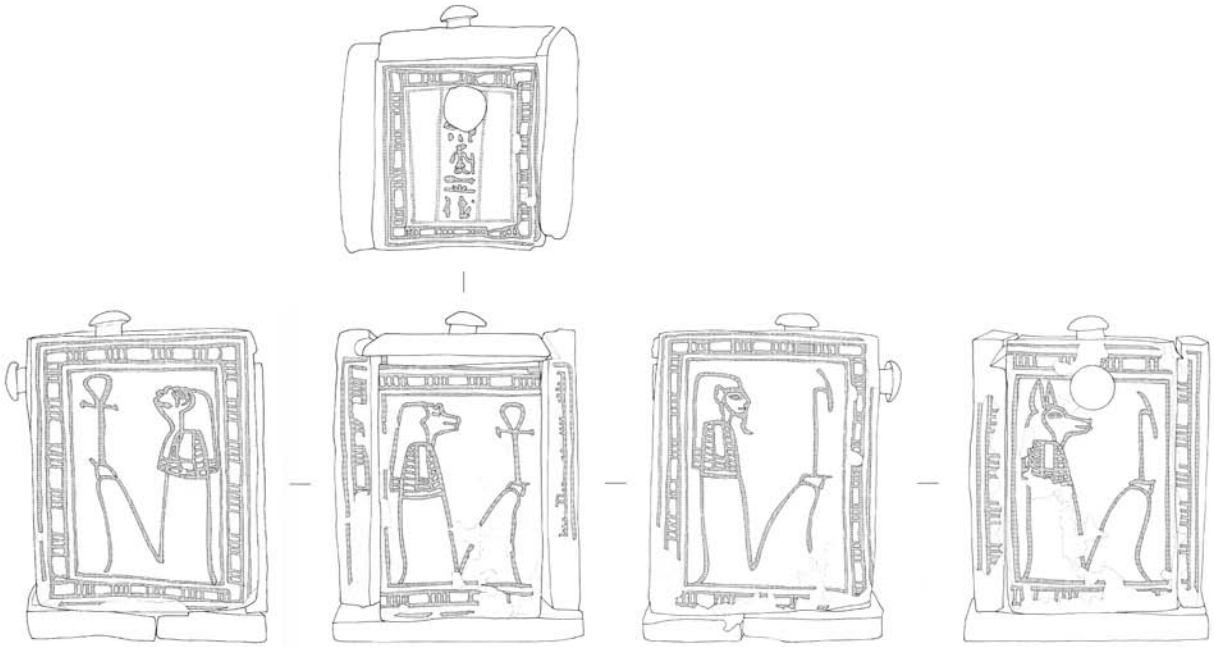
図 16-1, 2、図 17-1, 2 は B 室の西壁際で上下逆さまの状態で発見された。木製で、棺と同様に外面全面が黒色の樹脂で塗られ、黄色のラインで碑文と装飾が描かれていた。側面にはホルスの 4 人の息子が描かれ、スライド式の蓋の上面には被葬者の「イリセルアア」の名前が書かれていた。蓋の断面は台形を呈する。高さは 28 ～ 29cm、幅 18 ～ 23cm、奥行 20 ～ 23cm、であり、それぞれ 12 ～ 14 体の木製シャブティが納められていた。D. アストンによれば、ホルスの 4 人の息子がシャブティ・ボックスの側面に描かれるのは、第 19 王朝の後期から紀元前 980 年頃に見られる特徴である（Aston 1994: 38）。

図 17-3 は A 室、タウブパウマアトの外棺（図 15-A、写真 5）の中から発見された木製シャブティ・ボックスの断片で、外面全面が黒色の樹脂で覆われ、黄色のラインで装飾が描かれていた。残存している面の幅が 17.3cm、高さ 22cm であり、B 室出土のものよりも比較的小さい。オシリスに対して被葬者が供物を捧げている様子が描かれており、黒色の背景に黄色の線でこのような図像が描かれるのは第 19 王朝の後期から第 20 王朝に年代づけられ、特に第 20 王朝に多いとされている（Aston 1994: 39, Pl.7.2）。

図 17-4 は A 室で発見された木製シャブティ・ボックスの蓋の断片である。一部表面に塗られていた黒色の樹脂が残存しており、表面に黄色のラインで装飾が施されていたことが確認できる。断面は台形を呈していたことが推測され、B 室出土のものと同形と考えられる。



1 シャフト110B室出土木製シャブティボックス①
1 Wooden shabti box (no.1) from Room B, Shaft 110



2 シャフト110B室出土木製シャブティボックス②
2 Wooden shabti box (no.2) from Room B, Shaft 110

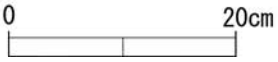
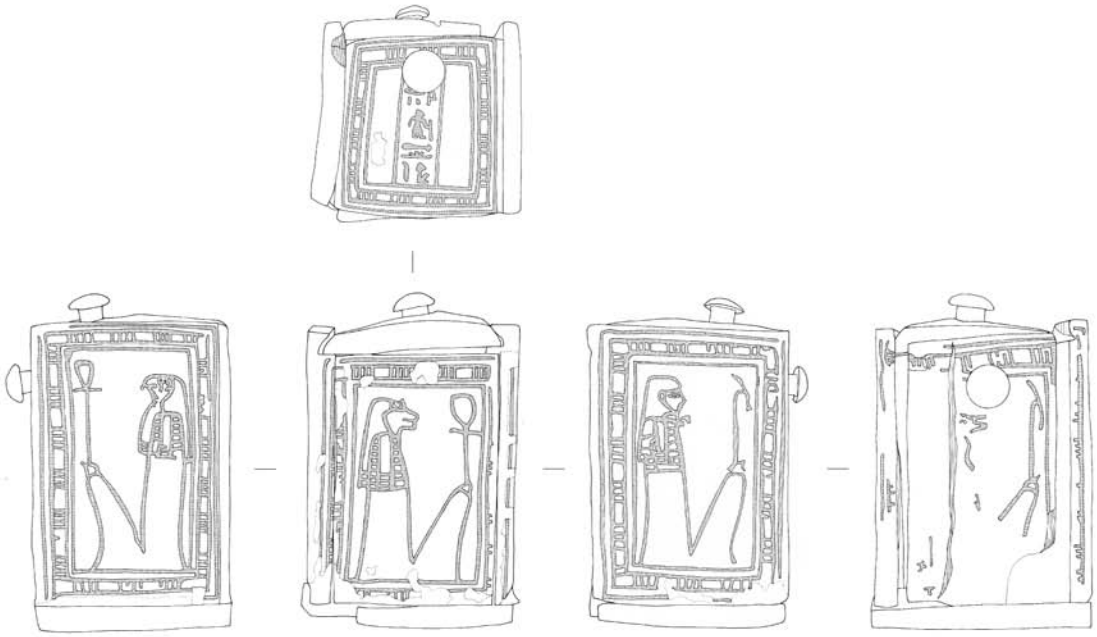
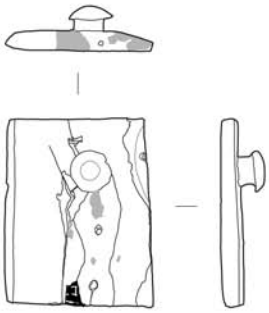


図 16　シャフト 110 出土木製シャブティ・ボックス（1）
Fig.16 Wooden Shabti boxes from Shaft 110 (1)



1 シャフト110B室出土木製シャブティボックス③
1 Wooden shabti box (no.3) from Room B, Shaft 110

2 シャフト110B室出土木製シャブティボックス④
2 Wooden shabti box (no.4) from Room B, Shaft 110



4 シャフト110A室出土木製シャブティボックス蓋
4 Lid of wooden shabti box from Room A, Shaft 110

3 シャフト110A室出土木製シャブティボックス
3 Wooden shabti box from Room A, Shaft 110

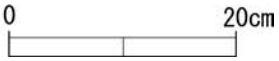


図 17　シャフト 110 出土木製シャブティ・ボックス（2）
Fig.17 Wooden Shabti boxes from Shaft 110 (2)

c) 木製シャブティ（写真 10 ～ 14）

写真 10 ～ 13 は B 室で出土した木製シャブティ・ボックスに納められていたシャブティ群である。写真 10（12 体）は図 16-1 のシャブティ・ボックス、写真 11（14 体）は図 16-2、写真 12（13 体）は図 17-1、写真 13（13 体）は図 17-2 にそれぞれ納められていた。全てのシャブティが全体を黒色で塗られ、その上に黄色で碑文と細部の装飾が描かれていた。全てイリセルアアの名前が書かれている。どのグループにもキルトをまとった姿を現したシャブティが 1 体含まれているが、写真 14 のグループのみ 2 体含まれていた。一定数のシャブティのグループに対して監督者であるシャブティが加えられる例はこれまでにも知られている（Schneider 1977: I, 267）。

写真 14 は A 室のタウブパウマアトの外棺（図 15-A）の東側の砂層から出土した木製シャブティ群である。B 室出土のものと同様に、黒色の背景に黄色で碑文と細部の装飾が描かれていた。キルトをまとった姿のシャブティも 2 体確認されている。A 室出土のシャブティはシャブティ・ボックスには入れられておらず、個別に砂層から発見されているため、グループ関係は不明である。

1 人の被葬者に対するシャブティの数は、いくつかの例外を除けば第 19 王朝初期までは 10 体を超えないが、

写真 10　シャフト 110B 室出土木製シャブティ・ボックス①のシャブティ
Photo 10 Shabtis in shabti box no.1 found from Room B, Shaft110

写真 11　シャフト 110B 室出土木製シャブティ・ボックス②のシャブティ
Photo 11 Shabtis in shabti box no.2 found from Room B, Shaft110

写真 12　シャフト 110B 室出土木製シャブティ・ボックス③のシャブティ
Photo 12 Shabtis in shabti box no.3 found from Room B, Shaft110

写真 13　シャフト 110B 室出土木製シャブティ・ボックス④のシャブティ
Photo 13 Shabtis in shabti box no.4 found from Room B, Shaft110

写真 14　シャフト 110A 室出土木製シャブティ
Photo 14 Shabtis found from Room A, Shaft110

第 19 王朝以後、特に第 20 王朝では副葬されるシャブティの数が顕著に増加すると言われている（Schneider 1977: I, 267）。B 室のイリセルアアに対するシャブティは全部で 52 体あることから、第 19 王朝以後の傾向と一致する。黒色の背景に黄色で描かれた木製のシャブティは近隣のサッカラでも発見されており、第 19 王朝に年代づけられている（Martin et al. 2001: 40, Pl.77, cat.28-c, g, r）。

d) 木製カノポス壺（図 18）

3 点の木製カノポス壺が、A 室の木棺蓋（図 15-D）の南側、南壁際から出土した。図 18-1 はジャッカルの頭部を持つドゥアムウトエフ、図 18-2 はハヤブサの頭部を持つケベフセヌウエフ、図 18-3 は人型の頭部を持つイムセティを表現したものである。木棺やシャブティ・ボックス、シャブティと同様に全面が黒色で覆われ、黄色の線で細部が描かれている。黄色による彩色が行われるのは蓋である頭部のみであり、身の部分には見られない。

e) 土器（図 19）

図 19 は A 室および B 室から発見された主な土器である。図 19-2 は B 室の北西部分、西壁際で床面直上から発見されたアンフォラである。頸部に入れられていた封泥が付近で発見されており、アンフォラの内部には灰色の粉状のものが充填されていた。肩部が緩やかなカーブを描き、胴部の最大径となる部分が胴下半部に位置するタイプのアンフォラは、D. アストンによる分類の B3 に該当すると考えられる。B3 はセトナクト王もしくはラメセス 3 世の治世からラメセス 11 世の治世に年代づけられており（Aston 2004: 193, 図 .8-b）、ほぼ第 20 王朝に相当する。

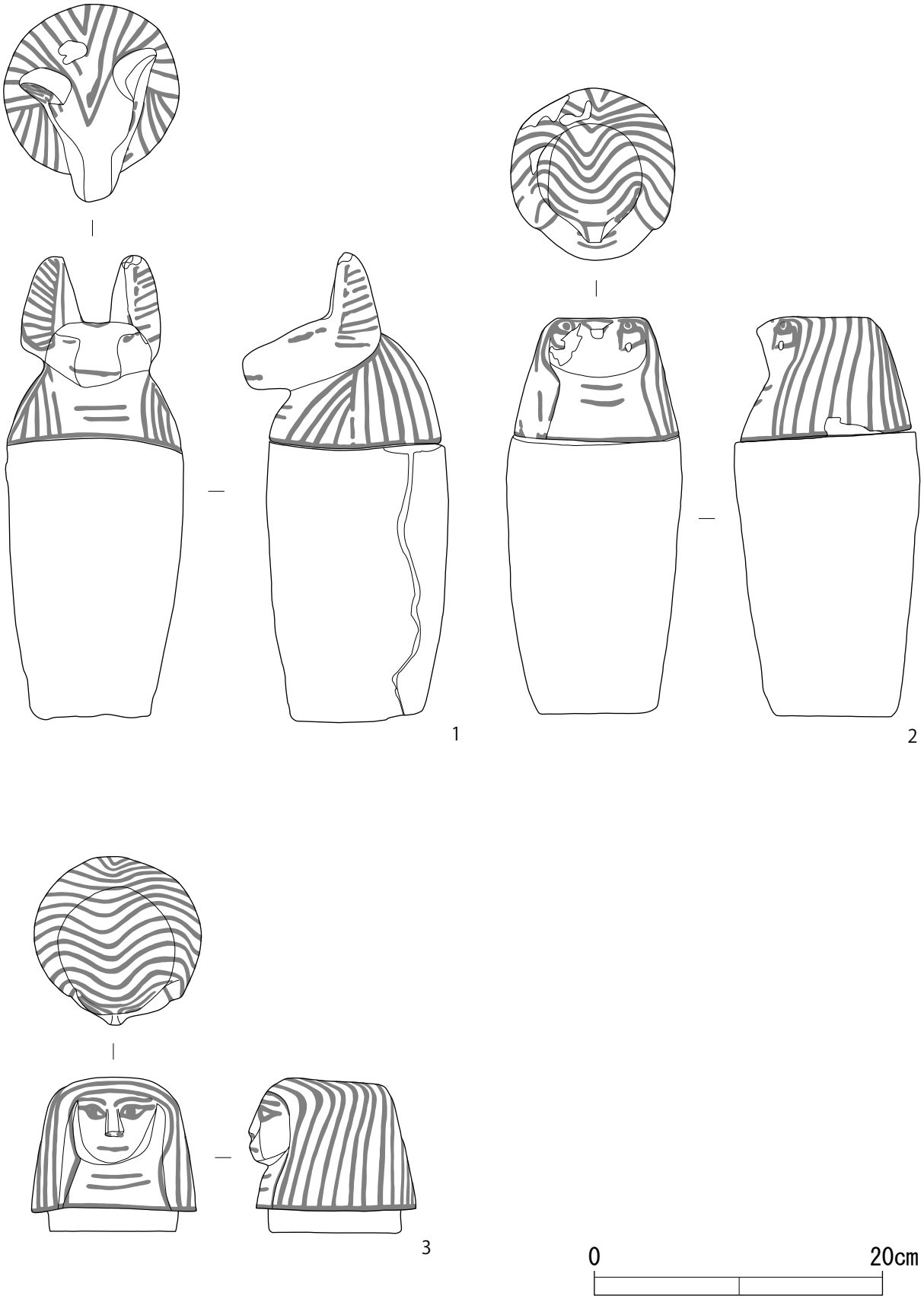


図 18　シャフト 110A 室出土木製カノポス壺
Fig.18 Wooden canopic jars found from Room A, Shaft 110

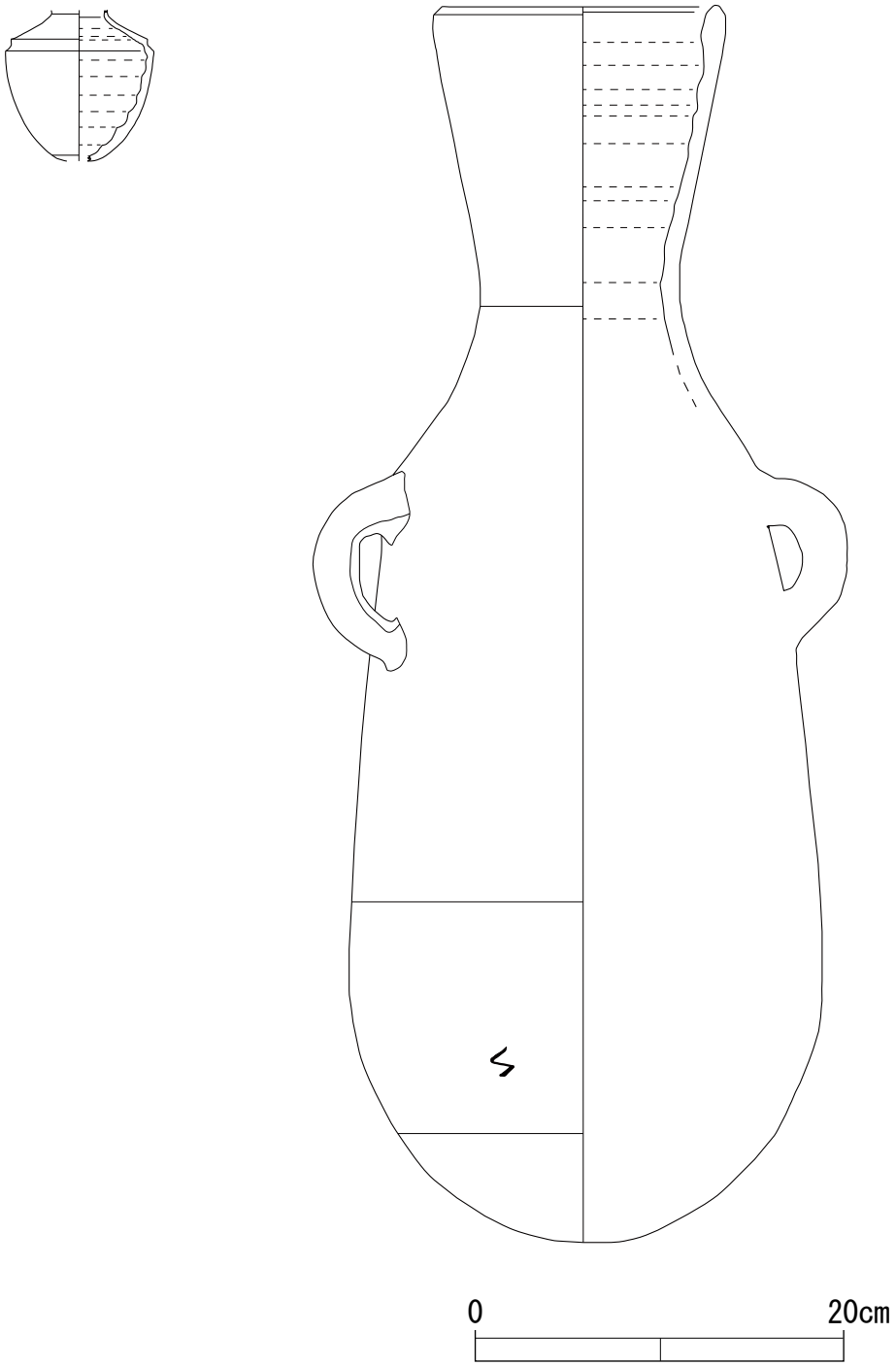
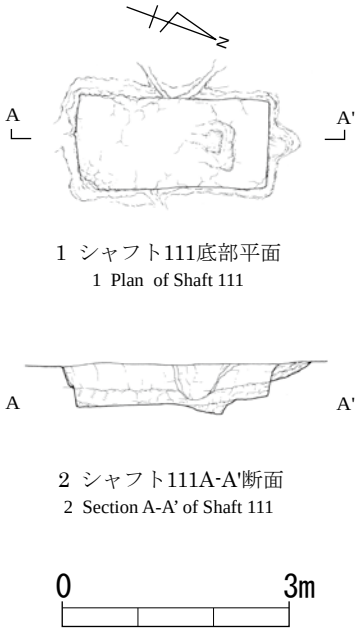


図 19　シャフト 110 出土土器
Fig.19 Pottery from Shaft 110

シャフト 110 のまとめ

シャフト 110 はタウブパウマアトとイリセルアアの 2 人の人物の埋葬であり、熟年男性と老年女性の 2 体の人骨が出土したこともそれを裏付けている。木製シャブティ・ボックスは D. アストンの研究によると第 19 王朝後期から第 20 王朝に年代づけられ、特に第 20 王朝に多いことが指摘された。また、アンフォラについても同じく D. アストンの研究によって、ほぼ第 20 王朝に相当することが分かった。木棺も第 19 王朝から第 20 王朝に見られる特徴を有しており、これらの年代観と矛盾しない。これらのことから、シャフト 110 の埋葬は第 20 王朝頃に年代づけられると推測される。

特筆すべきは、木棺およびシャブティに書かれた碑文である。木棺の蓋とシャブティの正面に縦方向に書かれた碑文は、イリセルアアではすべて向かって右側が前であるのに対し、タウブパウマアトは向かって左側が前となる。この方向性は、すべてのシャブティに貫徹されている。つまり、木棺、シャブティがすべて一対のものとして計画されていることが見受けられる。



1 シャフト111底部平面
1 Plan of Shaft 111

2 シャフト111A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 111

図 20　シャフト 111 平面・断面図
Fig.20 Plan and section of Shaft 111

(9) シャフト 111（図 20）

シャフト 111 はグリッド 2E48 に位置しており、第 16 次調査で存在が確認された。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、開口部の大きさは 2.2 x 1.1m であった。シャフト部の深さは 0.6m であり、埋葬の痕跡も見られなかったことから、未完成のシャフトと考えられる。

Ⅲ．第 17 次調査

1. はじめに

第 17 次調査では「タ」墓の北側にあるシャフト墓の発掘を実施した。対象となった墓はシャフト 79、107、108、109 であり、シャフト 109 以外のシャフトは地下でつながっていた。西からシャフト 79、108、107 の順で並んでおり、両端のシャフト 79 と 107 は出土遺物から中王国時代の墓と考えられる。シャフト 108 は新王国時代の埋葬と推測されることから、シャフト 108 を掘削した際に両端のシャフトにつながってしまったものと考えられる。以下、各シャフト墓の発掘の成果について報告する。

２．シャフト墓の発掘

(1) シャフト 79（図 21、22-1）

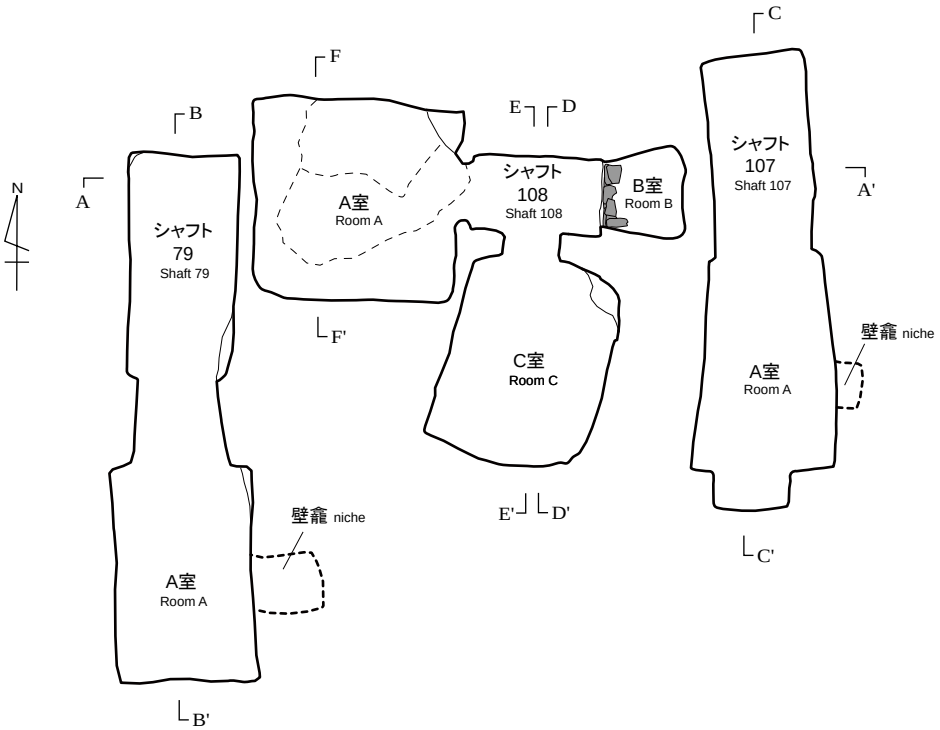
シャフト 79 はグリッド 2E49 に位置しており、2007 年の第 13 次調査でシャフトの開口部が確認されていた。シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、平面の大きさが 3.0 x 1.4m、シャフト部の深さは 6.7m であった。シャフト開口部の南側には日乾煉瓦による囲いの一部が残っていた。シャフト部からはファイアンス製シャブティの胴部が出土している。

シャフトの最下部から南側に部屋が発見された（A 室）。A 室の平面は南北に長い長方形で、長さ 4.0m、幅 1.8m、床面から天井までの高さが 1.9m であった。A 室の東壁には床面から 0.7m のところで奥行 0.9m、幅 0.7m、高さ 1.2m の壁龕が穿たれていた。A 室からは、ファイアンス製カバ像の断片、ファインアンス製の小像、ファイアンス製ビーズ、土器が出土した。ファイアンス製小像は第 13 王朝に年代づけられた例があり、土器は第 13 王朝初期に年代づけられることから、シャフト 79 は第 13 王朝初期の埋葬と考えられる。

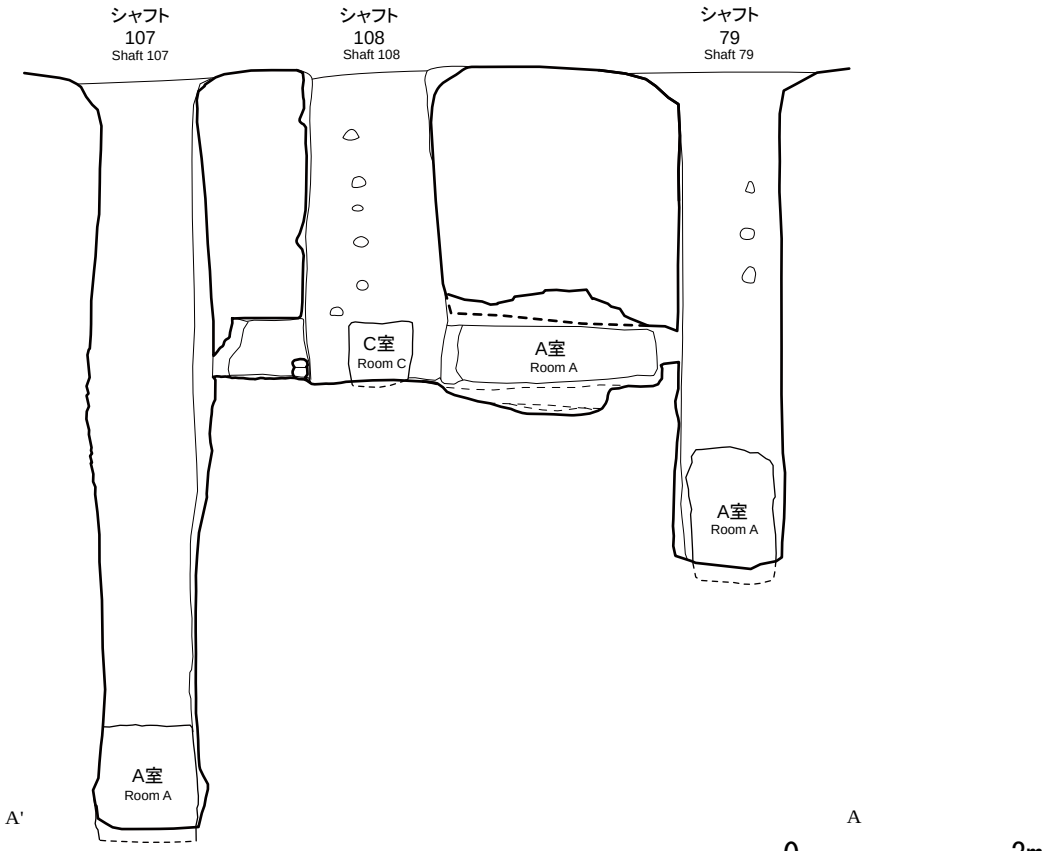
出土遺物

a) ファイアンス製シャブティ（図 23-1）

ファイアンス製シャブティの胴部がシャフト部から出土した。ファイアンスは青色で、首飾り、腕などの細部の表現や銘文帯は黒色で描かれている。類似するファイアンス製シャブティはこれまでにも「タ」墓やその周辺のシャフト墓からも出土している（吉村、近藤他 2005: 117, 写真 6; 吉村、馬場他 2009: 12, 図 8.1, 写真

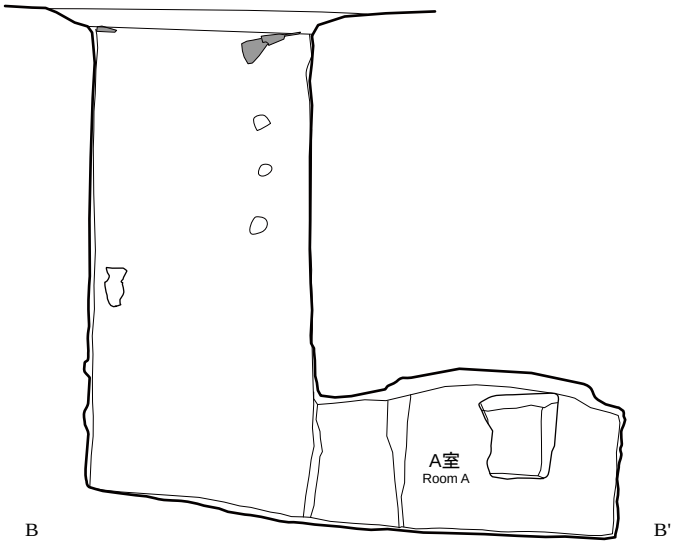


1 シャフト79、107、108平面
1 Plan of Shaft 79, 107, 108

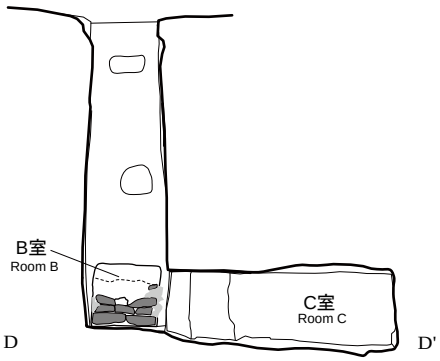


2 シャフト79、107、108A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 79, 107, 108

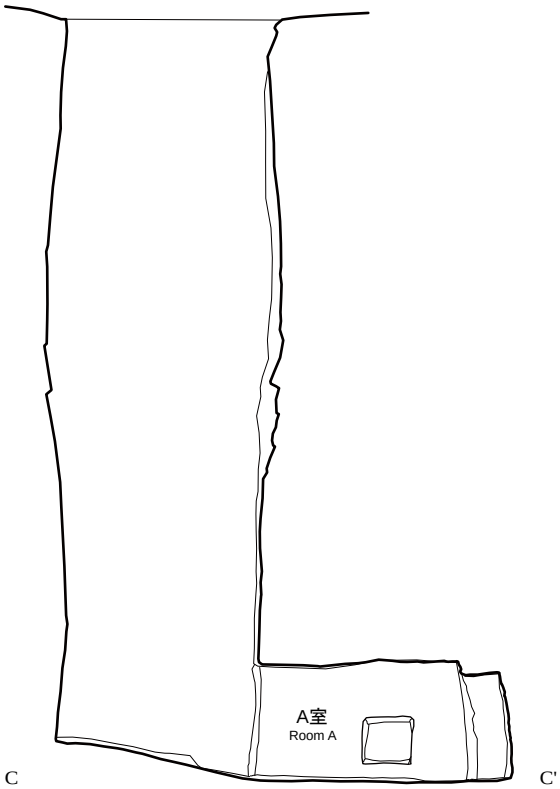
図 21　シャフト 79、107、108 平面・断面図（1）
Fig.21 Plan and section of Shaft 79, 107, 108 (1)



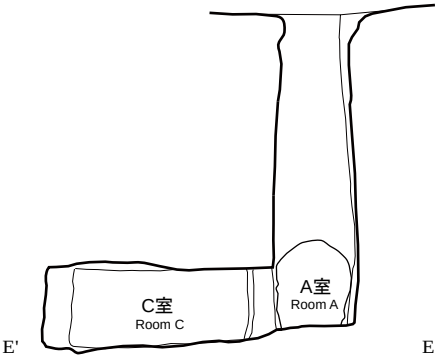
1 シャフト79B-B'断面
1 Section B-B' of Shaft 79



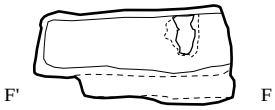
3 シャフト108D-D'断面
3 Section D-D' of Shaft 108



2 シャフト107C-C'断面
2 Section C-C' of Shaft 107



4 シャフト108E-E'断面
4 Section E-E' of Shaft 108



5 シャフト108A室F-F'断面
5 Section F-F' of Room A, Shaft 108

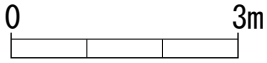


図 22　シャフト 79、107、108 平面・断面図（2）
Fig.22 Plan and section of Shaft 79, 107, 108 (2)

5; 吉村、近藤他 2011: 74-78, Fig.46, 47, Pl.17)。サッカラ地区の類例ではマヤとメリトの墓（Raven 2001: 37, Pl.19, cat.134, 135a, b, 136)、イウルウデフ墓（Raven 1991: 41-42, Pl.41, cat.49-52）で発見されており、第 19 王朝に年代付けられている。

b) ファイアンス製ビーズ（図 23-2 ～ 7）

図 23-2 ～ 7 は断面が台形を呈する青色ファイアンス製のビーズであり、全て A 室から出土した。同種のファイアンス製ビーズは前述の第 16 次調査シャフト 82 からも出土している（図 11-1, 2)。同形のファイアンス製ビーズはハラガ、ラフーンの中王国時代の墓域やリシュトで出土している（Engelbach 1923: Pl.LI-61; Petrie et al. 1923: Pl.LXIII-61B2, 61C, 61C2; Arnold 1992: 66, 75, Pl.79-98, Pl.91-207)。

c) ファイアンス製品（図 23-8）

断面が台形となる筒状のファイアンス製品であり、A 室から出土した。

d) ファイアンス製小像（図 23-9 ～ 11）

図 22-9 ～ 11 は厚さ約 5 ㎜の台の上に動物を象った像が配された青色ファイアンス製の小像群であり、全て A 室から出土した。図 23-9 はイヌを象っているようであり、一部黒色による彩色が見られた。類例としては、リシュトのセンウセレト 1 世のピラミッドにあるボート・ピットから出土したものがある（Arnold 1992: 78-79, Pl.86.239)。この場所から出土した小像群はアビュドスの北墓地 416 号墓から出土した小像群（Kemp and Merrillees 1980: 135-147）と同じタイプであり、416 号墓から出土した土器群から第 13 王朝に年代づけられている（Arnold 1992: 78, note.165)。図 23-10、11 は細長い楕円形または長方形の台の上に何らかの像があったようであるがすでに失われており、2 か所で欠損が見られるのみである。リシュトのセンウセレト 1 世のピラミッド・コンプレックス内にあるシャフトから、細長い楕円形の板の上に、座っている人物（もしくはサル）とイヌが向かい合う形で表現されたファイアンス製小像が発見されており、同じコンプレックス内のピットからも同種の小像の破片が出土している（Arnold 1992: 61-62, 66-67, Pl75.52, 79.105）[11)]。図 23-10、11 のファイアンス製小像も同様の遺物であったと考えられる。

e) ファイアンス製カバ像（図 23-12 ～ 14）

図 23-12 は A 室から出土したファイアンス製のカバ像の前足部分と考えられるもので、頭部と胴体の後ろ半分が失われていた。青色のファイアンスで、表面には黒色でロータスが描かれていた。図 23-13、14 は形状や大きさから同じカバ像の後ろ足と考えられる断片である。ファイアンス製のカバ像は墓に入れられる前に意図的に壊される習慣があったと考えられている。ファイアンス製カバ像が使用された年代については少なくとも中王国時代から第 2 中間期の間であると考えられている（Lacovara 1988: 127）[12)]。

f) 土器（図 24、25）

図 24 と 25 の土器は、図 24-6 のアンフォラの底部を除いて全て A 室から出土しており、中王国時代の典型的な器形である。図 24-3, 4, 7, 8 および図 25-1, 2 は「ビール壷（Beer bottle)」と呼ばれている大型の丸底壷形土器であり、頸部の形状から第 13 王朝初期に年代づけられる [13)]。

（2）シャフト 107（図 21、22-2）

シャフト 107 はグリッド 2E50 に位置しており、2008 年の第 16 次調査でシャフトの開口部が確認されていた。

図 23　シャフト 79 出土遺物（1）
Fig.23 Objects from Shaft 79 (1)

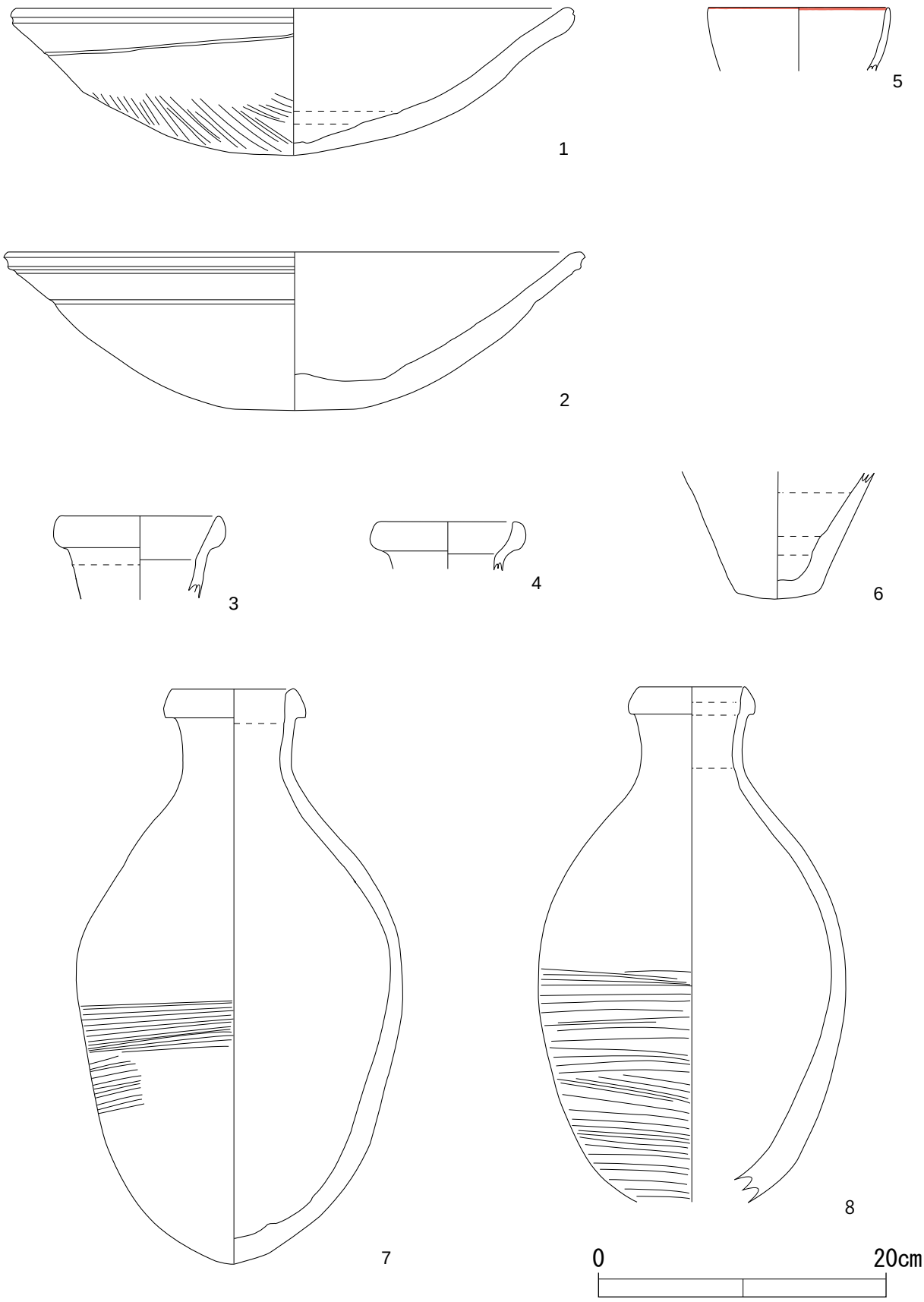


図 24　シャフト 79 出土遺物（2）
Fig.24 Objects from Shaft 79 (2)

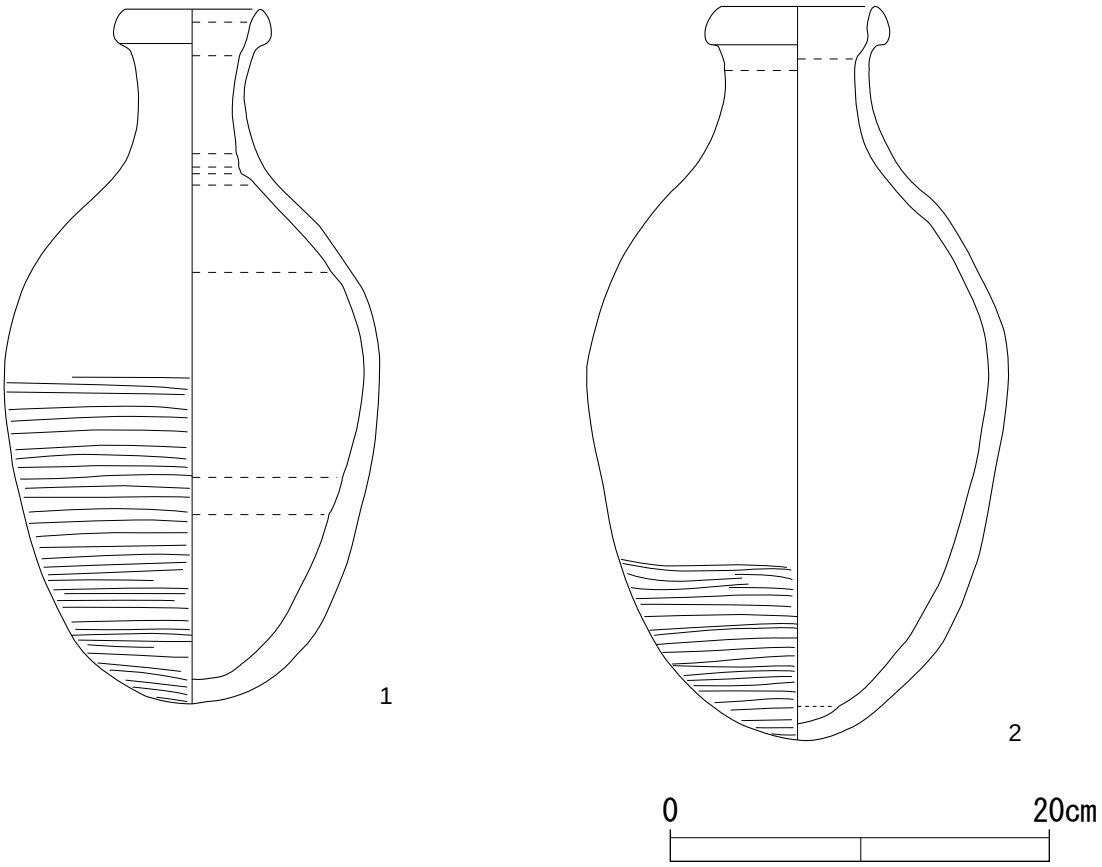


図 25　シャフト 79 出土遺物（3）
Fig.25 Objects from Shaft 79 (3)

シャフト開口部の長軸の方向は南北であり、平面の大きさが 2.6m x 1.4m、シャフト部の深さは 10.1m であった。シャフト部の上部は細砂のみであったが、地上から -3.2m のところで南側から日乾煉瓦が含まれたタフラの堆積が発見されており、シャフト最下部まで続いていた。堆積には土器片も多く含まれていた。シャフト部からファイアンス製のビーズが出土している。

シャフトの最下部から南側に部屋が発見された（A 室）、A 室の平面は南北に長い長方形で、長さ 2.6m、幅 1.4m、床面から天井までの高さが 1.5m であった。A 室の東壁には床面から約 0.25m のところで奥行 0.4m、幅 0.6m、高さ 0.6m の壁龕が穿たれていた。壁龕の前には長さ 0.6m、幅 0.47m、厚さ約 0.25m の石灰岩ブロックが床面の直上から出土した。石灰岩ブロックの上面はちょうど壁龕の床面と同じ高さになっていた。
A 室からは、完形の大型壺形土器 9 個体が、A 室東側の壁にもたせ掛けるようにして床面の直上から出土した（写真 15）。その他、人骨、ファイアンス製ビーズ、象嵌が出土している。

出土遺物

a) ファイアンス製ビーズ片（図 26-1）

図 26-1 は青色ファイアンス製のビーズ片であり、シャフト部から出土した。断面が台形を呈しており、前述のシャフト 79 や第 16 次調査シャフト 82 からも出土している（図 11-1, 2, 図 23-2 ～ 7）。ハラガ、ラフーンの墓域やリシュトから出土しており、中王国時代に類例が認められる（Engelbach 1923: Pl.LI-61; Petrie et al. 1923: Pl.LXIII-61B2, 61C, 61C2; Arnold 1992: 66, 75, Pl.79-98, Pl.91-207）

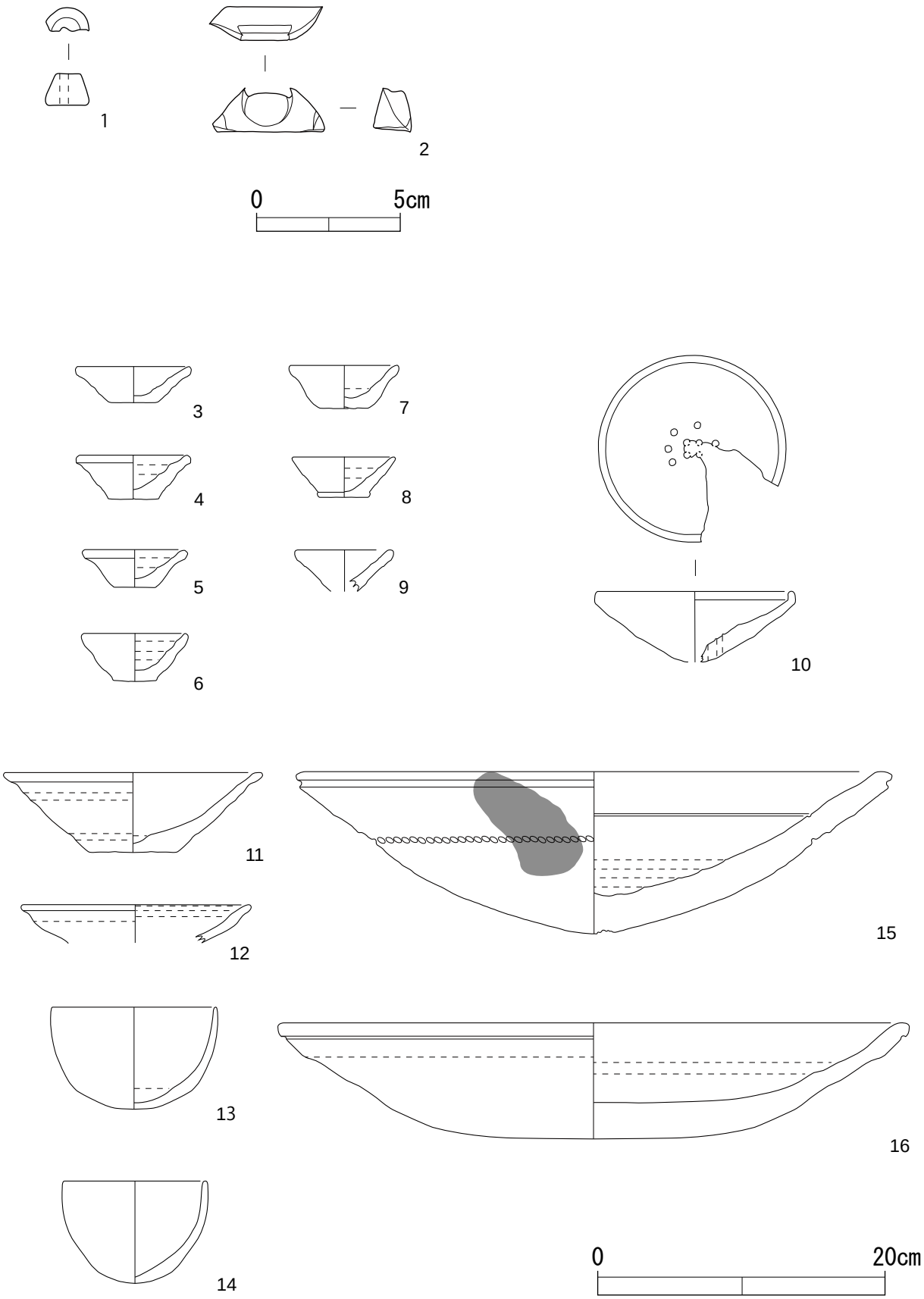


図 26　シャフト 107 出土遺物（1）
Fig.26 Objects from Shaft 107 (1)

写真 15　シャフト 107A 室土器出土状況
Photo 15 Pottery bottles as found in Room A, Shaft 107

b) 象嵌（図 26-2）

図 26-2 は A 室から出土した目の象嵌と思われるものであり、黒目の部分は失われていた。人型の木棺もしくはミイラマスクに嵌め込まれていたと考えられる。

c) 土器（図 26-3 ～ 16、27）

図 26 にあるものは、シャフト部出土の 26-9、13、14 以外はすべて A 室から出土したものである。図 27 では 13 のみシャフト部出土で、残りはすべて A 室から出土した。特徴的なものとして、まず図 26-10 は A 室から出土した丸底の皿型土器であり、底部に複数の穿孔が見られた。年代の基準となるものは、半球形碗形土器（図 26-13, 14）と大型丸底壺形土器（図 27）である。半球形碗形土器は 2 点ともシャフト部から出土したものであり、器形は第 12 王朝後期から第 13 王朝初期にかけて見られるものである [14)]。大型丸底壺形土器（ビール壺）第 13 王朝初期に年代付けられる [15)]。図 27-1 ～ 9 は A 室東側の床面からほぼ完形で発見されたものであり、図 27-10, 11 は接合の結果復元されたものである。

（3）シャフト 108（図 21、22-3 ～ 5）

シャフト 108 はグリッド 2E50 に位置しており、2008 年の第 16 次調査でシャフトの開口部が確認されていた。開口部の長軸の方向は東西であり、平面の大きさが 1.0 x 1.7m、シャフト部の深さは 4.1m であった。シャフト部からファイアンス製のシャブティ片が出土している。

シャフト部底の西側、東側、南側から部屋が発見された（それぞれ A 室、B 室、C 室）。西側の A 室の平面は方形を呈しており、南北 2.7m、東西 2.8m で床面から天井までの高さが 0.8m であった。A 室の床面は中央部から北側にかけて一段低くなっており、南端・西端とは最大で約 0.5m の段差がある。西壁には高さ 0.5m、幅 0.3m の穴が開いており、西隣りにあるシャフト 79 のシャフト部へ貫通していた。床面が一段低くなっている部分から葦が見つかっており、土器片が少量出土しているが、人骨やそれ以外の遺物は発見されなかった。東側の B 室は南北が 1.2m、東西が 1.1m であり、床面から天井までの高さが 0.8m であった。B 室の東壁は、隣にあるシャフト 107 のシャフト部に一部貫通していた。B 室開口部には日乾煉瓦による壁体が築かれていた。シャフト 108 の B 室を掘削している際に、隣のシャフトにぶつかってしまったため、B 室の掘削を取りやめ、流れ込んでくる砂を止めるために日乾煉瓦による壁体を築いたものと推測される。日乾煉瓦にはスタンプが押されていたものが少なくとも 4 個体確認された。スタンプは過去にイパイのトゥーム・チャペルで確認されていたものと類似していることから、これらの日乾煉瓦はイパイのトゥーム・チャペルに由来すると考えられる。

南側の C 室はやや南北に長い方形であり、南北 2.7m、東西 2.1m、床面から天井までの高さが 1.0m であった。C 室の南西隅から床面直上で人型木棺の蓋の足部分と考えられる断片が出土した。

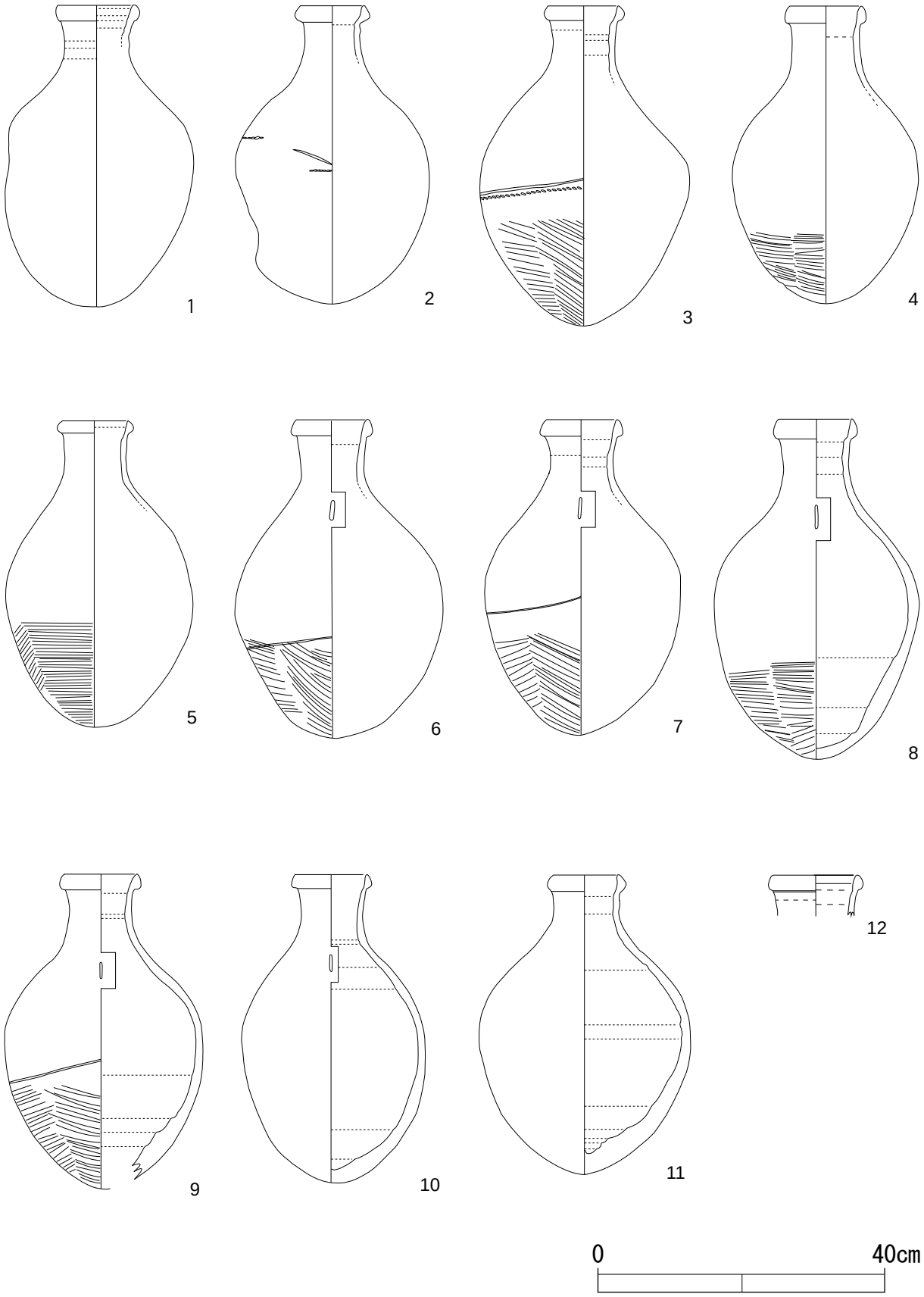


図 27　シャフト 107 出土遺物（2）
Fig.27 Objects from Shaft 107 (2)

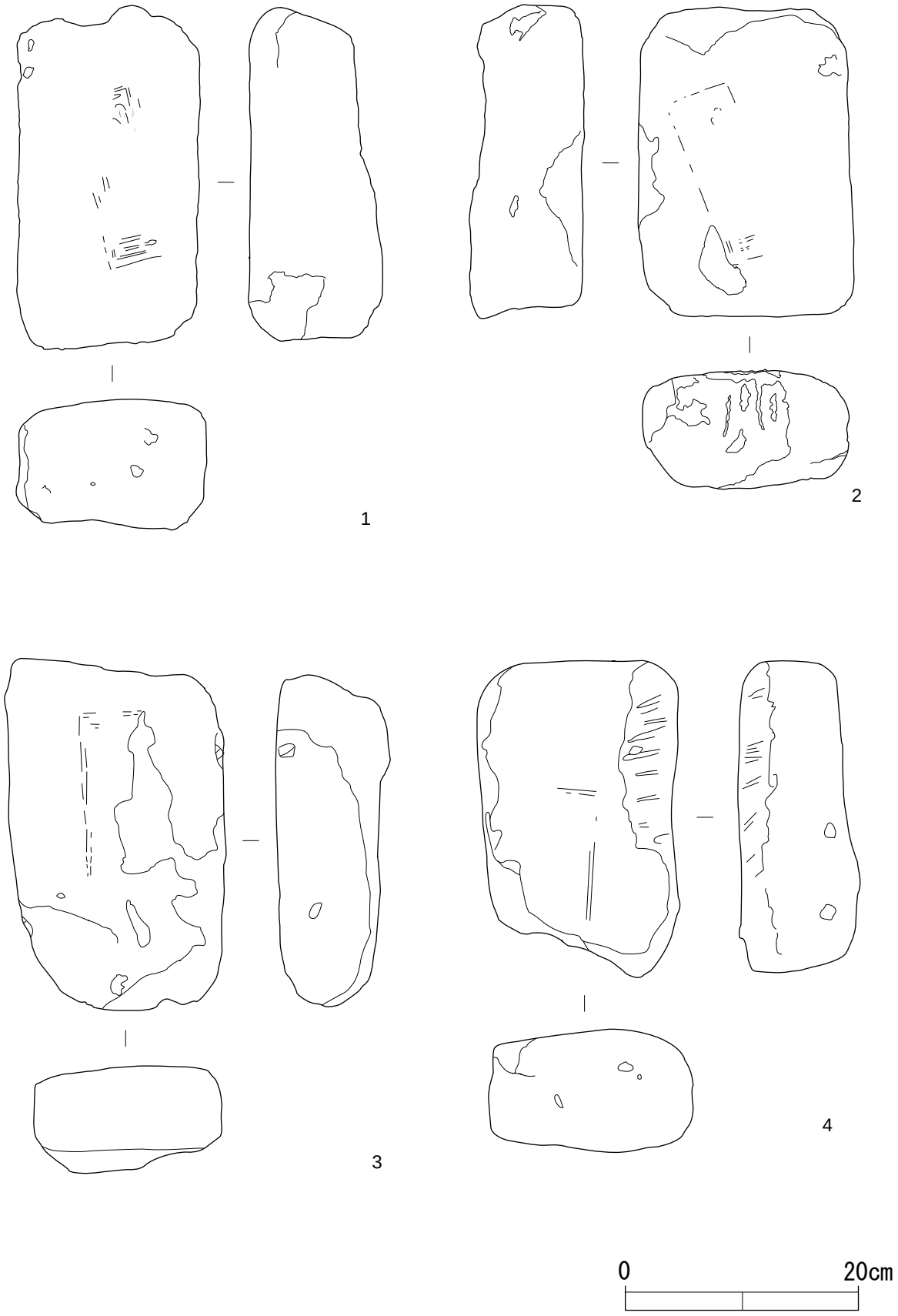


図 28　シャフト 108 出土日乾煉瓦
Fig.28 Mud bricks from Shaft 108

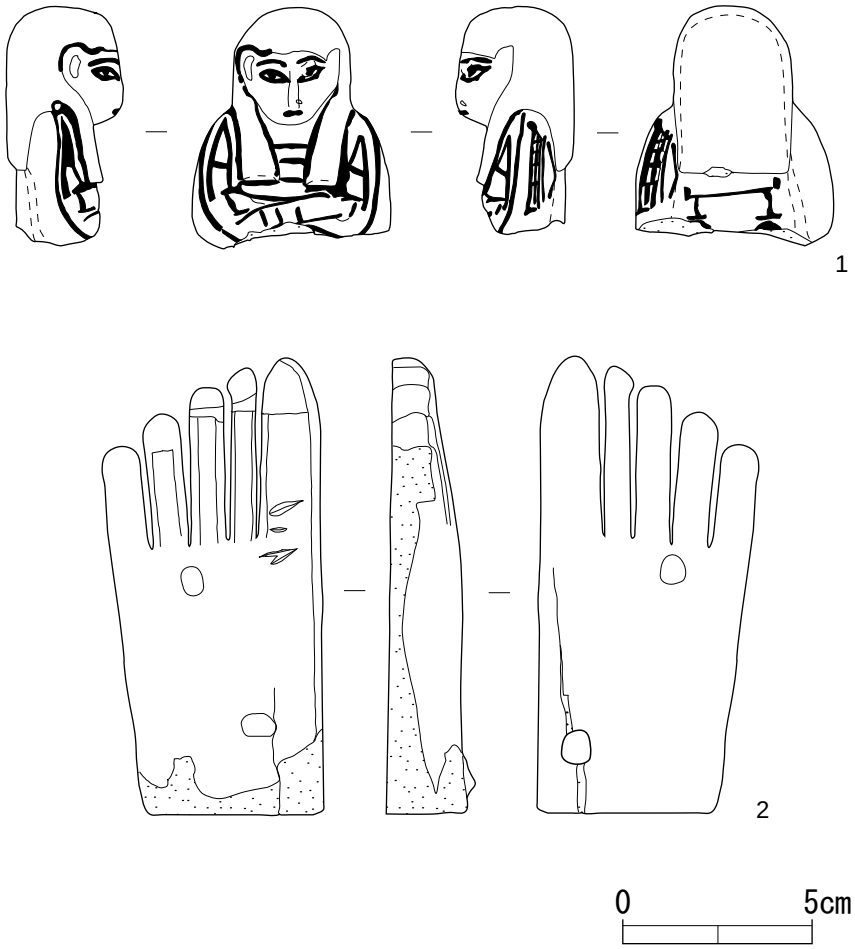


図 29　シャフト 108 出土遺物
Fig.29 Objects from Shaft 108

出土遺物

a) スタンプ付日乾煉瓦（図 28）

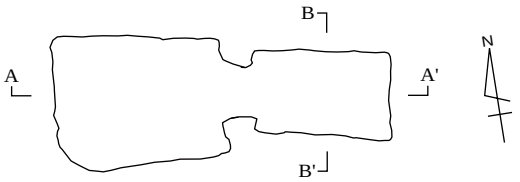
B 室入口の封鎖に使用されていた日乾煉瓦であり、どの例も所々失われており摩耗しているが、残存している部分から煉瓦のサイズは長さ約 30cm、幅約 18.5cm、厚さ約 10cm と推測することができる。イパイのトゥーム・チャペルで確認されていたスタンプは縦 1 行のものと 2 行のものが確認されており（吉村、近藤他 1998: 115、図 7-1）、本例は前者に該当すると考えられる。

b) ファイアンス製シャブティ片（図 29-1）

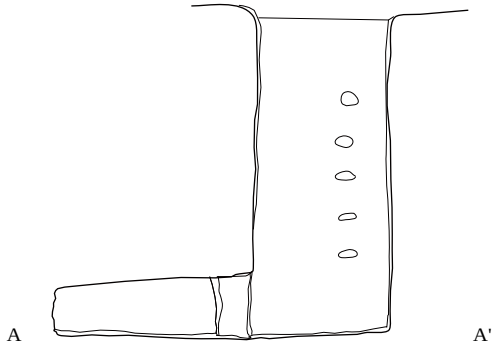
シャフト部から出土したファイアンス製のシャブティ片であり、下半部は失われている。ファイアンスは青色であり、細部の表現は黒色のラインで描かれていた。類似するファイアンス製シャブティはこれまでにも「タ」墓やその周辺のシャフト墓からも出土しており（吉村、近藤他 2005: 117, 写真 6; 吉村、馬場他 2009: 12, 図 8.1, 写真 5; 吉村、近藤他 2011: 74-78, Fig.46, 47, Pl.17）、17 次調査でもシャフト 79 のシャフト部から出土している。

c) 人型木棺片（図 29-2）

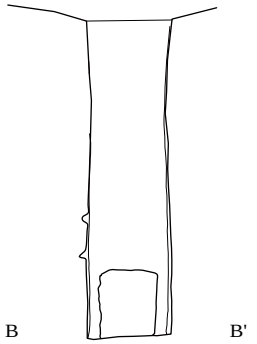
C 室から出土した、人の左足を象った木片である。第 19 王朝に類例が認められる生前の姿を表現した着衣型木棺（Niwinski 1988: 12-13; Taylor 1989: 38-39）の、蓋の足部分と推測される。外面は赤褐色に塗られており、肌の表現を意図したものと考えられる。



1 シャフト109底部平面
1 Plan at the bottom of Shaft 109



2 シャフト109A-A'断面
2 Section A-A' of Shaft 109



3 シャフト109B-B'断面
3 Section B-B' of Shaft 109

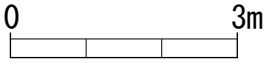


図 30　シャフト 109 平面・断面図
Fig.30 Plan and section of Shaft 109

（4）シャフト 109（図 30）

シャフト 109 はグリッド 2E49 に位置しており、2008 年の第 16 次調査でシャフトの開口部が確認されていた。開口部の長軸の方向は東西であり、平面の大きさが 1.1 x 1.8m、シャフト部の深さが 4.2m であった。シャフト部からは木棺片、土器片が出土している。

シャフトの最下部から西側に部屋が発見された（A 室）。A 室の平面はやや東西に長い方形を呈しており、南北 1.7m、東西 2.2m、床面から天井までの高さが 0.7m であった。A 室からは石灰岩の石材とともに木製の人型木棺が発見された。人型木棺は右側面を下に向けた状態で細砂層の上から出土しており、蓋の胸より下の部分が外れた状態で出土した。木棺の内部からは何も発見されなかった。その他、わずかではあるが土器片が出土した。

出土遺物

a) 人型木棺（図 31）

A 室から発見された人型木棺で、完形に近い状態へ復元することができた。長さ 186cm、幅 49cm、高さ 42cm であり、全体が黄色に塗られ、鬘は黒色で横方向に黄色の帯があり、帯の中央から頭頂部にかけても黄色の帯が描かれていた。また、顔の横から下に向かって伸びている髪の房の下端も黄色の装飾が見られる。顔の部分は白色であり、眼、眉は黒色で描かれていた。手が胸の前で交差され、腕のラインは彫刻によって表現されている。胸の部分には襟飾りの輪郭と見られる赤色のラインが書かれていた。このラインは下書きと考えられることから、木棺は未完成の状態で使用されたと推測される。銘文は見られなかった。

全体が黄色に塗られる木棺は第 19 王朝から第 21 王朝に見られる（Niwinski 1984: 438-444）。また、蓋部分

図 31　シャフト 109 出土人型木棺
Fig.31 Wooden anthropoid coffin from Shaft 109

が薄く、平坦という特徴があり、同様な例はサッカラのイウルデフ墓から出土した木棺に類似する例が見られ、ラメセス王朝期後期から第 21 王朝もしくは第 22 王朝初期という年代が与えられている（Raven 1991: 23）。

（5）シャフト 110（図 14）

シャフト 110 はグリッド 2E48 に位置しており、2008 年の第 16 次調査で発掘が行われた結果、「イリセルアア」と「タウブパウマアト」の 2 人の二重人型木棺による埋葬が発見された。第 16 次調査では埋葬室内の木棺を取り上げ、砂層の除去を行った状態で調査を終えており、A 室にはタフラの堆積と石灰岩片、日乾煉瓦が残っていた。第 17 次調査ではこのタフラ層の除去と石灰岩片、日乾煉瓦の取り上げを実施した。

結果として、黒色の木製シャブティ片が発見された。シャブティは足部が失われており、名前は確認できなかった。第 16 次調査で発見されたタウブパウマアトのものと形状が酷似しており、イリセルアアのものはすべてシャブティ・ボックスに入れられた状態で発見されたことから、タウブパウマアトに属するものと考えられる。

Ⅳ．おわりに

第 16 次・第 17 次調査では「タ」の墓周辺の発掘区を北側に拡張し、北側の墓を中心に発掘を実施した。中王国時代のシャフト墓では、ファイアンス製の小像やファイアンス製のカバ像など、ダハシュール北遺跡にはこれまでになかった副葬品を発見することができた。また、シャフト 79、シャフト 82、シャフト 107 からは数多くのビール壺が完形で出土した。ビール壺は既往の研究成果によって頸部の形状が年代を推測する手がかりとなり、今回の例では第 13 王朝初期という年代が得られた。今後中王国時代における墓域の発展過程や埋葬習慣の経年変化などを追っていく上での軸となることが期待される。

第 16 次と第 17 次調査の成果で特筆すべきは、シャフト 110 の埋葬の発見だろう。未盗掘ではないものの、「イリセルアア」と「タウブパウマアト」の二重の人型木棺が比較的良好な残存状況で発見されたことに加え、木製シャブティが入った状態の完形の木製シャブティ・ボックスや、大量の木製シャブティ、木製カノポス壺、アンフォラを発見することができた。アンフォラは第 20 王朝に年代づけられるものであり、木棺やシャブティ・ボックス、シャブティの年代観とも矛盾しない。「イリセルアア」と「タウブパウマアト」の木棺やシャブティの銘文の書かれる方向は対になっており、最初から計画的に製作された副葬品であった可能性が指摘された。熟年男性と老年女性の 2 体の人骨が発見されていることからも、2 人の人物が夫婦関係であった可能性は高い。メンフィス地域での第 20 王朝の埋葬が良好な状態で残存している例は稀少という事実だけでなく、当時の埋葬習慣に関しても興味深い知見を提供してくれており、資料的価値は極めて高いと言える。

「タ」の墓の周辺で集約的に発掘を行ってきたことで、墓域の西端における様相が明らかになりつつある。今後も調査継続することで、墓域全体の形成過程や埋葬習慣を考察するための資料を蓄積していきたい。

註

1) 第 16 次調査は 2008 年 11 月 5 日から 12 月 5 日にかけて行われた。隊員構成は以下の通りである。隊長：吉村作治、現場主任：矢澤健、考古学班：近藤二郎、馬場匡浩、澤井計宏、秋山淑子、高橋想、堀内則子、半田竜介、建築学班：柏木裕之、地質学班：岩崎好規、中川康一、保存修復班：青木繁夫、サイバー大学世界遺産学部実習生：江頭真理子、川村由恵、帝原瑠紫明、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
2) 第 17 次調査は 2009 年 6 月 17 日から 7 月 11 日にかけて行われた。隊員構成は以下の通りである。隊長：吉村作治、現場主任：矢澤健、考古学班：近藤二郎、長屋憲慶、高橋想、北村玲、堀内則子、建築学班：西本真一、人類学班：平田和明、サイバー大学世界遺産実習生：小栗孝昌、鬼丸洋之、小野寺元気、川村由恵、瀬尾重乃、武石美徳、帝原瑠紫明、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。

3) 胎土の分類はウィーン・システムに準拠している（Nordström and Bourriau 1993: 168-182）。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。
4) シャフトの地下室に脇柱とまぐさによって戸口を作る例は、2008 年第 15 次調査で発掘したシャフト 86 でも発見されている（吉村、近藤 2011: 61-65, 図 .38）。
5) 同名の人物のステラがシャフト 17 から発見されている（吉村、近藤他 1999: 143, 写真 5-4）。
6) 碑文の翻訳については早稲田大学の河合望氏にご教授いただいた。
7) 中王国時代の墓の壁画で頻繁に描かれていたビール醸造の場面では、ビールを貯蔵するための容器が描かれており、同じ器形の土器が実際に遺跡から出土している。土器に *ḥnḳt*（ビール）と書かれていた例や、供物卓に同様の器形が描写されており、*ḥnḳt* と文字が付されている例があることから、「ビール壺」と呼ばれるに至った（Szafranski 1998: 96-97）。
8) Do. アーノルド（Arnold）は中王国時代の「ビール壺」の頸部を用いて、形状の定量的な分析を行い、年代について考察している（Do. Arnold 1988: 141-143, 図 .76）。頸部の最もくびれている径（最小径）を a、口縁の最上部の径を b とし、頸部の最小径の位置から口縁までの高さを c とし、a/b×100 の数値（頸部のくびれ度数、Aperture Index）を横軸に、c の数値（頸部の長さ）を縦軸として、各土器の数値をプロットした図を作成し、年代と数値に一定の相関があることを示した。Do. アーノルドの研究で、制作時期が確かなものとして年代決定に利用された資料は第 12 王朝から第 13 王朝初期のものまでであり、それより後の例については触れられていない。一方で、テル・アル＝ダバアの資料を用いて、口縁部の最大径と、口唇部の厚みの数値から年代を検討している研究もあり、こちらは第 12 王朝後期から第 2 中間期までが含まれている（Szafranski 1998）。本報告では前者のインデックスを AI（Aperture Index）1、後者を AI2 として、第 16、17 次調査で出土した「ビール壺」の数値を記述し、前述の 2 つの研究成果と比較することで、年代について検討する。シャフト 82 では AI1 が 79 ～ 83 で頸部の長さが 5.5 ～ 6.5cm、AI2 は 510 ～ 611 であり、前述の研究結果と比較すると第 12 王朝末から第 13 王朝初期に相当すると考えられる。
9) 聖マリアンナ医科大学の平田和明教授（解剖学）の観察所見による。
10) サッカラのイウルデフ墓では黒色の木棺でもラメセス王朝期後期に年代づけられた例がある（Raven 1991: 23, 31）。これに対し、イウルデフ墓の例はもっと後の時代のものであり、第 25 王朝後期から第 26 王朝初期に年代づけられるとした研究成果もある（Niwinski 1996: 363）。
11) リシュトでこれらのファイアンス製小像群が出土したシャフトは Shaft 29/39 と Shaft 29/40 であり、前者は共伴する土器から第 12 王朝後期から第 13 王朝に年代づけられるが、後者は第 12 王朝初期から新王国時代以降とされており、年代については明確ではない（Arnold 1992: 45）。
12) ファイアンス製カバ像の使用が開始された年代については議論が行われており、定まってはいない（Lacovara 1988: 127, note.3）。
13) シャフト 79 出土のビール壺に対して註 7 のインデックスを適用すると、AI1 は 78 ～ 96、頸部の長さが 4.2 ～ 5.0cm であり、Do. アーノルドによって作成された数値のプロット図（Arnold 1988: fig.76）で認められる 4 つのクラスターのどれにも当てはまらない。一方、AI2 では 381~545（平均 483）という数値を示しており、テル・エル＝ダバアの d/1 層に近い数値であるといえる。d/1 層は第 13 王朝初期に相当する（Szafranski 1998: 101-102, Fig.4, Fig.5）。
14) Do. アーノルドは「ベッセル・インデックス」を用いて、中王国時代に典型的な半球形碗形土器の年代を特定しており、年代についてはこの研究を参照した。このベッセル・インデックスとは半球形碗形土器の最大径を a、器高を b とした場合、a/b x 100 によって得られる数値であり、数値と年代に相関が見られることが分かっている。第 12 王朝後期から第 13 王朝初期にはおよそ 190 ～ 150 の値を示し、第 13 王朝中期以降は 120 前後で 145 は超えないとされている（Arnold 1988: 140）。図 26-13 は 165、図 26-14 は 144 であり、後者はやや低い値を示すものの、120 からは遠く、150 に近いことから、両者を第 12 王朝後期～第 13 王朝初期とした。
15) シャフト 107 出土のビール壺に対して註 7 のインデックスを適用すると、AI1 は 84 ～ 99、頸部の長さが 4.5 ～ 8.0cm であり、Do. アーノルドによって作成された数値のプロット図（Arnold 1988: 142-143, fig.76）で認められるクラスター 4（第 12 王朝末～第 13 王朝初期）にやや近い値を示す。一方 AI2 については 418 ～ 688（平均 516）であり、テル・エル＝ダバアの d/1 層と極めて近い値を示す。d/1 層は第 13 王朝初期に相当することから、シャフト 107 出土のビール壺は第 13 王朝初期とした。

参考文献

Arnold, Di.

1992　*The South Cemeteries of Lisht*, vol 1*: The Pyramid Complex of Senwosret I*, New York.

Arnold, Do.

1988 “Pottery,” in Arnold Di., *The South Cemeteries of Lisht*, vol 1*: The Pyramid of Senwosret I*, New York, pp.106-149.

Aston, D.A.

1994 “The shabti box: a typological study,” *Oudheidkundige Mededelingen uit het Rijksmuseum van Oudheden* te Leiden 74, pp.21-54.

2004 “Amphorae in New Kingdom Egypt,” *Ägypten und Levante* XIV, pp.175-213.

Brunton, G. and Engelbach, R.

1927 *Gurob*, London.

Engelbach, R.

1915 *Riqqeh and Memphis* VI, London.

1923 *Harageh*, London.

Freed, R.E., Berman, L.M., Doxey, D.M. and Picardo, N.

2009 *The Secrets of Tomb 10A: Egypt 2000 B.C.*, Boston.

Fuscaldo, P.

2003 “Tell al-Dab'a: Two Execration Pits and a Foundation Deposit,” in Hawass, Z, (ed.), *Egyptology at the Dawn of the Twenty-first Century*, Volume 1, Cairo, New York, pp.185-188.

Hope, C.

1987 “Innovation in the Decoration of Ceramics in the mid-18th Dynasty,” *Cahiers de la céramique Egyptienne* I, pp.97-122.

1989 *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Melbourne.

Ikram, S. and Dodson, A.

1998 *The Mummy in Ancient Egypt: Equipping the Dead for Eternity*, New York.

Kemp, B.J. and Merrillees, R.S.

1980 *Minoan Pottery in Second Millenium Egypt*, Mainz am Rhein.

Lacovara, P.

1988 “58 Hippopotamus,” in D’Auria, S., Lacovara, P. and Roehrig, C.H. (eds.), *Mummies & Magic: Funerary Arts of Ancient Egypt*, Boston, p.128.

Martin, G.T.

1985 *The Tomb-chapels of Paser and Ra’ia at Saqqara*, London.

1991 *The Hidden Tombs of Memphis*, London.

2001 *The Tombs of Three Memphite Officials: Ramose, Khay and Pabes*, London.

Niwinski, A.

1984 “Sarg NR-SpZt,” *Lexikon der Ägyptologie* V, Wiesbaden, pp.434-468.

1988 *21st Dynasty coffins from Thebes: Chronological and typological studies*, Mainz am Rhein.

1996 “Coffins from the Tomb of Iurudef-A Reconsideration. The Problem of Som Crude Coffins from the Memphite area and Middle Egypt,” *Bibliotheca Orientalis* 53, pp.324-363.

Nordström, H.A. and Bourriau, J.

1993 “Ceramic Technology: Clay and Fabrics,” in Arnold, Do. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz, pp.143-190.

Petrie, W.M.F.

1891 *Illahun, Kahun, and Gurob*, London.

1896 *Koptos*, London.

Petrie, W.M.F., Brunton, G. and Murray, M.A.

1923 *Lahun* II, London.

Raven, M.J.,

1991　*The Tomb of Iurudef: a Memphite Official in the Reign of Ramesses II*, Leiden and London.

Rose, P.J.

2007　*The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*, London

Schneider, H.D.

1977　*Shabtis* I-III, Leiden.

1996　*The Memphite Tomb of Horemheb, Commander-in-Chief of Tutankhamûn,* II*: A Catalogue of the Finds*, Leiden and London.

Szafranski, Z.E.

1998　“Seriation and Aperture Index 2 of the Beer Bottles from tell El-Dab’a,” *Ägypten und Levante* VII, pp.95-119.

Taylor, J.H.

1989　*Egyptian coffins*, Aylesbury.

2001　“Patterns of colouring on ancient Egyptian coffin from the New Kingdom to the Twenty-sixth Dynasty:an overview,” in Davies, W.V. (ed.), *Colour and Painting in Ancient Egypt*, London, pp.164-181.

Vila, A.

1963　“Un depot de textes d’envoutement au Moyen Empire,” *Journal des Savants* 153, No.3, pp.135-160.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一

1999　「エジプト　ダハシュール北地区発掘調査報告－ 1998 年　第 3 次調査－」、『人間科学研究』第 12 巻第 1 号、早稲田大学人間科学部、pp.137-149.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、馬場匡浩、中川武、西本真一、柏木裕之

2005　「エジプト　早稲田大学ダハシュール北地区発掘調査報告　－ 2004 年　第 9 次調査－」、『人間科学研究』第 18 巻第 1 号、早稲田大学人間科学部、pp.109-118.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、矢澤　健、柏木裕之、秋山淑子

2011　「Ⅱ．第 14 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-60.

吉村作治、近藤二郎、矢澤　健、柏木裕之、秋山淑子

2011　「Ⅲ．第 15 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、早稲田大学エジプト学会、pp.61-83.

吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、長谷川奏、柏木裕之、秋山淑子

2009　「エジプト　ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第 10 次・第 11 次発掘調査―」、『エジプト学研究』第 15 号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-38.

吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、西本真一、柏木裕之、矢澤健

2010　「エジプト　ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第 12 次・第 13 次発掘調査―」、『エジプト学研究』第 16 号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-46.

調査報告

2011 年　太陽の船プロジェクト活動報告

黒河内　宏昌＊1・吉村　作治＊2

Report of the Activity in 2011, Project of the Solar Boat

Hiromasa KUROKOCHI*1 and Sakuji YOSHIMURA*2

Abstract

This is the report on the procedure of the project of the second boat of King Khufu in 2011. The following 5 main outputs in each season are described with photographs and drawings. 1. Preparation of the equipments for lifting up the cover stones of the pit (January ~ June), 2. International workshop (May), 3. Lifting up the cover stones of the pit (June ~ August), 4. Symposium in Japan (November), 5. Preparation of the equipments for sampling the wooden pieces in the pit (September ~ December).

本稿では 2011 年 1 月～ 12 月に行った太陽の船プロジェクトの活動をご報告したい。本年の活動は大きく分けて、以下の 5 項目となる。

1. 蓋石取り上げに向けた施設の整備（1 月～ 6 月）
2. サンプリングに関する国際ワークショップ（5 月）
3. 蓋石取り上げ（6 月～ 8 月）
4. 国内シンポジウム・学会発表（11 月）
5. サンプリングに向けた施設の整備（9 月～ 12 月）

参加メンバーは以下のとおりである（敬称略）。

〔統括〕　吉村作治（NPO 法人太陽の船復原研究所・所長）
〔現場主任監督〕　黒河内宏昌（NPO 法人太陽の船復原研究所）
〔現地事務所〕　吉村龍人（NPO 法人太陽の船復原研究所）
ユーセフ・カーリッド（NPO 法人太陽の船復原研究所）
〔SCA〕　アフィフィ・ローハイエム（SCA プロジェクトリーダー）
アイマン・ハーミッド（技術アドバイザー）
イーサ・ジダーン（保存修復アドバイザー）
ディア・エルディン（インスペクター）
〔国内広報〕　岩出まゆみ（NPO 法人太陽の船復原研究所広報）
佐々木愛（株式会社アケト広報）
早稲田大学エジプト学研究所

＊1 サイバー大学世界遺産学部教授 /NPO 法人太陽の船復原研究所事務局
＊2 早稲田大学名誉教授 /NPO 法人太陽の船復原研究所所長

＊1 *Professor, Faculty of World Heritage, Cyber University / Administrator, Nonprofit Organization, Institute of the Solar Boat*
＊2 *Professor Emeritus, Waseda University / Director, Nonprofit Organization, Institute of the Solar Boat*

〔参加者〕1.　戸田勝（株式会社戸田石材）
鈴木幹也（木村工機株式会社）
2.　増澤文武（(財) 元興寺文化財研究所）
青木繁夫（サイバー大学世界遺産学部）
植田直見（(財) 元興寺文化財研究所）
山田哲也（(財) 元興寺文化財研究所）
カーリ・ステファン（ヘルシンキ大学農林学部）
3.　戸田　勝（株式会社戸田石材）
河原正純（有限会社北尾石材）
鈴木幹也（木村工機株式会社）
柏木裕之（サイバー大学世界遺産学部）
西坂朗子（早稲田大学エジプト学研究所）
高橋寿光（早稲田大学エジプト学研究所）
山田綾乃（早稲田大学大学院文学研究科）

なお本年の活動は株式会社ニトリ・ホールディングス（似鳥昭雄代表取締役社長）からの援助のもとに行われた。心より謝意を表したい。

1. 蓋石取り上げ施設の整備

期間：1 月～ 6 月

蓋石取り上げのために、ピット上とその周囲に作業エリアを確保するために建設した大テント（写真 1、幅 20m、長さ 44m、最大高さ 10m）の中に、レール上をモーターで走行するガントリークレーンを設置した。

写真 1　大テント内の様子
Photo 1 Inside View of the Large Hangar

写真 2　ガントリークレーン外観（建設中）
Photo 2 Outside View of the Gantry Crane (under construction)

クレーン・台車
基本設計：　戸田勝・株式会社福井設計
改修設計：　アイマン・ハーミッド（SCA）
施工：　パワー・エジプト社

写真 3　ガントリークレーン内観
Photo 3 Inside View of the Gantry Crane

写真 4　台車
Photo 4 The Cart for carrying out the Cover Stones

写真 5　台車搬出路
Photo 5 The Railway for the Cart

またピット内は 85％の高湿度であり、外気が流入して乾燥すると木製部材にダメージが及ぶ可能性があるため､ガントリークレーン自体をテント膜で覆い､その内部をピット内と同じ環境に空調することにした（写真 2、3)。持ち上げた蓋石はクレーンの外に出し、レール上を人力で走行する台車の上に乗せて、大テントの外に搬出して安置することとした（写真 4)。搬出路は､ピラミッド地区で夜間行われる「音と光のショー」の照明設備を考慮して曲線状にした（写真 5)。

2. 木材のサンプリングに関する国際ワークショップ（5 月）

期間：5 月 16 ～ 18 日

於：ギザ・ピラミッド地区・SCA ミーティングルーム

蓋石取り上げと木製部材のサンプリングについて、保存修復に関連する専門家によって計画を検証するワークショップを開催した。このワークショップには、下記のプレゼンターのほか、SCA 側からプロジェクトメンバー（前述アフィフィ・ローハイエムほか 3 名）と、保存修復家数名が参加した（写真 6、7)。プログラムは以下の通りである。

【1 日目】

1. フェーズ 1 の成果（蓋石取り上げ方法について）　黒河内宏昌
2. 木材の微生物による劣化について 1　カーリ・ステファン

【2 日目】

3. サンプリング（サンプリングの計画について）　増澤文武

写真 6　参加者全体写真
Photo 6 Participants of the Workshop

写真 7　プレゼンテーション風景
Photo 7 View of a Presentation in the Workshop

4. サンプリング～水浸出土木材　　植田直見
5. 大型出土遺物の取り上げ作業の 2 つの例　　山田哲也

【3 日目】

6. 青銅製品の修復　　青木繁夫
7. 木材の微生物による劣化について 2　　カーリ・ステファン
8. 水浸出土木材の保存処理～元興寺文化財研究所の事例　植田直見

3. 蓋石取り上げ

期間：6 月 22 日～ 7 月 26 日

蓋石取り上げに際しては、まず砂やコンクリート、鉄板などを詰めた重量約 16 トンの鉄箱を作り、ガントリークレーンや台車の機能を試す予行演習を重ねた。

そして 6 月 22 日に株式会社ニトリ・似鳥昭雄社長、同・長内順一特別顧問、在エジプト日本国大使館・高垣了二広報文化センター所長に御列席いただき、蓋石の取り上げに着手した。翌 23 日には、ザヒ・ハワス考古省大臣が来訪し、蓋石の取り上げがプレスに公表された。

写真 8　玉掛け法による蓋石持ち上げ
Photo 8 Lifting up a Cover Stone binding with ropes

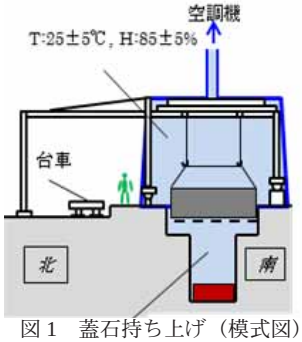


図 1　蓋石持ち上げ（模式図）
Fig.1 Lifting up a Cover Stone

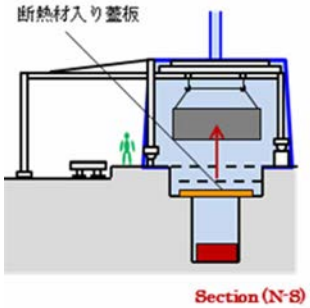


図 2　蓋板を閉める（模式図）
Fig.2 Closing the Pit with Cover Wooden Boxes

写真 9　L 字フックによる蓋石持ち上げ
Photo 9 Lifting up a Cover Stone using steel hooks

写真 10　蓋板を閉める
Photo 10 Closing the Pit with Cover Wooden Boxes filling with insulators

写真 11　蓋石をクレーンから出す
Photo 11 Removing a Cover Stone out from the Gantry Crane

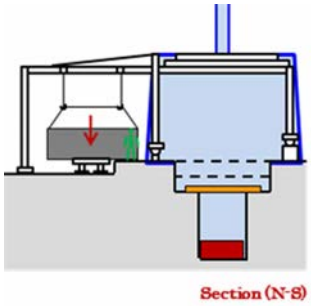


図 4　蓋石を台車の上に降ろす（模式図）
Fig.4 Down a Cover Stone on the Cart

写真 13　蓋石を運び出す
Photo 13 Carrying out a Cover Stone

写真 14　蓋石の安置
Photo 14 Storing a Cover Stone

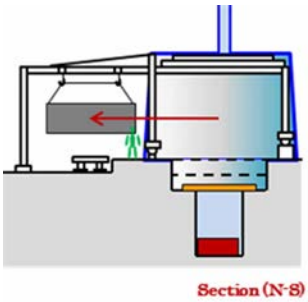
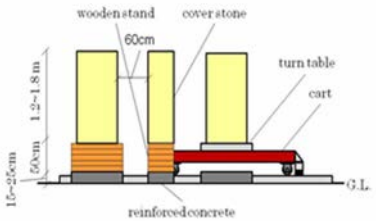
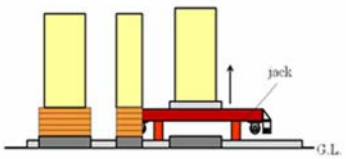


図 3　蓋石をクレーンから出す（模式図）
Fig.3 Removing a Cover Stone out from the Gantry Crane

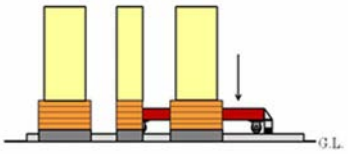
写真 12　蓋石を台車の上に降ろす
Photo 12 Down a Cover Stone on the Cart



蓋石と台車が到着



台車ごと蓋石をジャッキアップ



木製の台を下に置いて台車を降ろすと
蓋石が台の上に乗る

図 5　蓋石の安置（模式図）
Fig.5 Storing a Cover Stone

蓋石取り上げの作業は、主に 3 つの班に分かれて行った。

第 1 班：蓋石取り上げ（戸田勝、河原正純、鈴木幹也、黒河内宏昌）

ピットを覆う全 40 列（41 枚）の蓋石と鍵石（鍵石は東端第 1 列の 2 枚）のうち、SCA の方針で現状保存する西端の 4 枚を除く 36 列（37 枚）を取り上げ、大テントの外に安置した。なお、1 枚目の蓋石は L 字フックを挿入するスペースがなかったため、ロープを用いた玉掛け法により持ち上げた。蓋石取り上げ後のピットは、断熱材入りの板蓋で閉じた（写真 8 ～ 14、図 1 ～ 5）。

第 2 班；蓋石の記録（柏木裕之、山田綾乃）

取り上げた 36 列（37 枚）の鍵石、蓋石、およびそれらがピットの中にどのように納まっているのかについて、観察、写真撮影、測量を行った。また隣接する船博物館でクフ王第 1 の船のピットの観察、写真撮影、測量も行った（図 6）。

第 3 班；蓋石に記された文字の記録（西坂朗子、高橋寿光、山田綾乃）

鍵石、蓋石、そして蓋石と岩盤の隙間を塞いでいた詰石には、古代の石工が記した数百点のグラフィティ

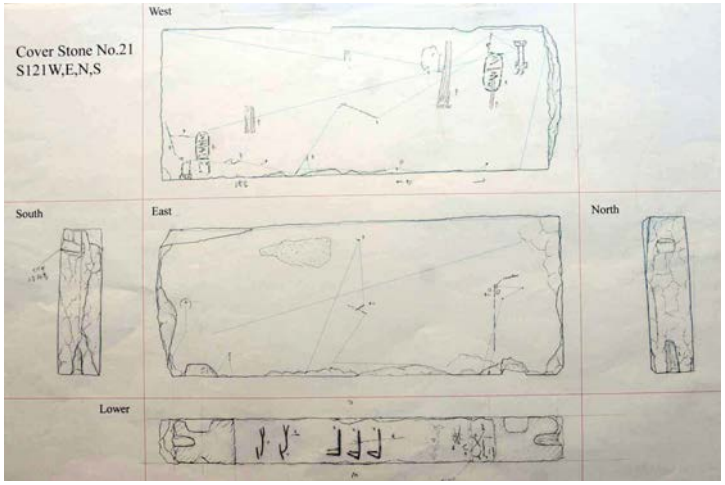


図 6　蓋石 No.21 の観察測量 5 面図

Fig.6 Drawing of five faces of the Cover Stone No.21

写真 15　蓋石 No.21

Photo 15 The Cover Stone No.21

写真 16　クフ王のカルトゥーシュ（蓋石 No.21）

Photo 16 Cartouche of King Khufu (Cover Stone No.21)

写真 17　蓋石取り上げ前　ピット俯瞰写真
Photo 17 Look down at the Pit (before opening)

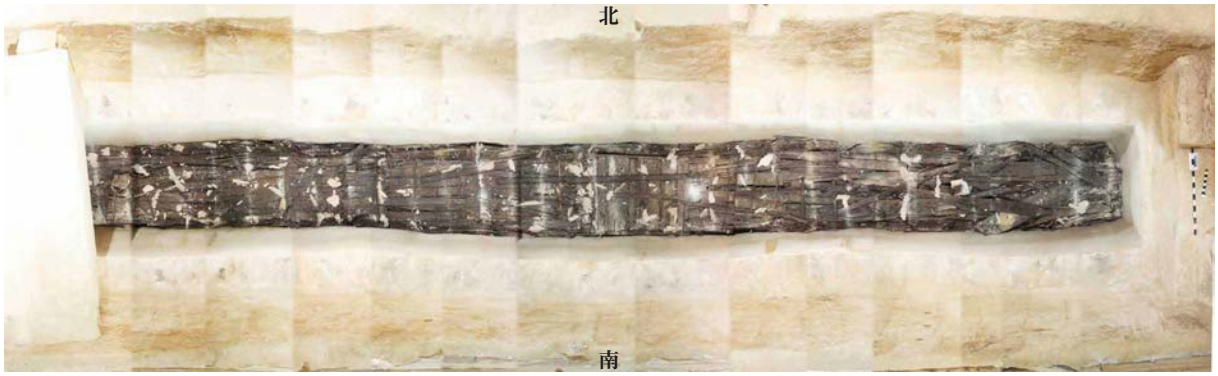


写真 18　蓋石取り上げ後　ピット俯瞰写真
Photo 18 Look down at the Pit (after opening)

写真 19　運び出された蓋石
Photo 19 Cover Stones being lifted up

写真 20　蓋石取り上げ後の大テント内
Photo 20 Inside View of the Large Hangar after lifting up the Cover Stones

が描かれており、それらをすべて記録、写真撮影した。そこには第 1 の船のケースでは見られなかったグラフィティも多数あり、分析が待たれる（写真 15、16）。蓋石取り上げ前後のピットの比較写真、および蓋石取り上げ後の現場の状況を以下に写真で紹介する（写真 17 ～ 20）。

なお、この蓋石取り上げの模様は、RKB 創立 60 周年記念番組「吉村作治・太陽の船復活・徹底解明！ピラミッドの謎」にて、8 月 7 日に全国放送された。

4. 国内シンポジウム・学会発表

(1) シンポジウム

シンポジウム名：エジプト・フォーラム 20・甦れ！太陽の船

主催：早稲田大学エジプト学研究所・早稲田大学エジプト学会

共催：NPO 法人太陽の船復原研究所

期日：11 月 5 日

於：早稲田大学井深大記念ホール

「エジプト・フォーラム 20」の場を借りて、6 ～ 7 月に行った蓋石の取り上げ、および今後のサンプリングと三次元復原の計画について発表した。
開会挨拶：近藤二郎
基調講演：吉村作治
パネルトーク：吉村作治・中川　武・柏木裕之・黒河内宏昌・戸田　勝・阪野貴彦・増澤文武

5. サンプリングに向けた施設の整備

期間：9 月～ 12 月

(1) ピット上に空調スペースを作るための小テント

骨組みは大テントの屋根から軽量のパイプを吊るす方式とし、柱のない使い勝手の良い空間を作り、コストも大幅に減らした（写真 21）。また東日本大震災に関連し、日本からエジプトへの禁輸措置がとられていたため、テント膜は太陽工業バンコク支社に製作を依頼をした。しかしタイが洪水被害に見舞われる不運が重なり、膜の現場への到着が遅れた。

(2) ピット内に人を降ろすための昇降機

2 つのモーターを使ってゴンドラを 3 m下まで降りていく仕組みとなっている（写真 22）。

写真 21　膜の組み立てを始めた小テント（12 月 29 日撮影）
Photo 21 The Small Hangar over the Pit (under construction)

基本設計：　黒河内宏昌
　　太陽工業株式会社
テント膜製作：　太陽工業バンコク支社
施工：　パワー・エジプト社

写真 22　昇降機（12 月 31 日撮影）
Photo 22 Elevator for people going down in the Pit (under construction)

基本設計：　アイマン・ハーミッド
施工：　パワー・エジプト社

研究ノート

両面加工石器製作の生産体制について
―ヒエラコンポリス遺跡エリート墓地出土資料の分析から―

長屋　憲慶*

Bifacial Flint Production Groups in the Predynastic Egypt: Analysis of finds from Elite Cemetery at Hierakonpolis

Kazuyoshi NAGAYA*

Abstract

Recent excavations at HK6, Elite cemetery, have discovered various kinds of bifacial flints. Among them, in particular, the bifacials in shape of bowtie, donkey, human, rhomboid lance and so-called fish-tail are remarkable. They have not only esthetic value but also are informative samples to know about the predynastic lithic technology, which enables us to identify artisan groups.

Deep observations into the masterpieces revealed that bifacials from HK6 had been made by particular technologies (sometimes by the certain person). It is possible that there were at least three flint artisan groups that can be identified in three criteria: raw material, technology and the products.

The first group is to make bifacials of symbols or animals. Material is mainly beige/ light brown flint. Donkey and bowties belong to the group. This group seems to be less skilled. The flaking patterns on the surface are rough and irregular, and surface has several mistaken parts as mentioned above.

The second group is to make animals in smaller size using arrowhead making technique, working on the dark brown/ black flints. The arrowhead technique is principally adopted to form long horns, legs or trunks. Because this technique constrains maximum size of products, the elephant biface was made smaller than the other animals of Group 1. Human-shaped biface should be the masterpiece of the group.

The third group is to make very elaborate things such as rhomboid lances and fishtail knives. Material is rare type of flint rock with murky black color. This group clearly has the highest skills typified by regular stripes pattern and denticulations. Mistakes like group 1 are hardly seen.

The paper clarified a new vision about the lithic production relevant to HK6. The elaborate bifacials for funerary rituals and burials of elites were provided by three particular groups each of which dealt with different raw material, technology and final product. The groups had an important role to support prestige of elites. And in another word, it is possible that these strict combinations guaranteed the value of bifacials as prestige goods.

＊ 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程　　＊ *Ph. D. Student, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

1. はじめに

ヒエラコンポリス遺跡（図 1）は、ナカダ、アビドスに並んでエジプト先王朝時代最大規模を誇る遺跡である。これまでの調査によって、初期神殿、エリート墓地、労働者墓地、土器製作・焼成施設をはじめ、エジプトでは検出例の少ない集落址も見つかっている。このように多くの性格を有する複合遺跡であるヒエラコンポリスは、初期国家形成期のエジプトにおいてあらゆる角度から社会の複雑化の様相を議論し得る希有な遺跡である。

この遺跡の南西に位置する HK6 地区はエリート墓地と呼ばれ、様々な副葬品を産出することで知られる。石器資料についても同様で、動物や抽象的なシンボルを象ったものをはじめ、ナイフ、石鏃など、多様な製品が出土している。これらの石器はエリートの副葬品という限定されたコンテクストを有することから、モノと場あるいはその背景にある社会とを直接にリンクさせて論じることのできる資料といえる。

本稿では、こうした対象遺跡の特性を踏まえ、ヒエラコンポリスのエリート墓地における近年の発掘によって得られた両面加工石器を扱い製作技術の分析を行う。これらの石器は当然、エリートたちの副葬品という特定の用途で製作された背景をもつ資料である。本稿の目的は、石器製作者たちがエリートのためにどのような技術を用いて何を作ったかという、遺跡内部の特定の条件下における石器製作の様相を考察することである。その上で、初期国家形成の途上にあったヒエラコンポリスおいて副葬品の価値がどのような要素によって規定されていたのかを石器研究の視点から論じたい。

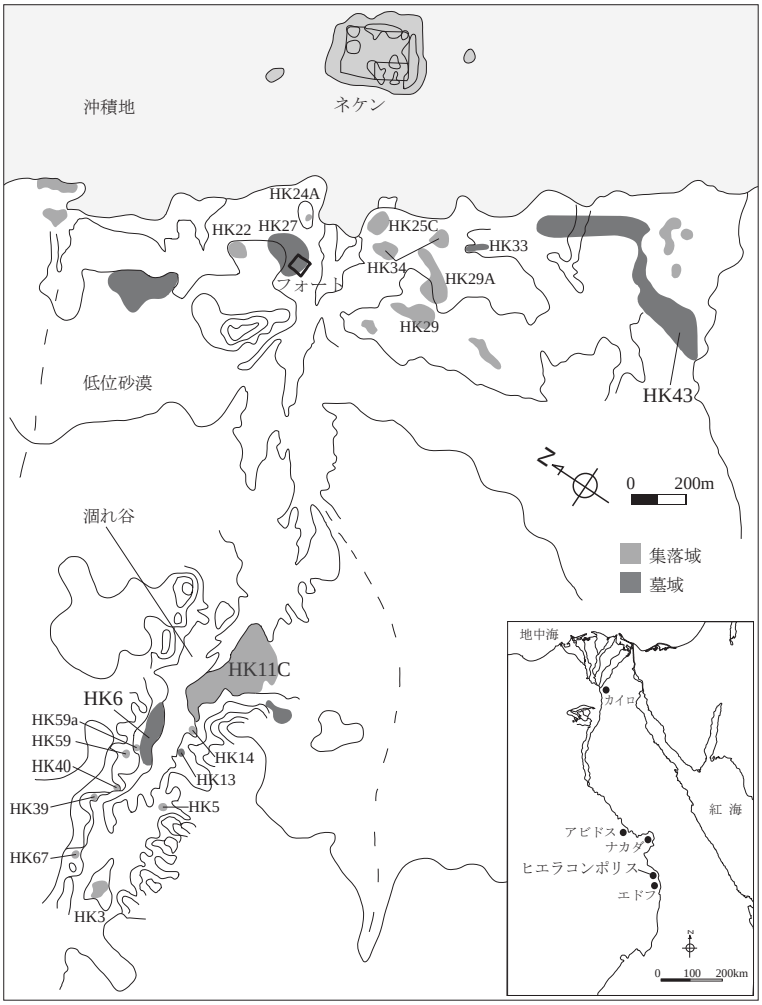


図 1　ヒエラコンポリス遺跡 (Wengrow 2006: 74, Fig. 4. 1 をもとに作成)
Fig.1 Map of Hierakonpolis

2. エジプト先王朝時代の石器研究

この時期の石器研究はきわめて少ない。ここでは当該時期の代表的な研究例について、石器組成と製作技術の観点から簡単にまとめる。

ナカダ文化の石器組成を論じた研究で必ずと言ってよいほど取り上げられるのが、1980 年代末に発表された D. L. Holmes の学位論文である。この研究は、上エジプトに分布する石器群を網羅的に扱ったもので、ヒエラコンポリスを含む各地の先王朝遺跡の出土石器を比較し、剥片剥離技術の伝統が 3 地域に分かれることを指摘している。(Holmes 1989)。この論文は現在に至るまで唯一の包括的な資料に基づく石器研究とし

て位置づけられている。しかし一方では、遺跡の性格が考慮されないまま資料が扱われたため、それらの石器群の相違が果たして製作技術の地域性や系統をそのまま示すものであるのかが疑われる。事実、近年の報告によると、ナカダ II 期のヒエラコンポリスにおける多様な石器製作技術の存在が指摘されている。生産施設（HK11C 地区 A6-A7 区）と初期神殿付属の工房とされる HK29A 地区の双方から出土した石器を比較分析した高宮・遠藤は、両地区の石器製作には、剥離技術や石材の利用法、製品などの点で相違が認められるとしている（Takamiya and Endo 2011: 742）。このように、同時期の同遺跡においても遺構毎に多様な石器組成あるいは製作技術の存在が推測され、今後は発掘地区ごとの性格を考慮した石器組成の詳細な研究が求められるであろう。

また、本稿が扱う両面加工石器に関連する研究では、前述の高宮･遠藤による石器製作の動作連鎖（chaîne opératoire）研究が代表的である（Takamiya and Endo 2008: 8）。この研究は､1990 年代に Holmes（1992）によって分析された HK29A 地区の出土資料を再分析したものである。これによって、神殿付属の工房で行われた石器製作について、石材利用から製作剥片の特徴的な転用法、主となる製品の製作工程など、より具体的な様相が明らかとなった。

以上のように当該時期の石器研究は、1980 年代までに体系化された石器文化の全体像を、個別の出土資料やコンテクストに即した資料観察によって再度見直そうという動きにある。つまり近年の石器研究の主眼は、一遺跡に包含される多様な技術の様相を明らかにした上で、先王朝時代の石器文化を再構築することである。特にヒエラコンポリスのような様々な性質を有する複合遺跡な場合、遺構の性格別にひとつひとつ石器組成あるいは製作技術を検討し、その上で遺跡全体での石器製作技術を体系化することが望まれる。

3. 本稿の目的

先行研究を概観すると、エジプト先王朝時代の石器研究は、前世紀までに体系化された石器文化と、それに対し、より具体的なデータとコンテクストに立ち帰った再検討や反証を行うという近年の研究とに二分される。したがって現在では、石器文化の全体を語るに十分な資料・研究が出そろっているわけではないことがわかる。そのため現在の急務は、コンテクストの限定された一遺跡あるいは一地区に対象を絞り、初期国家形成期という脈絡の中で石器製作の様相を遺物あるいは事例毎に捉え直すことにある。

こうした考えのもと、筆者は本誌前号において、ヒエラコンポリス遺跡の性格の異なる複数の遺構から出土した両面加工石器について、製作技術の種類とその水準を比較検討した（長屋 2011）。結果、遺跡全体でみた石器製作技術は、製作者の専業・非専業にかかわらず極めて近似した水準にあったことが示された。さらに、こうした必ずしも技術的に突出していたわけではない両面加工石器が特にエリート墓地から多く出土することから、製作技術の高さのみが石器の威信材あるいは副葬品としての価値を規定するわけではなく、そこには別の何らかの要素が働いていたのではないかという展望を得るに至った。

そこで本稿は、ヒエラコンポリスのエリート墓地（HK6 地区）出土の両面加工石器という、遺構・遺物の性格・用途の限定された出土資料を扱い、一つの墓地に供給された石器とその製作の様相について考察する。その上で、初期国家形成期の同遺跡において、両面加工石器がいかなる理由によって威信材・副葬品としての価値を有していたのか論じたい。

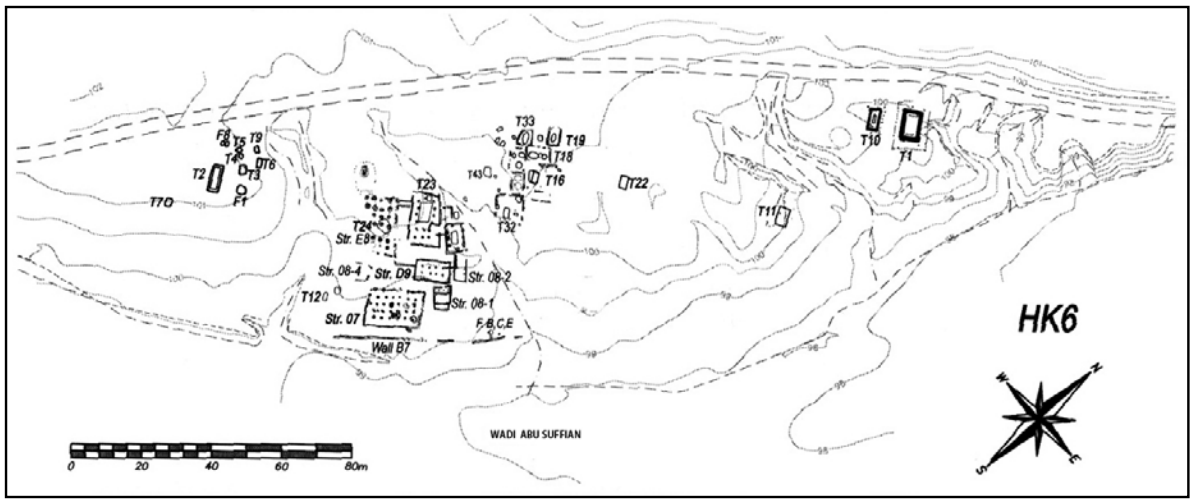


図 2　HK6 地区　（Friedman et al. 2011, fig. 1 を改変）
Fig.2 HK6, Elite cemetery at Hierakonpolis

4. 対象資料と分析の方法

エリート墓地（HK6）（図 2）は、1979 年から現在に至るまで調査が行われている (Adams 2000a, 2000b; Friedman 2000, 2005, 2006)。遺跡の性格は、支配者層の墓地とされ (Friedman et al. 1999)、ナカダ IC-III 期に年代づけられる (Adams 1998: 3)。この墓地からは際立って多くの両面加工石器の出土が確認されている。特に、動物を象ったものがここでは特徴的に見られる (Friedman 2000; 高宮 2010)。

表 1　HK6 地区出土の両面加工石器
Table1 Bifacials from HK6

資料No.	製品	残存度	寸法（mm）		
			長さ	幅	厚さ
1	動物（ロバ）	完形	116	68	8
2	蝶ネクタイ形	完形	74	36	6
3	蝶ネクタイ形	完形	72	37	6
4	蝶ネクタイ形	半損	44	32	6
5	蝶ネクタイ形	半損	44	35	7
6	ヒト形	完形	103	32	8
7	動物（ゾウ）	頭部～鼻部のみ	39	37	5
8	動物（アイベックス）	頭部・脚部欠損	45	36	5
9	有茎鏃	完形	32	14	2
10	長脚鏃	完形	55	19	4
11	動物（アイベックス？）	角のみ	36	13	5
12	魚尾形	基部のみ	64	34	7
13	魚尾形	刃部のみ	36	43	5

本稿では、近年の発掘でこの墓地から出土した 13 点の両面加工石器を扱う（表 1、図 3）。出土資料の形状は多様で、ヒト、ロバ、ゾウ、アイベックス等の生物を模したもの、蝶ネクタイ形の抽象的なシンボル、石鏃、先王朝時代の各遺跡で広く出土する魚尾形ナイフ（Hikade 2004: 9-10）から成る。以下では、これら資料について、1）石材、2）製作技法、3）製品、の 3 点から観察・分類する。

まず石材は、すべてフリントが用いられている。これらは色合いによって大きく 3 分類され、ベージュに近い淡褐色、焦げ茶色に近い濃褐色、黒色の 3 種類から成る。

製作技法については、2 段階の工程に着目する。製品のみを観察対象とした場合、両面加工石器の製作に用いられる技術と工程は、平坦剥離によって石材を薄く割りながら全体の大まかな形状を作り出す成形工程

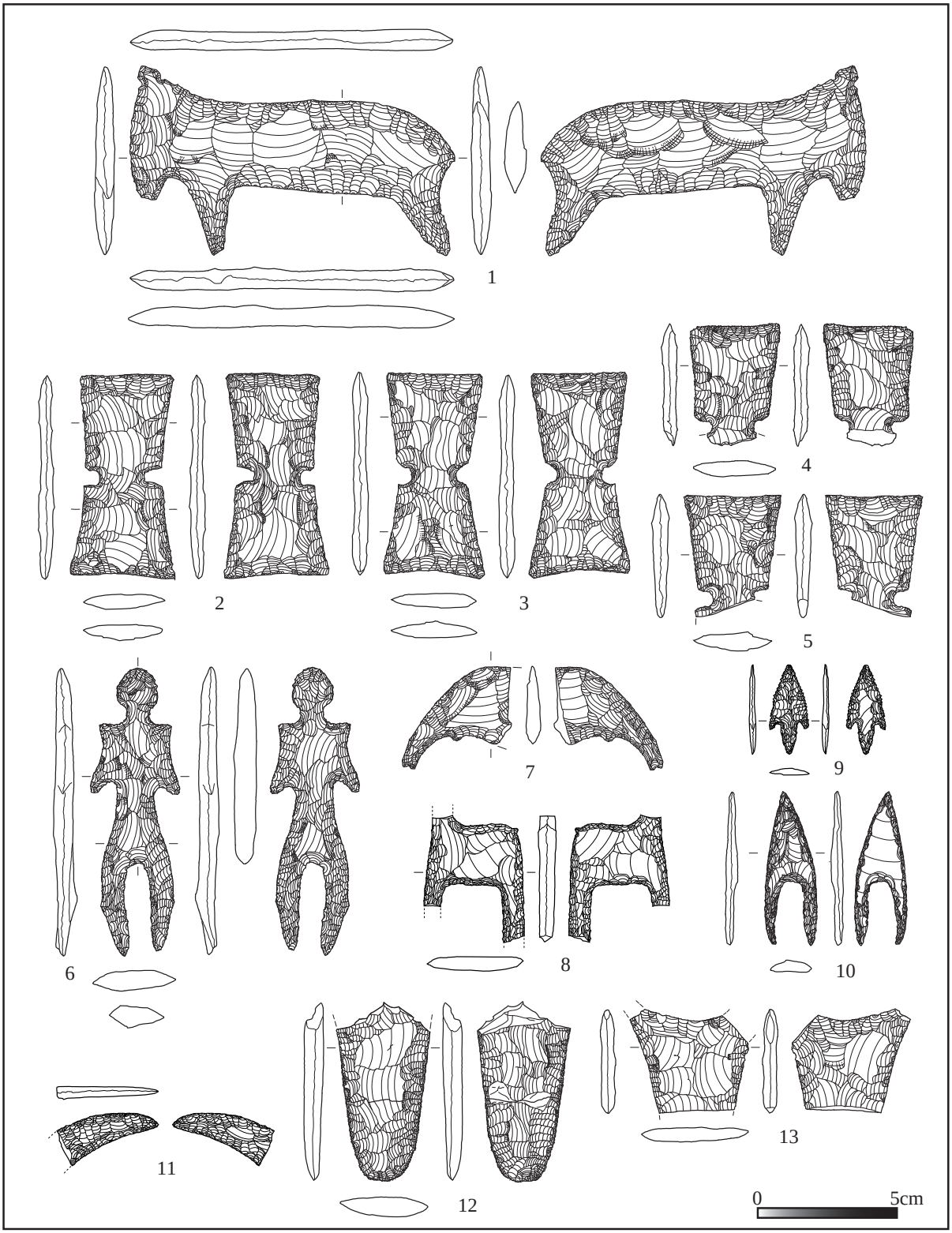


図 3　HK6 地区出土の両面加工石器
Fig.3 Bifacials from HK6

と、周縁部への押圧剥離によって仕上げを行う整形工程に大別される（長屋 2011: 105）。ここでは、成形工程での剥離失敗の有無と、整形工程における剥離の規則性について観察する。

製品については、完成された石器の形状を分類し、上記の石材と製作技法との関連性について考察する。

5. 分析・考察

石材、製作技法、製品の 3 項目からの分類結果を表 2 に示す。興味深いのは、HK6 地区から出土した両面加工石器が、上記 3 つの組み合わせの違いによって 3 分類されることである。

表 2　分析結果一覧
Table2 Attributes of Bifacials

資料No.	類型	1	2		3
		石材	製作技法		製品
			成形工程	整形工程	
1	1	淡褐色	+	不連続な押圧剥離	動物（ロバ）
2		淡褐色	+	不連続な押圧剥離	蝶ネクタイ形
3		淡褐色	+	不連続な押圧剥離	蝶ネクタイ形
4		淡褐色	+	不連続な押圧剥離	蝶ネクタイ形
5		淡褐色	+	不連続な押圧剥離	蝶ネクタイ形
6	2	濃褐色	+	石鏃製作技法	ヒト形
7		濃褐色	+	石鏃製作技法	動物（ゾウ）
8		濃褐色	+	石鏃製作技法	動物（アイベックス）
9		濃褐色	+	石鏃製作技法	有茎鏃
10		濃褐色	+	石鏃製作技法	長脚鏃
11		濃褐色	+	石鏃製作技法	動物（アイベックス？）
12	3	黒色	−	連続的押圧剥離	魚尾形
13		黒色	−	連続的押圧剥離	魚尾形

1 類は、蝶ネクタイ形や比較的大型の動物形の石器に代表される。これらは総じて淡褐色のフリントを原材として製作される。製作技法は、比較的大雑把に行われる成形工程と、不連続な押圧剥離による縁辺部の調整が行われる整形工程からなる。特にはじめの成形工程においては、剥離面が歪な階段状に残される剥離失敗が共通して観察された。また蝶ネクタイ形の 2 点については、この失敗の修正を試みた押圧剥離の痕跡が見られた（図 4）。この剥離は、”Push throughs” と呼ばれ、平坦剥離の失敗によって階段状に剥離されてしまった歪な石器表面を平坦に修正するための技法とされ、ナカダ期に代表的な波状剥取ナイフ（Ripple flaked knife）の剥離面にもしばしば認められる（Kelterboen 1984: 450）。

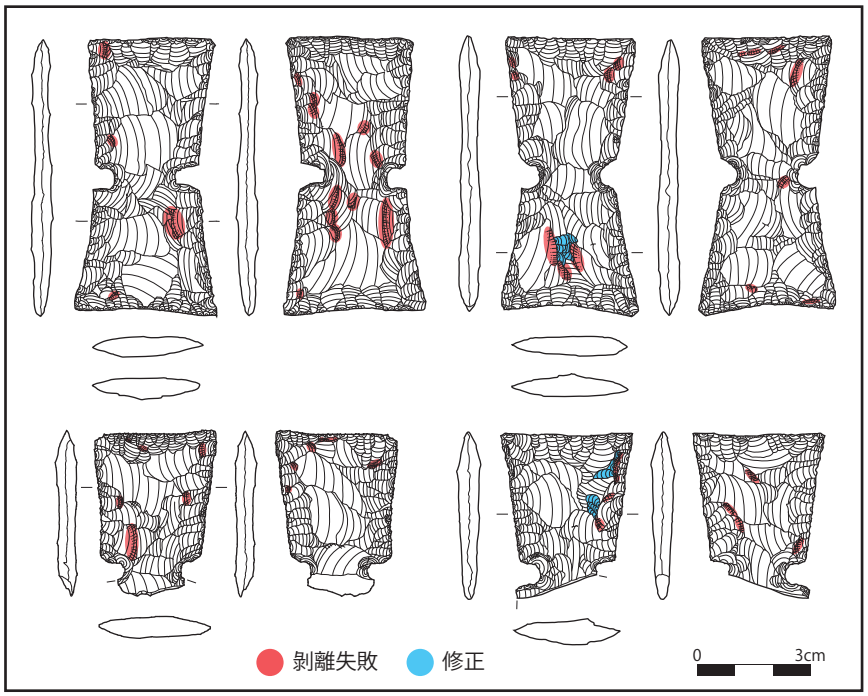


図 4　剥離失敗と修正の痕跡
Fig.4 Mistakes and recoveries observed

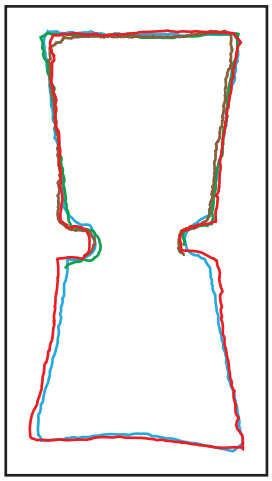


図 5　外形比較
Fig.5 Overlay of outlines

また、蝶ネクタイ形の資料 4 点についてさらに注目すべきは、製作技法のみならず製品の外形が完全に一致する点である（図 5）。この結果からは、これらが同一の人物によって同時に製作された可能性が高いことが推測される。

2 類は、比較的小型の動物や人間を象った石器に代表される。濃褐色の石材が主に用いられている。2 類の最大の特徴は、石鏃の製作技術が応用されている点である。すなわち、押圧剥離を用いた石鏃の脚部や翼部を抉り出す技法そのものが、動物の角や足の造形に用いられている。ここで興味深いのが、これら石器のサイズが 1 類よりもはるかに小型な点である。たとえば、動物そのものの実寸は最大であるはずのゾウ（図 3）が、1 類のロバの半分程度の大きさで作られている。これは、動物の身体的特徴と石鏃の製作技法の双方に起因する。つまり、長い角や足あるいは鼻の造形には石鏃の製作技法が必須である反面、この技法自体が、1 類のような大型の石器製作には向かないためである。

3 類は、魚尾形のナイフに代表される。製作には黒褐色のフリントが選択される。3 類の特徴は、1，2 類とは異なる製作技法が極めて高い水準で実施されている点である。それは、石器中心軸にまで及ぶ細長く連続的な押圧剥離による整形を行い、さらに周縁部には 1mm 四方の大きさで微細な押圧剥離がなされている点である。3 類には剥離失敗はほとんど観察されず、これらの製品は 1，2 類とは一線を画する技術と技能を以て製作されたと考えられる。

6. 結論

エリート墓地に供給された両面加工石器は、製作に用いられた原石、製作技術（とその水準）、製品という 3 項目の組み合わせを明確に異にする、少なくとも 3 類型に分けられた。2 類型については、製品の形状と石鏃の製作技法上の特徴との間に物理的な限定条件があったために、製品と技法の組み合わせが規定された。しかし、すべての類型で用いられる石材はフリントという物質的に同一のものであるため、色調による加工難度の相違はない。したがって、これら 3 つの類型化は、単に石材や技法といった物理的条件に起因しているわけではないと理解できる。

一方で、筆者は本誌の前号において、先王朝時代の石器製作の技術水準は、遺構の社会的階層にかかわらず極めて近似したものであり、専業的な製作者でなくとも欲すればエリート墓地に副葬される石器と同様のものを当時の人々が製作することができたとの見解を得た（長屋 2011）。事実、製作剥片を伴う精巧な魚尾形ナイフが土器製作址からも出土することが確認されている。つまり、遺跡全体で見れば比較的均一の水準の製作技術が自由に採用・実施されていたと考えられる（長屋 2011）。

これらを総合すると、本稿で明らかになった点として、エリートの副葬品としての石器製作には、特定の石材、技法、製品の組み合わせから成る 3 つの類型が存在し、且つその類型分化は何らかの人為的な選択が働いた結果であることが指摘できる。これら 3 類型が石器製作集団の相違によるものであるのか、あるいは 1 集団内での使い分けであるのかについては未だ判然としない。しかし、少なくともこうした現象がエリート墓地のみにおいて認められることから、特定の石材、技法、製品の組み合わせが、石器の副葬品としての価値を規定していた可能性が考えられる。言い換えると、たとえ同様の技術を用いて同じ石器が製作可能であっても、それが相応しい生産体制、すなわち材料、方法、場所、またある場合にはヒトのもとで製作されなければ副葬品としての価値が当時の社会の中で認められなかった可能性が推測される。すなわち、エリート墓地から出土する両面加工石器は、石材、技法、製品の特定の組み合わせで作られたという、いわばオーソライズを受けることで、共同体の中で固有かつ共通の価値が付与され、支配階層の「威信」を保つ装置として働いたと考えられる。

謝辞

本稿を草するにあたり、ヒエラコンポリス調査隊隊長の大英博物館レネ・フリードマン博士には、出土資料の使用許可をいただきました。早稲田大学文学学術院近藤二郎教授には、多岐にわたるご指導・助言を賜りました。早稲田大学エジプト学研究所馬場匡浩先生には、先王朝時代研究に関する様々なご指導を賜りました。ここに記して感謝いたします。

参考文献

Adams, B.

1998 “Something Very Special down in the Elite Cemetery”, *Nekhen News* 10, pp.3-4.

2000a *Excavations the Locality 6 Cemetery at Hierakonpolis 1979-1985*, London.

2000b “Some Problems Solved in the Locality 6 Cemetery”, *Nekhen News* 12, pp.4-6.

Friedman, R.

2000 “Figures in Flint”, *Nekhen News* 12, p.14.

2005 “Excavating Egypt’s Early Kings”, *Nekhen News* 17, pp.4-5.

2006 “Bigger Than an Elephant. More Surprises at HK6”, *Nekhen News* 18, pp.7-8, 16.

Friedman, R., Maish, A., Fahmy, A. G., Darnell, J. C. and Johnson, E. D.

1999 “Preliminary Report on the Field Work at Hierakonpolis”, *Journal of American Research Center in Egypt* 36, pp.1-35.

Friedman, R., Neer, V. W. and Linseele, V.

2011 “The elite Predynastic cemetery at Hierakonpolis: 2009-2010 update”, in Friedman, R. and Fiske, P. N. (eds.), *Egypt at its origins* 3, Orientalia Lovaniensia Analecta 205, Peeters, pp.157-191.

Hikade, T.

2004 “Prestige and skill- Fishtail knives in Predynastic Egypt”, *Nekhen News* 16, pp. 9-10.

Holmes, D.L.

1989 *The Predynastic Lithic Industries of Upper Egypt: A comparative study of the lithic traditions of Badari, Naqada and Hierakonpolis*, BAR (15), Oxford.

1992 “Chipped stone-working craftsmen, Hierakonpolis and the rise of civilization in Egypt”, in Friedman, R.F. and Adams, B. (eds.), *The followers of Horus: Studies dedicated to Michael Allen Hoffman 1944-1990*, Oxford, pp.37-44.

Kelterborn, P.

1984 “Towards Replicating Egyptian Predynastic flint knives”, *Journal of Archaeological Science* 11, pp.433-453.

Takamiya, I and Endo, H.

2008 “Return to the Temple Workshop: The Manufacture of Bifacial Flint Tools”, *Nekhen News* 20, pp.8-9.

2011 “Variations in lithic production at Hierakonpolis: A preliminary report from the excavation of HK11C square A6-A7”, in Friedman, R. and Fiske, P. N. (eds.), *Egypt at its origins* 3, Orientalia Lovaniensia Analecta 205, Peeters, pp. 727-744.

高宮いづみ

2010 「ヒエラコンポリス遺跡とナカダ遺跡 — エジプト先王朝時代の両面加工石器に関する比較考察 —」、『比較考古学の新地平』、菊池徹夫編、同成社、pp.1054-1064.

長屋憲慶

2011 「エジプト先王朝時代の石器製作技術 — ヒエラコンポリス遺跡出土資料の比較 —」、『エジプト学研究』17 号、pp. 99-113、早稲田大学エジプト学会 .

卒業論文概要

岩窟墓の形態変化とアマルナ時代の影響

熊崎　真司*

1. はじめに

第 18 王朝からラメセス朝時代にかけて、テーベ・ネクロポリスの岩窟墓[1)]（以下、テーベ岩窟墓）には様々な形態的変化がみられる（Assmann 2003, Kampp 1996; 2003, Seyfried 1987, Strudwick 1994）。岩窟墓の上層部、中層部、下層部にわたってみられるこういった変化は、アマルナ時代を画期に生じたものだとされている。これまで、このような変化を根拠に、古代エジプト人の死生観が、アクエンアテン王の宗教改革を経て、いかに変化したかが論じられてきた。

ただし、ここで問題となるのは、そうした影響下にあったアマルナ時代に、テーベで岩窟墓の造営が行われなくなったことである。テーベにおける岩窟墓の造営は、アマルナ時代終焉後に再開されたものの、ここには一定の断絶が認められる。テーベ岩窟墓にみられる変化が、アマルナ時代の影響に起因するものだとすれば、相応の変化がアマルナ時代にも存在した可能性が高い。

卒業論文では、テーベの資料を主体とした従来の研究で焦点の置かれにくかった「アマルナ時代における岩窟墓の変化」に注目し、岩窟墓の形態的変化とアマルナ時代の影響との関係について考察した。テル・エル＝アマルナの岩窟墓（以下、アマルナ岩窟墓）は、アマルナ時代、アケトアテンの領域東部に造営されたもので、テーベ岩窟墓に代わる同時代の資料としてとらえることができる。同論文では、アマルナ岩窟墓の分析を通して得られた結果が、テーベ岩窟墓にみられる変化との関わりの中でいかに位置づけられるかを検討することで、従来示されてきた見解の再検討を目指した。

卒業論文の章立ては、以下のようになっている。

1. 序論
2. 新王国時代におけるアマルナ時代の位置付け
3. 方法論
4. テーベ岩窟墓の形態的変化に関する先行研究
5. アマルナ岩窟墓の類型と変遷
6. 考察
7. 結論

なお、本概要では、主に第 5 章「アマルナ岩窟墓の類型と変遷」の内容を中心として記述を行うものとする。

＊ 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

2. アマルナ岩窟墓の概要

アマルナ岩窟墓は、アケトアテンの領域東部に位置する石灰岩質の断崖に沿って造営された。現在までに、墓としての性格が不明瞭なもの数基を含めて TA1 から TA25A までの合計 45 基が発見されている（Davies 1903; 1905a; 1905b; 1906; 1908a; 1908b; 図 1）。これらの岩窟墓は、王家のワディ（涸谷）を挟んで南北に大きく 2 つの墓域を形成している。

当該地域の石灰岩質はかなり劣悪であるが、岩窟墓には、プラスターを活用した良質のレリーフ装飾がみられる。これらのレリーフには、アマルナ時代以前にはなかった主題に基づくものが多く、アマルナ時代の独自性を示す資料として注目されてきた。

一方で、形態的特徴に関しては、祠堂形態の類似などを根拠に、概ねテーベの伝統との連続性を有するものとしてとらえられている（Aldred 1988: 24）。ただし、アマルナ岩窟墓は、大半が未完成であることもあり、テーベ岩窟墓との関わりの中で十分に扱われにくい傾向がある。

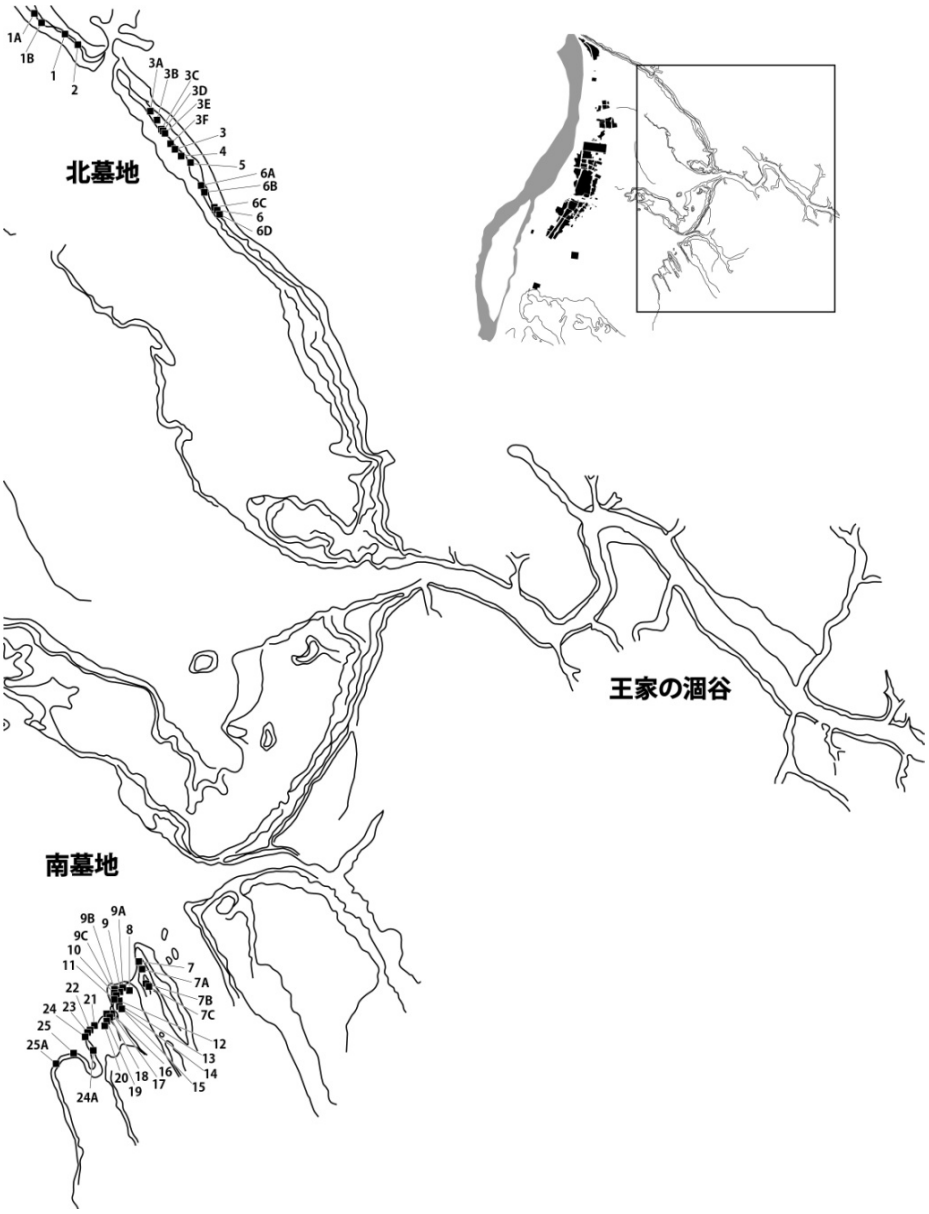


図 1　テル・エル＝アマルナ東部の墓域

3. 方法論

3-1. 方針

卒業論文には、アマルナ岩窟墓の変化を、テーベ岩窟墓の変化との関係の中で位置付けるという目的があったが、こうした検討を行うためには両者を同じ枠組みの中で分析する必要があった。それゆえ、アマルナ岩窟墓の分析項目を絞る際には、テーベ岩窟墓の 3 層構造的な理解の方法を参考にした。

テーベ岩窟墓は一般的に、上層部、中層部、下層部の 3 層構造で構成されるものと理解されている（Seyfried 1987; Assmann 2003; Kampp 2003）。各層の定義に関しては、前庭部やファサード上部の帰属をめぐって K-J. ザイフリート、J. アスマン、F. カンプの 3 者間で微妙に差異が存在する[2)] が、卒業論文ではカンプの定義に準拠した。3 層とは、すなわち、ファサード上部やピラミッド型構造などで構成される上層部、祠堂や前庭部などから構成される中層部、埋葬用の構造が設けられた下層部を指し、それぞれが、太陽信仰、被葬者の葬送儀礼、オシリス信仰に関わる部位であるとされる。テーベ岩窟墓の形態的変化に関する研究はこうした枠組みに基づいて進められてきた。

分析対象としたのは、中層部にあたる岩窟祠堂の平面プラン、ステラや彫像室などの内部構造、下層部にあたる埋葬用構造である。これらの 3 項目に関し、それぞれ、類型分類を行い、経時的な変遷の検討を目指した。上層部、前庭部に関しては、アマルナ岩窟墓が未完成であることや地形的な要因[3)] を踏まえ、分析を行わなかった。

3-2. 時期判断の根拠

岩窟墓造営の前後関係を判断する指標として、卒業論文では、岩窟墓壁面の図像と墓の立地を用いた。

まず、1 つ目に用いたのは、岩窟墓壁面の王族描写に表現された王女の人数を指標とする方法（Davies 1905a: 6-8）である。これは、壁面に描かれた王女の人数と境界碑の記述を対応させることによって、岩窟墓の造営開始時期や造営継続期間を絞り込むというものである（表 1）。1980 年代における境界碑研究の成果（Aldred 1988: 44-51）を基にこれを修正して活用した。

2 つ目に用いたのは、岩窟墓の立地変化を指標とする方法である。これは、上述した図像による編年に基づいたものであり、墓の立地を時間的な経過と結びつけたものである。これに従えば、まず、アクエンアテン王の治世 5 年以前に南墓地で墓の造営が始まり、治世 8 年から 9 年以降になると北墓地南部へと墓域が展開、その後、治世末期にかけて北墓地北部に墓の造営地が移動していったことになる。

これらの方法は、該期の職人が、当時存在した王女の全てを王族描写に反映させたことを前提としているため、活用には慎重な態度が必要とされる。しかし、卒業論文では、王女の数や墓の立地といった要素の変遷が、アテン神の名称や壁画主題の変化と明確な並行性を有する（Aldred 1988:25-26; Davies 1906: 8）こと

表 1　王女の数、墓の立地と境界碑に記された年代の関係

岩窟墓に存在する王女の姿が描かれた図像	該当する岩窟墓	境界碑
1名の王女が描かれた図像	TA9(SN), TA11(SN)	M, X
2名の王女が描かれた図像	TA23(SM)	K(治世5年の出来事への言及)
3名の王女が描かれた図像	TA3(NS), TA5(NS), TA8(SN), TA10(SN), TA25(SS)	A, B（治世6年の出来事への言及、治世8年の後記）
3名の王女が描かれた図像と4名の王女が描かれた図像	TA6(NS), TA7(NS)	
4名の王女が描かれた図像	TA1(NN), TA4(NN)	
3名の王女が描かれた図像と4名の王女が描かれた図像	TA2(NN)	

※ SN：南墓地北部、SM：南墓地中部、SS：南墓地南部、NN：北墓地北部、NS：北墓地：南部

（Davies 1905a, 6-8; Aldred 1988, 44-51をもとに作成）

を評価し、時期の前後関係を判定する方法論として採用した。

4. 分析：アマルナ岩窟墓の類型と変遷

4-1. 祠堂の平面プラン

卒業論文では、祠堂から彫像室を除いた部分の平面プランに関して類型化を行った[4)]。対象としたのは、祠堂の完成形が全く推測できない 5 基を除く、計 40 基である。部屋の構成や柱の様相を指標とした分類の結果、アマルナ岩窟墓の平面プランは以下の 12 通りに分類することができた（図 2）。

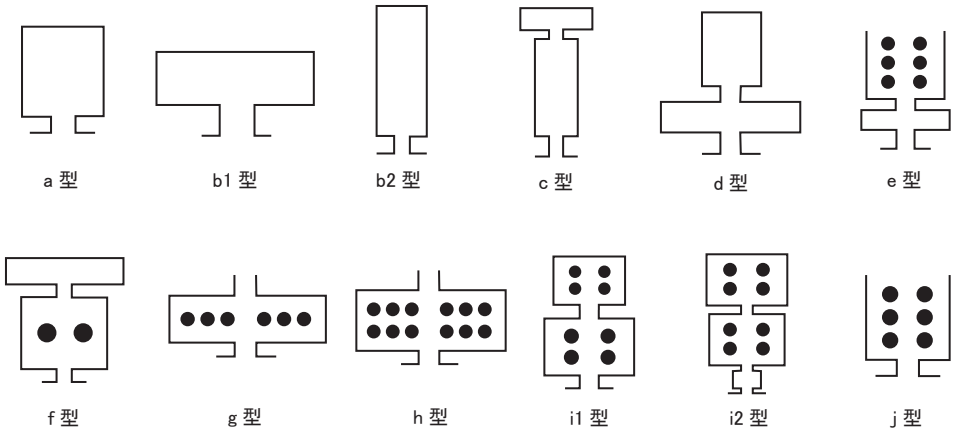


図 1　アマルナ岩窟墓の平面プラン

a 型　：1 部屋から構成される最も簡易で小規模な祠堂形態。テーベ I 型に相当（註 5）。

b1 型　：軸線に直交する形で長く伸びる広間で構成される祠堂形態。テーベ IIa 型に相当。

b2 型　：軸線方向に長く伸びる通廊状の広間で構成される祠堂形態。カンプによるテーベ岩窟墓の分類でいう IIb 型に相当。

c 型　：軸線方向に長く伸びる通廊状の広間の奥に、軸線に直交する形で長く伸びる広間が続く祠堂形態。テーベ IVa 型に相当。

d 型　：軸線に直交する形で長く伸びる広間の奥に、小規模な部屋が続く祠堂形態。テーベ Va 型に相当。

e 型　：軸線に直交する形で長く伸びる広間の奥に、柱列を有する広間が続く祠堂形態。テーベ VIb 型に相当。

f 型　：柱 2 本を有する方形の広間の奥に、軸線に直交する形で長く伸びる広間が続く祠堂形態。テーベ VIIa 型に相当。

g 型　：軸線に直交する形で長く伸びる 1 列の柱列を持った広間を第 1 室目として有する祠堂形態。テーベ VIIa 型から VIIc 型のいずれかに相当。

h 型　：軸線に直交する形で長く伸びる 2 列以上の柱列を持った広間を第 1 室目として有する祠堂形態。テーベ VIII 型に相当。

i1 型　：4 本の柱を有する方形の広間の奥に、さらに同様の広間が続く祠堂形態。テーベ VIII 型に相当。

i2 型　：i1 型と酷似し、第 1 の広間の手前に方形小型の前室を有する祠堂形態。テーベ岩窟墓の類型には該当するものが存在しない。

j 型　　：奥に向けて続く 2 列の柱列を有する、軸線方向に長い広間を第 1 室に持つ祠堂形態。テーベ IX 型に相当。

以上 12 類型の内、出現頻度が高い a 型、b1 型、b2 型、c 型、g 型、h 型の 6 類型は、形態的特徴のみで判断すれば、それぞれ、カンプの分類でいう I 型、IIa 型、IIb 型、IVa 型、VIIa, 型、VIII 型の 6 類型に相当するものであるが、全 40 基の内の 4 分の 3 以上を占める。すなわち、これは、テーベ岩窟墓でみられる平面プランの祠堂が、アマルナにも多く存在することを示しており、両者の近似性が伺える。特に、g 型や h 型のような、いわゆる「神殿型」の祠堂が全体の 4 分の 1 を占めていることからは、アメンヘテプ 3 世時代の大型岩窟墓との連続性が推察される。

しかし、祠堂形態の経時的な変化をみていくと、20 年に満たない短期間ではあるものの、幾つかの点で、祠堂形態には大きな変化が生じていたことが分かる。まず、g 型や h 型といった形態の大規模な岩窟墓の造営がアクエンアテン王の治世 9 年頃までの時期に集中していることがあげられる。それ以降、g 型や h 型の岩窟墓は造営されなくなり、より小規模な岩窟墓の造営が増加している。中でも注目すべきは、治世 8 年以降に、北墓地南部で c 型の岩窟墓が造営されるようになったことである。上述のように、この類型はテーベ IVa 型に相当するものである。ただし、この祠堂形態は、テーベにおいて第 18 王朝初期に位置付けられ、トトメス 3 世時代以降、明確な例がみられなくなったものである。こうした背景を踏まえると、アマルナ岩窟墓にみられる c 型は、テーベ IVa 型と関係なくアマルナ時代に独自発展した形態の可能性がある。アマルナ時代以前のテーベにみられない f 型や i1 型､i2 型が造営されるようになるのも治世 8 年以降のことである。

また、もう 1 点の重要な変化としては、テーベ岩窟墓に典型的なテーベ V 型に相当する祠堂形態の消失があげられる。アマルナ岩窟墓において、テーベ V 型に相当するのは d 型であるが、この類型は、アクエンアテン王の治世 5 年以前に造営が開始された TA9 の 1 例を最後に、明確な例がみられなくなっている。

4-2. 祠堂の内部構造

祠堂内部にみられる構造の内、今回は、ステラや偽扉、彫像室といった構造に着目した。

アマルナ岩窟墓には、ステラや偽扉が存在しないとされていたが（Assmann 2003: 51）、今回、45 基全てに関して検証を行ったところ、アクエンアテン王の治世 5 年以前に造営が開始された TA9 に関しては、偽扉状のもの 1 基を含む、1 対のステラの存在を前室に確認することができた。アマルナ時代に、ステラや偽扉が祠堂内部に設けられなくなり、それに替わる構造として、従来それらが配置されていた部位に彫像室が配置されるようになったことは、アマルナ時代後のテーベ岩窟墓における偽扉の消失を論じる際にも重要な変化として言及される。TA9 のような岩窟墓が存在したことは、ステラや偽扉のような構造を設ける習慣が少なくともアマルナ時代の初頭までは存続していたことを示している。

4-3. 祠堂の内部構造

アマルナ岩窟墓に伴う埋葬用の構造としては、ピット、シャフト、スロープの 3 種類があげられる。対象としたのは、埋葬用の構造を有する 16 基である。内訳としては、ピット 2 例、シャフト 6 例、スロープ 9 例となった。アスマンは、アマルナ岩窟墓に伴う埋葬用構造は全てスロープであったとし（Assmann 2003: 51）、この時代に埋葬用構造の主流が完全にシャフトからスロープへ移行したかのような記述を行っているが、これが誤りであることが指摘できる。おそらく、これは、g 型や h 型のような祠堂形態をもつ大型の岩窟墓をばかりを中心に検討を行った（Assmann 1984）結果であると推測される。

実際、アマルナ岩窟墓における埋葬用構造の変遷をたどってみると、むしろ後の方へ向かうほどシャフト

の件数が増加しているのが分かる。一方で、埋葬用構造と祠堂形態の関係を見てみると、スロープの付属は TA9 の例を除けば、g 型～ i2 型のような柱を有する大型で複雑な構造の祠堂に限られる。また、ピットは a 型や b1 型のような小規模な祠堂に付属していることなども考慮すると、埋葬構造の種類は祠堂の規模と密接に関連したものであり、アスマンが想定したような、シャフトからスロープへの移行というような変遷は、アマルナ時代において起こらなかったことが分かる。

5. まとめ

卒業論文では、アマルナ岩窟墓の中層部、下層部の構造にみられる類型とその変遷を扱ったが、その中で幾つかの重要な知見を得ることができた。以下の項目では、こうした知見をテーベ岩窟墓の形態的変化との関係の中で論じてみたい。

5-1. 祠堂形態の変化と葬送儀礼

今回行った祠堂の平面プランの分析により、20 年に満たないアマルナ時代の間にも、岩窟墓の祠堂形態が大きく変化したことが分かった。このような変化には、アクエンアテン王の治世 8、9 年を境にみられる大型岩窟墓の減少のように、アケトアテンを取り巻く経済状況の変化を反映したと考えられるものもあるが、一方で、来世観の変化を反映したと考えられる例も存在する。被葬者の葬送儀礼に関連した施設である祠堂の形態的変化には、葬送儀礼自体の変化が密接にかかわっている可能性が高い。

そのような例として特に挙げられるのは、アマルナ時代における、テーベ V 型に相当する祠堂形態の消失とテーベ IVa 型に類する祠堂形態の発展である。前者に挙げたテーベ V 型は、典型的な T 字型の平面プランとして知られ、新王国時代全体を通してテーベ岩窟墓の中でもかなり一般的な形態であったことが分かっている。こうした形態の祠堂がアマルナ時代の開始後、程なくしてみられなくなる背景には、来世観の重大な変化が想定される。アマルナ時代初頭にはステラや偽扉といった構造が墓に付属しなくなったが、こうした変化とも無関係ではないと考えられる。アスマンは、ステラの記念碑的役割や来世に通じる通り道としての偽扉の役割を、第 18 王朝の T 字型祠堂と関連付けて論じている（Assmann 2003: 48）が、こうした概念に生じた変化が葬送儀礼、ひいては祠堂形態にも影響を与えた可能性がある。岩窟墓における偽扉の消失は、アマルナ時代の宗教改革による来世の否定が反映されたものだとされる（Hornung 1992）。すなわち、来世の存在が否定されたことにより、通り道としての偽扉は必要でなくなったものとされている。

一方、アクエンアテンの治世 8 年以降にみられる c 型の祠堂形態は、トトメス 3 世時代頃までみられるテーベ IVa 型に酷似しているものの、時期的に大きな隔たりが存在することから無関係のものであると考えられる。こうした状況は、前者がアマルナ時代において独自発展した形態であることを示唆しているといえよう。また、テーベ IVa 型の祠堂が、アマルナ時代以降再びみられなくなるという点を踏まえると、c 型の祠堂は、アマルナ時代独自の思想を反映して発展したもので、アマルナ時代の終焉に伴って造営されなくなったのではないかと考えることもできる。

5-2. 祠堂の内部構造

アマルナ時代前後における下層部の変化としては、しばしばシャフトからスロープへの埋葬用構造の変化が取り上げられる。こうした変化については、スロープをソカルの大祭に関連した構造としてとらえる立場（Assmann 2003）や冥界を再現した構造としてとらえる立場（Seyfried 1987）などが存在するが、いずれもシャフトからスロープへの変化を来世観の変化という立場から説明しようとする点で共通する。アスマンは、シャフトからスロープへの移行がアマルナ時代に完了したと捉えているが、今回の分析によって、それ

が誤りであることが分かった。また、アマルナ時代以降、テーベ岩窟墓では、スロープが主流になるものの、シャフトが完全に廃れたわけではない。

今回、アマルナ岩窟墓の下層部について検討を行ったことで、下層部は祠堂の規模と密接な関係にあることが分かった。このことから、下層部の種類は墓の所有者の志向以上に、経済力に経済力によって規定される要素であったと考えられる。こうした視点を踏まえると、シャフトからスロープへの移行という問題は、思想面の変化だけでなく、墓の所有者の経済力といった側面からも説明がなされるべきであるといえる。確かに、アマルナ時代後になると、相対的にスロープの占める割合が増加し、テーベ岩窟墓では主流となるが、実際にスロープを伴う岩窟墓がアマルナ以前に比べて急増しているというわけではない。アマルナ時代以降になると、テーベでは大幅に岩窟墓の造営が減少する。下層部の変遷が、スロープに対する志向の増大によっているのは否定しないが、スロープを設けることの出来ない人々による墓の造営の減少という観点からの説明も可能なのではないかというのが今回得られた予察である。

5-3. テーベ岩窟墓の変化とアマルナ時代の影響

第 18 王朝末期から第 19 王朝初期にかけて、テーベの岩窟墓には様々な形態的変化が指摘されている。中でもよく知られた例としては、先述した下層部の変化や、上層部におけるピラミッド型構造の発展 (Assmann 2003, 51; Kampp 1996,95-109; 2003, 9)、中層部における神殿的要素の採用 (Assmann 2003, 51; Kampp 1996, 58-81; 2003, 9-10) などが挙げられる。こうした変化を、アスマンは墓の神聖化 (Assmann 2003)、カンプは墓の私的葬祭殿化 (Kampp 2003, 10) として論じている。こうした変化の背景にはアマルナ時代の影響が想定されてきたが、今回行ったアマルナ岩窟墓の分析によって、アマルナ時代の間にも岩窟墓に大きな変化が生じていたのを指摘することができた。ただし、こうした変化は必ずしもアマルナ時代以降のテーベ岩窟墓の変化につながるものばかりではなく、アマルナ時代後に再び放棄された要素も存在する。図像表現や宗教観に重大な変化がみられた一方で、実際の葬送儀礼などは従来の伝統に従っていたという可能性が指摘されるアマルナ時代であるが、被葬者の葬送儀礼と強く結び付く祠堂の変化からは、やはり、そうした習慣にも変化する部分が存在したのだと推測できる。岩窟墓内の壁画にみられるアマルナ時代後の変化を扱った D. カイザー＝ゴーは、ポストアマルナにみられるアマルナ的主題から伝統的主題への回帰を再発展と表現しているが（Kizer-Go 2006）、同様の変化が岩窟墓の形態にも起こっていたのではないだろうか。N. ストラドウィックは壁画の変化の過程にみられる、アマルナ的要素の放棄、伝統への回帰という過程は古代エジプト人が墓のあり方を再考する一種の契機となった可能性を指摘している（Strudwick 1994）が、アマルナ時代後に生じるテーベ岩窟墓の形態的変化もまた、こうした中で起こったものであると考えられる。

6. おわりに

卒業論文では、岩窟墓の形態的な部分に関心が偏り、壁画や文字といった要素を十分に検討した研究に発展させることができなかった。また、テーベ岩窟墓の形態的変化を扱いつつも、実際に分析したのはアマルナ岩窟墓であり、テーベ岩窟墓については先行研究の検討にとどまってしまったことが反省される。

今回、下層部の変遷に関して被葬者の経済的能力に絡めた予察を行ったが、こうした視点を踏まえた上で岩窟墓の形態的変化を議論していくのは今後課題とすべき部分である。

註

1) 岩窟墓（Rock-cut Tomb）は、「岩に穴を穿って造営した墓」を指し、広義では岩窟式の王墓なども含めて呼称する。一方、狭義の岩窟墓は、上部構造に岩窟祠堂（chapel carved out of the living rock）を持つ墓（Dodson and Ikram 2008: 38）を指し、

王家の谷の王墓などは範疇に含まない。卒業論文で主に扱った先行研究では、テーベのいわゆる「貴族墓」を指して岩窟墓という用語が用いられており、王墓は議論の対象とされていない。同様の視点でアマルナ岩窟墓の分析を行った同論文では、狭義に準拠した。

2) ザイフリートは、上層部にファサード上部を含めない点で、アスマンは前庭部を上層部に含めている点でカンプの定義付けと異なっている。

3) 立地する地形の影響で、上層部の構造や堀込式の前庭部を設けるのが困難であったとされている（Assmann 2003: 51）。。

4) 理由は 2 点あげられる。第 1 に、アマルナ岩窟墓に付属する彫像室は、しばしばテーベ岩窟墓におけるステラや偽扉などと対比される構造である（Assmann 2003: 51）。第 2 に、検討した限り、彫像室はアマルナ岩窟墓において基本的に平面プランを問わず付属する可能性のある構造だった。以上 2 つの理由から、彫像室は類型化を行う際の決め手にはなり得ないと判断した。

参考文献

Aldred, C.

1988 *Akhenaten: King of Egypt*, London.

Assmann, J.

1984 Das Grab mit gewundenem Abstieg. Zum Typemwandel des Privatgrabs im Neuen Reich, *Mitteilungen des Deuscen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 40, Mainz, pp.277-290.

2003 The Ramesside tombs and the construction of sacred space, in N. Strudwick and J. H. Taylor(eds.), *The Theban Necropolis: Past, Present and Future*, London, pp.46-52.

Davies, N. d. G.

1903 *The rock tomb of el-Amarna I: The Tomb of Meryra*, London.

1905a *The rock tomb of el-Amarna II: The Tomb of Panehesy*, Meryra II, London.

1905b *The rock tomb of el-Amarna III: The Tomb of Huya and Ahmes*, London.

1906 *The rock tomb of el-Amarna IV: The Tomb of Penthu, Mahu, and Others*, London.

1908a *The rock tomb of el-Amarna V: The Tomb of Smaller Tombs and Boundary Stelae*, London.

1908b *The rock tomb of el-Amarna VI: The Tomb of Parennefer, Tutu, Aÿ*, London.

Dodson, A. and Ikram, S.

2008 The tomb in Ancient Egypt : royal and private sepulchres from the early dynastic period to the Romans, Thames & Hudson.

Hornung, E.

1992 “Zur Struktur des ägyptischen Jenseitsglaubens” , Zeitschrift für ägyptische Sprache und Altertumskunde 119, Brlin, pp.124-130.

Kampp, F.

1996 Die thebanische Nekropole: zum Wandel des Grabgedankens von der XVIII. bis zur XX. Dynastie, 2 vols, Mainz.

2003 The Theban Necropolis: an overview of topography and tomb developpment from the Middle Kingdom to the Ramesside Period, in N. Strudwick and J. H. Taylor(eds.), The Theban Necropolis: Past, Present and Future, London, pp. 2-10.

Kizer-Go, D.

2006 A Stylistic and Iconographic Analysis of Private Post-Amarna Period Tombs at Thebes, Graduate Division of the University of California, Graduate Division of the University of California, Berkeley.

Seyfried, K. -J.

1987 Entwicklungen in der Grabarchitektur des Neuen Reiches als eine weitere Quelle für theologische Konzeptionen der Ramessidenzeit, in J. Assmann, G. Burkard and V. Davies(eds.), Problems and priorities in Egyptian archaeology, London, pp. 219-253.Strudwick, N.

1994 Change and Continuity at Thebes. The Private Tomb After Akhenaten, in C. Eyre, A. Leahy, and L. M. Leahy(eds.), The Unbroken Reed: Studies in Honour of A. F. Shore, London, pp.321-336.

活動報告

2011 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告

1. 総会

日時：2011 年 4 月 18 日（月）

会場：エジプト考古学ビル 2 階

2. フォーラム、シンポジウム

（1）公開シンポジウム『世界遺産エジプト、メンフィス・ネクロポリスの未来
－エジプト、メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から観た遺跡整備計画の学際的研究－』

日時：2011 年 7 月 2 日（土）14:00-18:00

会場：早稲田大学小野記念講堂

プログラム：

・「はじめに－プロジェクトの趣旨と概要」
　吉村作治（研究代表者・早稲田大学名誉教授）

・「エジプトにおける遺跡整備計画の現状と今後の展望」
　近藤二郎（早稲田大学文学学術院教授・早稲田大学エジプト学研究所所長）

・「メンフィス・ネクロポリスにおける保存整備例」
　青木繁夫（サイバー大学世界遺産学部教授）

・「アブ・シール南丘陵遺跡および周辺の遺跡管理に向けた調査」
　河合　望（早稲田大学理工学術院客員准教授）

・「衛星データを用いたメンフィス・ネクロポリスの遺跡の分布・立地環境調査」
　惠多谷雅弘（東海大学情報技術センター事務長）

・「アブ・シール南丘陵遺跡の三次元デジタルモデル化について」
　阪野貴彦（東京大学生産技術研究所特任助教）

・「メンフィス・ネクロポリスの地理情報システム（GIS）による基盤構築の現状と課題」
　津村宏臣（同志社大学文化情報学部准教授）

・パネル・ディスカッション「世界遺産メンフィス・ネクロポリスの未来」
　コーディネーター：近藤二郎
　パネリスト：　吉村作治
　　青木繁夫
　　中川　武（早稲田大学理工学術院教授）
　　惠多谷雅弘
　　河合　望

・「研究代表者による総括」
　吉村作治

パネルディスカッション風景

（2）エジプト・フォーラム 20

日時：2011 年 11 月 5 日（土）15:00–18:00

会場：早稲田大学国際会議場井深大記念ホール

プログラム：

・「開会の挨拶」

　近藤二郎（早稲田大学教授・早稲田大学エジプト学研究所所長）

・「表彰式」

・「第 2 の太陽の船　復原プロジェクト　ビデオ上映」

・「基調講演『太陽の船の謎を探る』」

　吉村作治（早稲田大学名誉教授）

・「パネル・トーク『甦れ！太陽の船』」

　コーディネーター：吉村作治

　パネリスト：　中川　武（早稲田大学教授）

　　柏木裕之（サイバー大学教授）

　　黒河内宏昌（サイバー大学教授）

　　戸田　勝（(株）戸田石材代表取締役）

　　阪野貴彦（東京大学生産技術研究所特任助教）

　　増澤文武（(財）元興寺文化財研究所名誉研究員）

満席となった会場

懇親会会場：アバコ・ヴィラフェリーチェ

3. 定期研究会

（1）第 9 回

日時：2011 年 4 月 18 日（月）

会場：エジプト考古学ビル 2 階

発表題目：「ナッブートの民族誌」

発表者：瀬戸邦弘（上智大学文学部専任嘱託講師）

（2）第 10 回

日時：2011 年 8 月 5 日（月）

会場：エジプト考古学ビル 2 階

発表題目：「新王国時代第 18 王朝アマルナ時代末期の王位継承に関する諸問題」

発表者：河合　望（早稲田大学理工学術院客員准教授）

（3）第 11 回

日時：2011 年 10 月 24 日（月）

会場：エジプト考古学ビル 2 階

発表題目：「アムドゥアト書で飾られた 18 王朝の王墓の埋葬室について～その構造と壁画とテキストの関係からみた若干の考察～」

発表者：菊地敬夫（サイバー大学世界遺産学部准教授）

（4）第 12 回
日時：2011 年 12 月 12 日（月）
会場：エジプト考古学ビル 2 階
発表題目：「エジプト考古学におけるビジュアリゼーションの可能性」
発表者：内山博子（女子美術大学芸術学部教授）

４．定期研究会発表要旨

(1)「ナッブートの民族誌」

瀬戸邦弘

エジプト・アラブ共和国の上エジプト地方では聖者を祝う祭に際して、ナッブートと呼ばれる伝統的棒術の試合が行われる。そこには実践者たちのみに共有されるイーミックなレベルでの身体観が存在し、またその身体観を基とする身体技法が駆使され試合が展開される。本研究はこれら独自の「身体」とそれを基にする世界観の抽出を試みるものである。ところでこのような伝統的、地域的な身体を理解・抽出する事は、すなわち当該地域のエスノサイエンス（民族科学）の世界を理解することにも繋がる。たとえば、この競技は単なるスポーツを超え、そこで実践される所作や礼法を基に当該地域における人間関係の強化や再確認を促すひとつの文化装置といってよい。上述してきた身体観や身体技法とはいわゆる「暗黙知」として存在し、上エジプトという限定されたローカルな空間に共有される文化コードといえる。したがって、本競技の考察は、地域におけるローカルアイデンティティ形成・強化のプロセスのひとつの事例研究にもなるのである。

(2)「新王国時代第 18 王朝アマルナ時代末期の王位継承に関する諸問題」

河合　望

エジプト新王国時代第 18 王朝のアクエンアテン王の治世末期からトゥトアンクアメン王即位までの状況は依然として不明であり、研究者の間で見解の一致をみていない。本発表では、これまでの諸説と同時代資料を再検討し、アクエンアテン王の治世の末からトゥトアンクアテン王の即位の間に存在したと考えられる王の比定に関して、次のような私見を提示した。アクエンアテン王は、治世第 13 年以降に即位名「アンクケペルウラー」を持つ男性のセメンクカラー王を共治王として迎えた。セメンクカラーはアクエンアテン王の第 1 王女メリトアテンを王妃とした。セメンクカラー王の治世は 1、2 年で、その後共治王となったのは、即位名「アンケトケペルウラー（アンクケペルウラー）＋形容辞」を持つネフェルネフェルウアテン女王であるとした。ネフェルネフェルウアテンの人物比定のついては、主にネフェルトイティ王妃とする説とメリトアテン王女とする説の 2 つがあるが、アクエンアテン王がセメンクカラー王を迎えた治世第 13 年以降に、ネフェルトイティ王妃に関する記録が無くなることから、ネフェルトイティ王妃は他界したと考えられ、セメンクカラーの死後に未亡人となったメリトアテンがネフェルネフェルウアテン女王になった可能性が高い。メリトアテンはセメンクカラーの死後にネフェルネフェルウアテン女王（アクエンアテン王の王妃を兼ねる）としてアクエンアテン王と共同統治を行い、アクエンアテン王の死後少なくとも 3 年間単独統治を行ったと指摘した。

(3)「アムドゥアト書で飾られた 18 王朝の王墓の埋葬室について～その構造と壁画とテキストの関係からみた若干の考察～」

菊地敬夫

本発表では、アムドゥアト書で装飾された埋葬室をもつトトメス 3 世王墓、アメンヘテプ 2 世王墓、アメンヘテプ 3 世王墓を検討対象とし、冥界の書と埋葬室の関係性について考察を行なった。まず、これらの王

墓の埋葬室に記されているアムドゥアト書および太陽神への連祷（天井碑文）を読み解き、それらが記されている壁面または柱の位置を分析した。その結果、トトメス 3 世王墓の埋葬室の柱に記された天井碑文は、冥界に至る太陽神への祭祀を表していることがわかり、王墓の埋葬室は、冥界における祭祀空間であると考えられた。このような解釈は、アメンヘテプ 2 世王墓およびアメンヘテプ 3 世王墓の埋葬室に設えられた角柱の装飾と、アムドゥアト書の壁面への配置の分析からも裏付けられた。さらに、ルクソール神殿に施された太陽信仰の奥義書とも言えるテキストの内容と、アムドゥアト書に含まれている太陽神への讃歌の内容が密接に関連していることも示し、王墓の埋葬室が太陽神への祭祀空間としての役割を担っていたことを明らかにした。以上のように、王墓の埋葬室は、冥界における太陽神への祭祀空間としての機能を備えることによって、様式化された空間であった。

＊本発表は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「アメンヘテプ 3 世王墓に描かれた「アムドゥアト書」の史料化のための調査研究」（研究代表者：菊地敬夫）における成果の一部である。

(4)「エジプト考古学におけるビジュアリゼーションの可能性」

内山博子

女子美術大学では、2005 年 1 月に早稲田大学古代エジプト調査隊によって発見されたエジプトダハシュール北遺跡の未盗掘墓のミイラ「セヌウ」を CG で復顔する機会を頂いたことをきっかけに、エジプト考古学と美術とメディアテクノロジーの融合による研究が始まった。「セヌウ」と「ラムセス 2 世」復顔では、美術、エジプト考古学、解剖学のコラボレーションによって成果を得たことから領域を超えた研究の意義を実感した。この経験を通して、これまでエジプト考古学で研究されてきたことを美術分野で培われてきたアート表現のテクニックとメディアテクノロジーを融合させビジュアル化することで新しい研究の可能性が限りなく拡がっていることがわかった。2011 年には、ＡＲ技術を用いて表現した「太陽の船」では、ビジュアル化した画像に新しい表示技術を加えることで、専門の研究者のみならず広く一般の人にも伝えることができるコンテンツ制作が可能であることが実証された。今後のエジプト考古学の研究に、日々開発されている様々な新しい技術を積極的に取り入れ、美術の表現力を加えてビジュアライズすることで、お互いの分野が成長していくことを確信している。

5. 法人会員

早稲田大学エジプト学会の法人会員として、（株）熊谷組、（株）ポニーキャニオン、（株）アケトにご支援をいただきました。ここに記して感謝いたします。

活動報告

2011 年 エジプト調査概要

1. 調査期間および調査参加者（敬称略）

（1）太陽の船調査

調査期間：　2011 年 1 月 1 日～ 12 月 31 日（継続中）

調査参加者：　吉村作治、黒河内宏昌、吉村龍人、ユーセフ・カーリッド、岩出まゆみ、佐々木愛（以上 NPO 法人太陽の船復原研究所）、アフィフィ・ローハイエム、アイマン・ハーミッド、イーサ・ジダーン、ディア・エルディン（以上 SCA）
戸田　勝、河原正純、鈴木幹也、柏木裕之、西坂朗子、高橋寿光、山田綾乃（以上蓋石取り上げ）
増澤文武、青木繁夫、植田直見、山田哲也、カーリ・ステファン（以上サンプリング）

（2）アブ・シール南丘陵遺跡調査

調査期間：　第 20 次調査　2011 年 1 月 25 日～ 2011 年 2 月 3 日

調査参加者：　河合　望、柏木裕之、熊崎真司

調査期間：　第 21 次調査　2011 年 9 月 3 日～ 2011 年 10 月 9 日

調査参加者：　吉村作治、河合　望、苅谷浩子、西坂朗子、高橋寿光、熊崎真司、山田綾乃、後藤里英、福田莉紗、伊東真佑子

（3）ダハシュール北遺跡調査

調査期間：　第 20 次調査　2011 年 8 月 8 日～ 8 月 30 日

調査参加者：　吉村作治、近藤二郎、馬場匡浩、矢澤　健、長屋憲慶、山川彩、青笹基史、リチャード・ジャスキ

（4）王家の谷・アメンヘテプ 3 世王墓調査

調査期間：　2011 年 10 月 16 日～ 2012 年 3 月 31 日（継続中）

調査参加者：　吉村作治、近藤二郎、菊地敬夫、柏木裕之、河合　望、西坂朗子、高橋寿光、ジョルジョ・カプリオッティ、森　康雄、苅谷浩子、犬井正男、佐藤真知子、中井　泉、阿部善也、中村彩奈、吉村龍人、ユーセフ・カーリッド、柴田みな、田辺愛理、西村朋子

（5）ルクソール西岸・アル＝コーカ地区調査

調査期間：　第 5 次調査　2011 年 12 月 28 日～ 2012 年 1 月 7 日

調査参加者：　近藤二郎、柏木裕之、河合　望、西坂朗子、高橋寿光、熊崎真司

2. 調査概要

(1) 太陽の船調査 [1)]

クフ王第 2 の船の発掘、組み立てを目指す太陽の船プロジェクトは、2011 年、主に①蓋石取り上げ、②サンプリングの準備の 2 つの活動を行った。

①蓋石取り上げ

蓋石の取り上げに向けて、1 ～ 6 月の期間、ガントリークレーン（蓋石の取り上げ）、台車とレール（蓋石の移動）の施工を行った。そして 6 月 22 日～ 7 月 26 日にかけて、ピットを覆う全 40 列（41 枚）の蓋石と鍵石のうち、SCA の方針で現状保存することになった西端の 4 枚を除く 36 列（37 枚）を取り上げ、大テントの外に安置した。蓋石取り上げ後のピットは、断熱材入りの板蓋で閉じている。取り上げと同時に、36 列（37 枚）の蓋石、鍵石および蓋石と岩盤の隙間を塞いでいた詰石を詳細に観察して記録し、それらの施工過程の復原考察を行った。またそれらに記されていた数百点にもおよぶ文字資料をすべて記録し、8 月以降その資料化を行っている。

②サンプリングに向けての準備

蓋石取り上げに先立つ 5 月 16 ～ 18 日、SCA の要請で蓋石取り上げと木製部材のサンプリングに関して、保存修復の専門家による検証を行うワークショップが開催された。このワークショップでは、日本側の 4 名の専門家および海外から招聘した微生物学の専門家（ステファン氏）がプレゼンテーションを行い、SCA メンバーを交えて協議をした。このワークショップでの合意事項を踏まえ、蓋石取り上げが終了した 9 月～ 12 月にかけて、サンプリング実施のために、ピット上を覆って空調を行うための小テント、ピット内に人間を降ろすためのエレベーター、小テントに合わせた空調システムの改変、サンプル分析用の小さな現場ラボなど、諸設備の建設を行った。

蓋石取り上げ作業

大テント内の設備建設

(2) アブ・シール南丘陵遺跡調査 [2)]

アブ・シール南丘陵遺跡第 20 次調査は 2011 年 1 月 25 日に先発隊が渡航し、調査が開始されたが、エジプト革命のために、日本国外務省から国外退避が発令されたために、調査を延期することになった。

第 21 次調査では、発掘調査を計画していたが、アブ・シール～サッカラ地区の治安の悪化等の理由で、延期を余儀なくされ、遺物倉庫での作業を行った。作業の内容はこれまで発掘した遺物の整理、記録、研究と保存修復作業である。対象とした主な遺物は、イシスネフェルトの石棺片、ファイアンス製品、土器が中心である。イシスネフェルトの石棺片は第 19 次調査の際に埋葬室から移動した数百点の破片で、図像と碑文を手掛かりに接合作業とトレース作業を進めた。同時に修復師の苅谷浩子氏によりフェイシングと接合作業が実施された。今回の作業で倉庫に保管されている大型の破片の接合がほぼ終わり、今後は現在埋葬室に

安置されている石棺本体との接合が課題である。ファイアンス製品に関しては過去の発掘調査で出土したものも含めて、分類と接合作業が進められた。土器については、主にイシスネフェルトのトゥーム・チャペル背後のピットから出土した土器群と日乾煉瓦遺構およびその周辺から出土した第 18 王朝中期の彩文土器の資料化が進められた。

期間中にはアブ・シール南丘陵遺跡の視察も実施した。アブ・シール～サッカラ地区では革命後に遺跡の盗掘活動が横行し、甚大な被害が報告されていたが、幸いなことに我々の現場では被害はなかった。

石棺の接合・保存修復作業

部分接合した石棺片

(3) ダハシュール北遺跡 [3)]

2011 年 8 月の第 20 次調査では、サッカラにあるエジプト考古庁倉庫にて、遺物の整理作業と倉庫収納状況の改善、第 12 次調査時に未盗掘で発見されたセベクハトの人型木棺の保存修復作業を実施した。

整理作業では、報告書の刊行に向けてダハシュール北遺跡第 1 次調査から第 8 次調査にかけての調査で出土したシャブティを中心に実測、写真撮影を行った。またレリーフブロックやステラに加え、ビーズ等の小型遺物の写真撮影を実施した。そのほか、第 16 次調査で出土した木製カノポス壺や木製シャブティの実測も行った。

レリーフブロックが金属製の棚の上に覆いの無い状態で収納されていたため、保存修復の専門家リチャード・ジャスキ（Richard Jaeschke）氏に助言を求め、状況の改善を行った。レリーフブロックの破損を避けるため、金属の棚の上にスポンジのシートを敷き、その上にブロックを置いた。また、直射日光や粉塵がレリーフの上に積もるのを防ぐため、リネンのシートで棚全体に覆いをかけた。

遺物の整理作業

リチャード・ジャスキ氏による木棺修復

セベクハトの人型木棺の保存修復作業はリチャード・ジャスキ氏によって行われた。この木棺は過去の応急的な処置によって、木棺の枠組みにズレが生じており、構造的な歪みが表面の彩色プラスターに悪影響を及ぼしていた。そのため、過去の処置による木棺枠組みの接合や欠損部への綿による充填を取り外し、補強をしながら適切な形に矯正する作業を実施した。今期はほぼ枠組みの矯正と細部の補強に終始した。現状では、過去の処置によって表面に補強のための和紙が貼り付けられている。著しく外観を損なうため、次回の作業で取り外し、保存修復作業を完遂させる予定である。

(4) 王家の谷・アメンヘテプ 3 世王墓調査

早稲田大学エジプト学研究所は、王家の谷・西谷のアメンヘテプ 3 世王墓において 1989 年より調査を継続している。2000 年まで 15 回にわたって行われた考古学的調査に引き続き、2001 年から日本国外務省ユネスコ / 日本信託基金の助成を受け、またユネスコ、エジプト考古最高評議会の協力を得て、保存修復作業を実施している。2006 年からは、これまでの調査で出土した遺物の研究、保存修復が進んだ壁面の記録調査を行っている。

今年度は、2011 年 10 月から、6 ヶ月間の予定で壁画保存修復プロジェクトを実施している。これは 2001 年から開始した作業の継続であり、今期は 1. 天井壁画の保存修復作業、2. 壁、柱の亀裂の補強工事、3. 石棺の蓋の保存修復作業の 3 つを主な作業項目としている。アメンヘテプ 3 世王墓の天井壁画は、他の壁面と同じくコウモリの排泄物や微生物の影響などで汚れており、また岩盤からの剥離による自然崩落、岩盤の亀裂による被害を受けている。これ以上の崩落を防ぐために、まずコンソリデーション（強化処置）を実施し、その後、クリーニングを行い、壁画劣化の原因となるコウモリの排泄物、微生物の除去を実施している。アメンヘテプ 3 世王墓内の岩盤の亀裂の中でも埋葬室（J 室）の壁と柱に大きな亀裂があり、この亀裂の補強工事が必要である。補強工事に先立ち、これまで亀裂の最終的な記録や専門家による計画細部の打合せを行った。今後、実際の補強工事を行う予定である。また、アメンヘテプ 3 世王墓の埋葬室（J 室）には、赤色花崗岩製の石棺の蓋が残されている。度重なる盗掘により、石棺の身の部分は持ちされており、また蓋自体も破壊されている。この蓋の接合、クリーニング、そして展示を予定しており、現在、接合、クリーニング作業を継続している。今後、最終的に全て接合し、台に乗せて展示を行う予定である。その他、これまでにエジプト人および日本人の修復師のトレーニング、壁画に使用された顔料などの X 線分析調査も並行し

天井の修復の様子

柱の状況

て実施した。

これまで継続してきた王墓出土遺物の記録整理作業および X 線分析調査は 2011 年 12 月から 2012 年 1 月にかけて実施された 4)。また、埋葬室（J 室）のアムドゥアト書は、史料化が進められている。今期は、以前の調査で集められた、壁から剥離したアムドゥアト書の破片のデジタル写真撮影を行なった [5)]。

(5) ルクソール西岸・アル＝コーカ地区調査

2011 年 12 月 28 日から 2012 年 1 月 7 日にかけてルクソール西岸のアル = コーカ地区の第 5 次調査を実施した。本調査は、新王国時代第 18 王朝のアメンヘテプ 3 世治下のハーレムの長、ウセルハトの墓 (TT.47) の再発見と調査を主目的としており、第 4 次調査において前室および奥室の天井の崩落の状況を確認した。今次調査では、前回の調査で想定された墓の規模を手掛かりに、前室の奥壁際にあたる位置から発掘を試みた。その結果、前室の奥壁にハワード・カーターが報告し、現在ブリッセルの王立博物館に収蔵されているアメンヘテプ 3 世の王妃ティイのレリーフが本来あった場所とそれに隣接するキオスクの内部に描かれたアメンヘテプ 3 世の図像を再発見したことが最大の成果であった。また、前室内部の状況も確認され、カーターが報告しているように 6 本の角柱が南北に 2 列に並んでいたことが想定された。さらに奥室は、東西 10m、南北 6m の規模をもつ矩形の部屋であることが明らかになった。奥室の南壁の入口に近い部分に壁がんがあり、その中にはウセルハト夫妻とみられる夫婦像が彫刻されていた。カーターは奥室内に 2 本のパピルス柱があったと報告しているが、内部には大量の土砂が堆積しており、詳細については今後の調査の進展が待たれる。これらの調査の過程では、葬送コーンやシャブティなどが出土した。

その他、第 47 号墓に隣接する第 174 号墓、第 264 号墓で壁面装飾の保存修復作業を実施した。

前室奥壁のレリーフ

奥室内部の夫婦像

註

1) 本年の活動は株式会社ニトリ・ホールディングス（似鳥昭雄代表取締役社長）の援助のもとに行われた。
2) 調査は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（S）「エジプト、メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から観た遺跡整備計画の学際的研究」（研究代表者：吉村作治）の助成を受けて実施した。
3) 調査は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（S）「エジプト、メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から観た遺跡整備計画の学際的研究」（研究代表者：吉村作治）の助成を受けて実施した。
4) 調査は日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「古代エジプト新王国時代の王墓の副葬品の研究」（研究代表者：河合望）の助成を受けて実施した。
5) 調査は日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「アメンヘテプ 3 世王墓に描かれた「アムドゥアト書」の史料化のための調査研究」（研究代表者：菊地敬夫）の助成を受けて実施した。

3. 謝辞

2011 年度も早稲田大学古代エジプト調査隊の活動に対し多くの企業様よりご支援をいただきました。ここに記して感謝いたします。

(株) ニトリホールディングス、(株) ダイドードリンコ、(社) 全国優良石材店の会、ＲＫＢ毎日放送 (株)、(株) 熊谷組、(株) エアーリンク、サントリーウエルネス (株)、(株) ポニーキャニオン、(株) ワイズマート、(株) アケト

また、以下の企業様より調査隊支援の御品をいただきました。感謝申し上げます。　（50 音順）

(有) 青坂商店、アサヒビール (株)、江崎グリコ (株)、エム・シー・シー食品 (株)、(株) オーサト、カルピス (株)、共栄製茶 (株)、共同乳業 (株)、キリンホールディングス (株)、グリコ栄養食品 (株)、サントリービア＆スピリッツ (株)、(株) サンライズ、敷島製パン (株)、タカノフーズ (株)、宝酒造 (株)、千葉県酒類販売 (株)、東海漬物 (株)、東京明販 (株)、東洋水産 (株)、利根コカ・コーラボトリング (株)、中松物産 (株)、(株) 西川フーズ、日清オイリオグループ (株)、(株) ノニ２１、(株) ハセガワ、(株) ポッカコーポレーション、(株) ミツカン、(株) ミツハシ、(株) 明治製菓、(株) 桃屋、山崎製パン (株)、三菱食品 (株)

2012 年度も調査に邁進していきますので、ご支援、応援のほど宜しくお願い申し上げます。

編集後記

『エジプト学研究』18 号をお届けします。毎年、1 冊ずつ刊行していき、今年で 18 号目を数える。一度に 18 冊もの出版物を作成することは困難なことであるが、18 年間の積み重ねが、当たり前の話ではあるが 18 冊の成果物を生み出したのである。このひとつずつ継続していくことが学問・研究では不可欠な要素となっているのだ。言うことは簡単であるが、実際に一段一段と階段を踏みしめながら昇っていくことは、根気と努力が必要である。

私たちのエジプトでの調査・研究も同様のことが言えるであろう。吉村先生が、ナイル川流域のジェネラル・サーベイをおこなってから今年で 46 年目を迎える。マルカタ南遺跡の第 1 次発掘調査からでも 41 年目となる。毎年継続しておこなうこと、これが実は大変に難しいことである。20 年以上前に滞在していた英国の大学で、「Step by step」という言葉で先生から励まされていた。少しずつ、毎日、毎日、地道に努力していけば、必ず成果が出ることを言っていただいたのであるが、還暦を昨年過ぎたこの歳になっても、この教えを守っているとは言い難い。地道に努力して継続することの大切さを再認識している。

今号は、ルクソール西岸アル＝コーカ地区岩窟墓群の第 4 次調査とダハシュール北遺跡の第 16 次・第 17 次発掘調査、そして、カイロ郊外のギザ台地で実施されている太陽の船プロジェクトに関する調査概報と調査報告が 3 点、研究ノート 1 点、卒業論文概要 1 点、そして 2011 年度の早稲田大学エジプト学会とエジプト調査の活動報告 2 点となっている。

今回は、調査報告以外の論文や研究ノートが極めて少なかったことは、非常に残念なことであった。次号からは、多くの研究ノートと論文が投稿されることを切に希望するものである。また本 18 号から従来の冊子形式を改め、ホームページ上に PDF ファイルで公開する、いわゆる電子書籍の形式を採用するようになった。経費の削減を目的としたものであり、読者諸兄のご理解・ご協力を賜れば幸いである。

最後になりましたが、今号の編集には、河合　望、馬場匡浩、矢澤　健、熊崎真司の 4 名の諸君が主にあたられた。明記して感謝したい。

2012 年 3 月末日
王家の谷・西谷にて

近藤　二郎
早稲田大学文学学術院教授
早稲田大学エジプト学研究所所長

エジプト学研究　第 18 号
2012 年 3 月 31 日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会
〒 169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104
早稲田大学エジプト学研究所内
発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.18
Published date: 31 March 2012

Published by The Egyptological Society, Waseda University
1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan
© The Institute of Egyptology, Waseda University